

又ナタアシャが、ヴェーラに恋人だと云つて押搦つた、セメエノフスキイ聯隊の將校、中尉ベルグであつた。伯爵はさういふ二人の間に挟まつて、その談話をジツと聞き澄まして居た。伯爵の好きなことは、一番好きなポストンの次ぎには、談話——殊に、自分が二人の話好きな友達の間で議論を初めさすのに成功した場合の——その人々の談話を傍で聞いて居ることであつた。

『もし、旦那、わが最も尊敬するアルフォンス・カアルリイチ』と、クス／＼笑ひながら云つたシインシンの言葉は、極く平易な露西亞の口語と、全く擇り抜きの佛蘭西語の混合であつたのだが、これが、この男の言葉の特徴であつた。『君は、政府から俸給を受けることになつて居ながら、尙その上に君の隊からも何かしら利益を得る氣で居るのかね』

『いえ、ビョートル・ニコライイチ、私は唯だ、騎兵では、利益が、歩兵に比らべて餘程少ないことを知らせ度いばかりなんです。先づ、例へば、私の位地をご覽なさい、ビョートル・ニコライイチ』ベルグはキチン／＼と、極く靜かに、そして、丁寧に談話を爲る男であつた。彼の話は何時でも自分自身に關することはばかりであつた。彼は、何時でも、自分自身に直接何の關係も無い問題が論ぜられるやうな場合には、全然沈黙を守るのであつた。で、彼は、さう

いふ風にして何時間も唯だジツと坐はつた切りで居ても、自分が手持無沙汰になら無いのは元よりのこと、他人にも寸毫も氣の毒とは思はせ無かつた。けれども、談話が彼に直接關係するやうに爲つて來るが最期、彼はドシ／＼如何にも満足さうに話したのであつた。

『私の位地をご覽なさい、ビョートル・ニコライイチ、若し、私が騎兵に居たとすると、中尉であつても、四月目毎に二百留貫らへる切りなんです、所が、今私は二百三十貫らへるんですよ』ベルグは、如何にも嬉しさうな親し氣な笑顔で斯う説明して、彼自身の出世が何時でも誰でも希望の主な目的であるに違ひ無いのだと云はぬばかりの顔付で、シインシンと伯爵を見た。『それに、ビョートル・ニコライイチ、近衛に變りますとね、一層昇進が早いです』と、ベルグは言葉を繼いで、『缺員が歩兵の場合よりは眞然度々出來ます。夫に、私は此二百三十留でなか／＼巧くやつて行くんでからなア。何うです、そのうちを幾らか残して、親父にも送ります』と、又續け、烟の輪を吹き出した。

『違つたものだなア、獨逸人は、斧の頭からでも小麦を打殺すと、露西亞の俚諺にあるせ』、シインシンは斯う云つて、口の他の隅へ烟管を移し、そして、伯爵に胸を爲た。

伯爵は噴飯した。他の客たちも、シインシンが話したと見て、聞きに集まつて來た。べ

ルグは、その連中の冷嘲すやうな顔付や、身を入れて聞いて呉れ無い様子などは、眼に入らずに、やがて、近衛に變つたお陰で、彼は最早既に、普通師團に居る前の同僚より一步進んだ地步を占めたことを説明した、戦時には隊長は屢戦死するものだから、その直ぐ次の地位に居る自分は極く譯無くその缺位を繼ぐことが能きるといふことだ、聯隊で自分は誰にも好れて居ることだの、親父が彼のことをヒドク喜んで居る話だの、先づさういふことを長々と話した。ベルグが左様いふ話を爲て居る態様といふのは如何にも嬉しさうで、他人は誰でもそれぞれ自分々の利害關係を持つて居るものだなど、は、全然念頭に浮ば無いといふ態であつた。が、彼の云ひやうが如何にも心持好く、如何にも熱心で、彼の若者らしい自我主義の率直さが如何にも顯然であつたので、聞き人は誰一人心持を悪くは爲無かつた。

「おい、若衆、君は、歩兵に居やうが、騎兵に居やうが、何時でも旨く行くよ、僕は今から保證つて置くせ」シインシンは斯う云つて、ベルグの肩を叩き、そして、大榻から脚を下ろした。ベルグは如何にも嬉しさうに微笑んだ。伯爵を眞先に、客たちはその後から隨いて、客室へと行つた。

それは、集まつた客が、最早やがて食堂へ呼び込まれさうなものと思つて、長くなる談話は始めやうと爲無いが、と云つて、卓子に就くの待ち遠しがつて居るやうに見えてはならぬと、成るべく動き廻はつて、全然黙まつては居無いやうに爲無ければならぬ、晚餐の始まる前には屢々ある丁度さういふ間時であつた。亭主夫婦は戸の方を見ては、一寸々顔を見合はせた。客は、二人の眼付で、誰を、若くは何を待つて居るのか、判じやうと骨折つた。親類の身分の高い誰かが後れたのか、それとも、料理のうちに出来上ら無い品でもあるのかと。

ビエールは、丁度晚餐の始まる時分に來た、そして、一番近くに有り合はせた安樂椅子に、それが部室の眞中央で、誰の通路にも邪魔になるのも構はず、窮屈さうに掛けた。伯爵夫人は彼に話を爲せやうと力めた、が、彼は、誰か探す人があるとしても云ひさうに、如何にも無邪氣な顔付で眼鏡越しに四邊を見廻はして、伯爵夫人が何を尋ねても、唯だ一言か二言の答を爲るばかりであつた。それが爲めに、座が大分白けて來た、が、彼一人それに氣が付か無かつた。客は孰れも大抵、熊の話を聞いて居たので、この大きい、肥つた、毒の無さうな男を不思議さうに見て、此様な元氣の無い落着いた男が何うして彼様いふ惡戯を爲たものかと、不思議がつて居た。

「ホンの近頃お歸りなんですわね？」と、伯爵夫人が、彼に尋ねた。

「左様です、奥様」

「宅にお逢ひなさいませんでしたね？」

「い、え、奥様」。彼は、場合外れに、微笑んだ。

「此頃まで巴里においでましたのね。なかく面白所でせうね」

「なかく面白いです」

伯爵夫人はチラとアンナ・ミハイロヴナと眼を見合はせた。アンナ・ミハイロヴナは、ビエールを引受るといふのだと氣取つた、で、彼の側に坐つて、彼の父親のことを話した。が、彼はそれにも伯爵夫人同様ホンの一言二言で成り立つた返答しきや爲無かつた。他の客は悉皆一さい幾つもの集團になつて忙しうに話し合つて居た。「ラズモオフスキ家」——「まあ眞個に善いこと」——「まあ親切ですわねえ」——「伯爵夫人アブラキシン」——「斯ういふ切切の聲が方々から聞えて來た。伯爵夫人は起ちあがつて、次の室へ出た。

「マリヤ・ヅミツリイエツナは？」と、尋いて居る伯爵夫人の聲が聞えた。

「私です」と、荒つばい聲が返答として聞こえた、そして、直ぐその後、マリヤ・ヅミツリ

イエツナが部室へ入つて來た。娘連中は勿論、年配の女連中も、極く年寄りの外は、悉皆起ちあがつた。五十歳の肥つた女のマリヤ・ヅミツリイエツナは戸口で止まつて、白髪交りの捲毛のある頭を眞直にして、客を眼下に見渡し、それから、袖口をたくしあげるやうに爲て、緩々と長上衣の廣い袖の形を整した。マリヤ・ヅミツリイエツナは、何時でも露西亞語しきや使は無いのであつた。

「今日のお祝ひの主の奥様とお子さん方のご健康とお幸福を祝ります」と、他の音を悉皆壓してしまふやうな高い量の多い聲で云つた。「さア、お前さん、年老つた罪人」その手に接吻して居た伯爵に振り向いて、「莫斯科には飽きましたらう——犬を伴れて出る所が何處も無い？ 左様、お前さん、何うも仕方が無い。斯ういふ雛鳥どもが大きくなるんだから……」と、娘たちを指した。「厭でも應でも、貴下は、彼等に若い男を見付けて遣ら無きやアなりません」

「これ、私の哥薩克兵？」（マリヤ・ヅミツリイエツナはナタアシヤを何時も哥薩克兵と呼んで居た）、平氣で笑ひながら手を接吻しに出て來たナタアシヤの手を撫でながら、斯う云つた。「お前は眞個に不可い娘だねえ、でも、私はお前が好きさ」

圖抜けた大きな合切袋から、垂下物の付いた琥珀の耳輪を出して、ナタアシヤに遣つた、

ナタアシャの嬉しさうな祝日の顔がボオツと赤くなつた、マリヤ・ヅミツリエヅナは直ぐ振り向いて、ビエールに聲を掛けた。

『もし、もし、此所へおいでなさい、貴下』と、故意と穏和に優しくした聲で云つた。『此所へおいでなさい、貴下……』。そして、事ありげな権幕で、袖をグツと高くたくし上げた。

ビエールは、眼鏡越しに無邪氣に先方の顔を見ながら、傍へ行つた。

『ズツと此方へ、ズツと此方へ、貴下。貴下の御親父が羽振りの好かつた眞最中に遠慮會釋無しに眞實の事を云つたのはこの私だけさ、だから、貴下にもさうするのが私の神聖の義務なんでさアね』。マリヤ・ヅミツリエヅナは言葉を止めた。誰も、これはホンの前置だと思つたので、その後を黙まつて待つて居た。『面白い男さね、眞個に、面白い男さね。……現在の父親が知死期の床に居るのに、散々ばら騒ぎ廻つて、熊の上へ巡查を跨らせるなんてんだもの。情無いことだね、貴下、情無いことだね。お前さんは戦争に行つた方が宜いんだよ』

マリヤ・ヅミツリエヅナは振り向いた、そして、艱然のことで噴飯すのを堪へ切つた伯爵に手を預けた。

『もし、御馳走のお準備は最早出来たでせうねえ、え、』。マリヤ・ヅミツリエヅナは云つ

た。伯爵が、ヅミツリエヅナの手を引いて先立ちをして、直ぐ其後に、伯爵夫人が、ニコラアイを聯隊へ伴つて行つて呉れる筈になつて居たので、重なる客として扱はれた騎兵の大佐に扶けられて續き、その次が、アンナ・ミハイロヴナとシインシン。ベルグはヅエーラに腕を貸し、ジュリエ・カラアギンは微笑みながらニコラアイと歩いた。で、その後へ續いた一對宛の行列は、廣室を横切つてズウツト列んだ、その最詰に、家庭教師や保母に附添はれた小兒連が、一人づゝ歩いて行つた。給仕人はバサ／＼と歩き廻り、椅子の軋る音が爲、客が席に就きだすと、奏樂團が奏しだした。やがて、伯爵の家その樂隊の音楽が、肉刀や肉叉のカチャ／＼いふ音、客の語聲、給仕人の急ぎ足の音などに、没せられて了まつた。伯爵夫人が卓子の一端を主宰した。右側はマリヤ・ヅミツリエヅナ、左側はアンナ・ミハイロヴナで、それから、他の女客がズツと列んで居た。他の一端には、伯爵が、驃騎兵の聯隊長を左にし、シインシン及び他の男客を右にして、坐はつた。大きい卓子の片一方の側に、若い連中のなかの大きい方が坐はつた、ベルグの側にヅエーラ、ポリイスの側にビエールと云ふ風に。も一つの側には、家庭教師や保母に付き添はれた小兒たちが居た。伯爵は、上硝子の壺や果實皿の間から、水色リボンで飾つた白い帽子を冠つた妻の顔を覗き、精出して、隣りの人々に酒を注いで遣り

ながら、自分の分を忘れは爲無かつた。伯爵夫人も又、亭主としての義務には十分氣を付けて居ながら、鳳梨の間から夫を意味ある眼付で一寸々々見遣つたのだが、夫の顔が、禿頭が白髪に對照されて一層赤く見えるやうに思つた。女客の側には談話の調子の好い吐きが有つたが、卓子の他の側では、男の聲々がだんくんと高くなつた、就中、驃騎兵の聯隊長の聲が一段高く聞えた、聯隊長は、だんくんと赤くなつた、到頭伯爵が彼を模範として皆に示めすやうになつた位にまで、飽まで喰ひ、飽くまで飲んだのであつた。ベルグは優しい笑顔で、戀愛は此世のものでは無く天の感情だと話して聞かして居た。ポリイヌは新たに友達になつたビエールに、客の名を教へて居ながら、眞向に居たナタアシャと一寸々々眼を見合はせた。ビエールは餘り談話を爲無いで、知ら無い人々の顔を見廻し、そして、多量喰つた。スツブ二種のうちで彼はトルチユウを擇んだ、それから、魚バスチイから山鶏までの間のいろ／＼な料理で、一皿も斷つたのは無かつた、そして、膳部掛が、隣の人の肩の上から口拭巾に纏んだ壘を神祕なものやうに突き出して、『生マデイラ』とか、『ハンガリイ』とか、『ライン酒』とか吐ぶやいて、勸める酒を、何んな種類のも適がさず引受けた。何の客の前にも置いてあつた伯爵の紋を刻んだ四つの上硝子の杯のなかから、手當り放題に酒盃を取つて、酒を味はひ／＼飲んだのだが、客を見詰

める彼の顔は宴會が進むに随つてますます愛嬌深くなつて行つた。眞向に坐つて居たナタアシャは、十三歳の娘が、ホンの少し前に接吻を取り換した、自分の甚く愛して居る男の子を見詰めるやうに、ポリイヌを見詰めた。その見詰める視線は時々ビエールの顔へと追よつた、そして、小さい娘の可笑しさうな、上氣した顔を見ると、彼は、何故とも知れず自分も笑らひ度くつて堪まら無い氣が爲たのであつた。

ニコライイは、ソオニヤとは餘程離れて、ジュリイ・カラアギンの側に坐はつて、矢張り前のやうな我知らずの笑顔で、その娘と話して居た。ソオニヤはお付合ひの微笑を含んで居たが、嫉妬に悶へて居るのが見え透て居た、乍ち蒼くなると見るうちに、直ぐ、赤くなつた、そして、その全力が、ニコライイとジュリイが何を話して居るのか、聞き取らうと爲るのに集中されて居た。保母は、受持の小兒たちを少しでも侮どるやうな眞似を爲るものが有つたら直ぐ喰つて掛るぞと云はぬばかりの顔付で、四邊をキョト／＼見廻して居た。家庭教師の獨逸人は、料理や、後附や、酒の種類を悉皆覚えて置て、後で、故郷の獨逸の知人どもに詳しい手紙を遣る積りで居たので、口拭巾に纏るんだ壘を持つた膳部掛が自分の所へは壘を出さずに通り過て了つたのが、甚く癢に觸つた。獨逸人は眉を擡めて、自分はその酒を受ける氣は無いのだと見せやうと力め

ては居たもの、自分が、その酒が欲しいのは、それで渴きを止めやう爲めでも無く、又唯だの慾張りからでも無く、全く何んなものだか知つて置き度いといふ綿密な知識欲からに外ならぬのを、誰も察して呉れるものはあるまいと思つて、心を惱ませたのであつた。

(十七)

男連中の居た卓子の側では、だんく、談話に身が入りだして居た。聯隊長は、宣戦の布告が最早彼得堡では出て居て、自分は現に、其の日總司令官の所へ急使が持つて来た分を見たと言つて居た。

「何だ筈棒な、ボナバルトと戦を始めるなんて、其様な馬鹿なことを誰が思ひ付いたんだい？」と、シインシンが云つた。「奴は最早既に埃地利を回まして了まつたやア無いか。今度、此方の順番に爲ら無きやア宜いと思つて居るんだに」

聯隊長は、肥つて、背の高い、多血質の獨逸人であつたが、それでも、何處までも軍人で、愛國者であつた。彼はシインシンの言辭が癢に觸はつた。

「何故かといふ理由は、貴下」と、獨逸訛の多い言語で云つて、「陛下が貴下の今仰つしやつ

た事態を善く御承知であればこそですぞ。布告のなかには、露西亞の上に迫り来る危険、帝國の安康、その國威及び、その同盟の神聖を危くするが如き事態を坐視遊ばさるゝことは能きぬと、仰せられてあります。彼は、布告全體の意味の中心が唯だその一語の上に懸つて居るとでも云ひさうに、「同盟」といふ語を甚く力を入れて云つた。それから、この男の特質の、公務上の事柄に對する綿密な記憶力で、布告の前提の言詞を繰り返した……「此に於て、皇帝の唯一の動かすべからざる企圖、即ち、確乎たる基礎の上に平和を建てんとする所斯は、彼をして、國外に兵師の一部を派し、以て、この新企畫の遂行に力むるに、決せしめた。これが開戦の理由です。貴下、彼は斯う結んで、勿體振つた態度で酒盃を一息に仰飲つて、賛同を求めるやうに伯爵の方を見た。

「貴下は、エレマ、エレマ、家に引込んで、自分の鍾に氣を付けろ」といふ俚諺をご存じかね」と、シインシンは、顔を顰め、直ぐ又微笑みながら云つた。「それが、髮一本の差違も無くわれ〜に適合まるんです。ねえ、スヴォーロフでさへ〜と敗れて了まつたやアありませんか、現代のスヴォーロフは今何處に居ますかね？。伺ひ度いものですか？」露西亞語かと思へば、乍ち佛蘭西語になり、直ぐ又元へ返へる、始終さういふ言葉使で、斯う云つた。

「われは、われは、われは、一滴でも残つて居るうちは戦闘を止てはならん」、と聯隊長は卓子をドンと云はせて、云つた。「大君の爲めに死なんければならん、さうすれば、何も云ふことは無いんぢや。そして、議論はなるべく少く」、又伯爵に振り向き、成る可くといふ語を引張つて云つて、斯う結んだ。「われは、老驃騎兵は事態を斯う見ます、われはの云ふべきことは唯だそれだけぢや。君は何う思ふね、其所な若い人、若い驃騎兵」と、戦争の議論が始まつたと見て取つて、ジュリエとの談話をバツタリ止めて、聯隊長の顔ばかり見詰めて耳を引立て居たニコライイに向いて、云ひ足した。

「全く御同意です」と、ニコライイは、クワツと赤くなつて答へて、現に今非常な危険な地位にでも居るかのやうな必死を極めた顔付になつて、皿を捻り廻したり、酒盃の位置を更たり爲た。「露西亞人の覺悟は、勝つか、で無くば、死ぬかの二つ一つだと確信して居ります」と、彼は云つた。が、彼自身も、さう云つて了まつた後では、其場の他の人々と同じやうに、餘まりに場外れの熱心で云ひ過ぎたと氣が付いたので、後は何と無くモヂ／＼して居た。

「貴下の今云つたことは、立派な言辭よ」と、側に居たジュリエイが、熱心に云つた。ソオニヤは、ニコライイが物を云つて居るうちは、身體ぢう慄へ、耳、耳の後、それから、頸から肩へ掛けて眞赤に爲つた。ビエールは、聯隊長の言辭をジツと聞いて居て、賛成さうに、頭を頷かせた。

「立派な考だ」と、彼は云つた。

「君は眞の驃騎兵ぢや、若者」と、聯隊長は再卓子をドンと云はせて、叫んだ。

「其所ぢやア何事で其様な騒ぎを爲て居るんだね」と、卓子の向側から尋くマリヤ・ヅミツリイエツナの濁聲が不意に聞えた。「何の爲めに、卓子をドン／＼云はせるんですか」と、聯隊長に言葉を掛けた。「誰に向いて、さう憤然となつておいでなさるね。佛蘭西人が直ぐ其所へ來たやうに思つておいでのやうですな」

「私は眞實を云つて居る所です」と、驃騎兵の聯隊長は、微笑んで、云つた。

「悉皆戦争の談話ですわい」と、伯爵が卓子越しに叫んだ。「家の件が出ますんです、マリヤ・ヅミツリイエツナ、ねえ、家の件が出るんです」

「でも、私は息子を四人軍隊に出してありますよ、けれども、悲しいとは思ひませんよ。世の中のことは悉皆神様の御手にあるのですわね、家の裡でも死ぬものは死にます、戦場だつて、神様のお助がありませう」と、卓子の向側から有りながら、マリヤ・ヅミツリイエツナの深い

聲は、何の苦も無く此方へ唸り返つた。

『全くです』

で、談話は又元の通り、二つの集團に片寄つて了まつた、一つは婦人の卓子の側、一つは男子の側の側といふ風に。

『貴女に何うして尋けるもんですか』と、小さい弟がナタアシヤに云つて、『貴女は必然尋きやア爲無いや』

『私尋くわ』と、ナタアシヤが答へた。顔が不意に赤くなつて、必死になつたやうな、冷嘲すやうな思ひ切つた表情に爲つた。起ちあがつて、ビエールに聞いて居ろといふやうな胸を爲て、母親に聲を掛けた。

『母上様』と、ナタアシヤの小兒らしい胸聲が、卓子を横断つて響き渡つた。

『何です？』と、伯爵夫人はギョツとして尋いた、が、娘の顔付で何か悪戯だなど見て取つたので、叱り付けるやうな態に頭を動かし、娘の方へ向けて荒々しく手を振つた。

何處の談話もビタリと止んだ。

『よう、母上様。何んなブデンが出るの？』。ナタアシヤの小さい聲が、更に斷乎と落着て

響いた。

伯爵夫人は睨めやうとしたが、さう能き無かつた。マリヤ・ヅミツリイエヅナは太い指を振つた。

『哥薩克兵』と、嚇すやうに云つた。

客の大半は、この悪戯を何う爲るだらうと、両親の顔ばかり見て居た。

『今にご覧なさいよ』と、伯爵夫人が云つた。

『母上様。何んなブデンが出るの？』と、最早自分の悪戯は悪戯で通るに違ひ無いと安心して、ナタアシヤは、大膽な無遠慮な笑聲で叫んだ。ソオニアと肥つた小さいベエチャは、艱然噴飯すのを堪らへて居た。『尋いたでせう』と、ナタアシヤは小さい弟とビエールに呶き、再ビエールの顔をジツと見た。

『アイヌ・ブデンだよ、けども、お前には遣りません』と、マリヤ・ヅミツリイエヅナが云つた。ナタアシヤは何にも恐いことは無いと見て取つたので、マリヤ・ヅミツリイエヅナをさへ恐がら無かつた。

『マリヤ・ヅミツリイエヅナ。何んなアイヌ・ブデンなの？。私アイヌ・クリイムは嫌ひよ』



「カアロフト・アイス」

「いゝえ、何ういふ種類なの、マリヤ・ヅミツリエヅナ、何ふいふ種類なの」と、ナタシヤは、殆ど絶叫した。「さア教へてください」。マリヤ・ヅミツリエヅナも伯爵夫人も噴飯した、客もそれと一緒に哄と笑つた。誰も彼も、マリヤ・ヅミツリエヅナの返答には無く、マリヤ・ヅミツリエヅナを左様な風に凹ますだけの氣象と頓智を持つて居たその少さい娘の壓伏し難い大膽と氣轉とに笑はせられたのであつた。

ナタアシヤは、鳳梨アイスだと聞かされるまでは止め無かつた。氷の前に、シャンパンが廻はされた。再、樂隊が奏でた、伯爵は伯爵夫人に接吻した、で、客は卓子から起つて伯爵夫人を祝し、伯爵から始め、次に、小兒たちに對し、それから、相互間といふ順で、卓子越しに酒盃を打合せた。もう一度、給仕人たちが駆け廻り、椅子が床を軋り、といふ前と同じ順序で、赤い顔になつた客は、客室や、伯爵の書齋へと返つた。

(十八)

骨牌卓子が開かれた、ボストンの組々が出来た、そして、伯爵の客たちは、二つの客室と、

喫煙室と、それから、書庫へ、思ひ／＼に陣取つた。伯爵は、扇形に骨牌を廣げて持ちながら、艱然のことで、何時もの晩餐後の假睡に落ち無いで居て、何を見ても、ハア／＼笑つて居た。若い連中は、伯爵夫人の發議で、クラブビゴオドとハアアの周圍に集まつた。一番にジュリエが衆皆に要請まれて、バアアで變調の有る曲を一つ弾いた。それから、他の若い婦人連中と一緒になつて、樂才があるといふ評判の高かつたナタアシヤとニコラアイに何か歌つて呉れと頼んだ。成人であつたかのやうに誰からも扱はれたナタアシヤは、確にそれが得意らしくも見えしたが、又それと共に、羞縮もしたのであつた。

「何を謔んですか」と、尋いた。

「あの「泉」と、ニコラアイが答へた。

「左様、では、大急ぎでやら無きやア。ポリイス、おいでなさい」。斯うナタアシヤは云つた。「けども、ソオニヤは何處？」。ナタアシヤは見廻した、そして、その友達がその部室に居無いのを見て、探がしにと駆け出した。

ソオニヤの部室へ駆け込んで、其所にも居無かつたので、今度は、小兒部室へ駆け込んだ、ソオニヤは又其所にも居無かつた。ナタアシヤは、ソオニヤが廊下の大箱の上に居るに違ひ無

いことを知つた。廊下の大箱は、ロストオソフ家の若い女姓連中の愁嘆場所であつた。左様、ソオニヤは箱の上で、桃色薄紗の上衣を、年取つた伽女の汚れた縞の羽毛蒲團の上に押し潰すやうにして、突つ伏して居た。顔を指で隠して、ソオニヤは歎息して居て、小さい露出の肩が波を打て居た。終日中嬉しさうで、イキリ立て居たナタアシャの誕生日顔が倏忽變つた、眼はジツと据はつたやうになり、それから、太い頸が震へ、そして、唇の隅がダレ下つた。

「え、ソオニヤ。何なの……。貴女何うしたの。あーあーあ……。で、ナタアシャは、大きい口をアングリ開き、太く醜い顔になつて、自分でも何故とも解からず、唯だソオニヤが泣いて居たといふ譯ばかりで、幼児のやうに泣いた。ソオニヤは頭を擧げて、返答しやうと試みたが、それは能き無いで、ますます突つ伏して了まつた。ナタアシャは、水色の羽毛寢床の縁に坐り、その友達を抱締めながら、泣いた。ソオニヤは、艱然のことで、起き直つて、涙を干かして、話した。

「ニコリインカが一週間の内に發つたよ……。彼の人の……。命令書が……。來たの……。自分で私にさう云つたの……。でも、私それで泣く積りぢやア無かつたの……。」「ソオニヤは手に携つて居た紙を見せた、それにはニコライの詩が書いてあつた。」「私泣くんぢやア無かつたの、で

も、貴女にだつて……。誰にも解から無い……。何んなに好い心の人なんでせう」

で、再ソオニヤはニコライの心が何んなに立派だかといふことを考へ出して泣き沈んだ。

「貴女の方は大丈夫よ……。私嫉みは爲無くつてよ。私ポリリスも貴女も好きなの。少し自分を落着かせて、斯う云つた。」「ポリリスは眞個に好い人ねえ……。貴女がたの方は寸毫も難づかしいことは無くつてよ。だけれども、ニコライは私の従兄でせう……。市總祭自身が……。爲て……。で無ければ、何うしても駄目よ。だもんで、母上様に云へば。」「ソオニヤは伯爵夫人を母親と頼み、又現に母親と呼んで居たのだ。」「母上様は、私がニコライの出世を邪魔するんだと仰しやるだらうし、私を人情の無い、恩知らずだと仰しやるでせう、けれども實際は……。神様に誓つて。」「ソオニヤは十字を切つた。」「私母上様をそれはく大切に爲てるのよ、それから、貴女たち悉皆にだつて左様だわ、唯だヴェーラだけは……。何故でせう。私何を彼女に爲したでせうね？ 私貴女たちの爲めなら、何んな物だつて犠牲に爲やうと思つてる位、貴女たちを有り難く思つて居るんだわ、でも、私何にも持つちやア居無いんですもの……。」「

ソオニヤはそれ以上を云ひ得無かつた、そして、再、両手を當てた顔を羽毛寢床のなかへ埋めて了まつた、ナタアシャは慰めやうと力めた、けれども、ナタアシャの顔は、その友達の心

配の苦しさを十分に解したことを示めて居た。

『ソオニヤ』と、ナタアシャは、従姉の心配の真因を推量し得たとしても云ひさうに、不意に云つて、『ヴェーラが晚餐が始まつてから以來、貴女に何か云つたんでせう、必定？。左様？』

『左様なよ、斯ういふ詩をニコライが書いたのよ、私他のも寫しといたの、するとねえ、彼女が、それが私の机の上にあるを發見けたの、そして、母上様に見せると云ふの、それから、私は恩知らずだつて、母上様はニコライに私と結婚することを許さ無いで、ニコライはジュリエと結婚するんだらうつて、云つたのよ。ねえ、ニコライは今日は始中終ジュリエの傍にばかり寄つてたでせう。……ナタアシャ。何故でせうね』

で、又ソオニヤは尙一層甚く戯けた。ナタアシャはソオニヤを引き起して、抱き締め、そして、涙の間から微笑みながら、慰め始めた。

『ソオニヤ、彼女の云ふことなんぞ眞に受け無くて可いことよ、ね、眞に受けちやア不可いわ。ニコライと、私たち三人で以つて、喫煙室で、晩食の後で話し合つたことを貴女覚えて居て？。えゝ？。何うするのが宜いかあの時極めたぢや無いの。何う極めたんだか、私今全然は覚えちや居無いんだけど、貴女覚えて、大丈夫行く筈ぢやア無かつたの。そら、シイ

ンシン伯父さんの弟は、第一位従妹に結婚したぢやありませんか、私たちの方は第二位従兄姉妹なんでせう。ポリスはそれは造作無くやれちまうと云つてよ。全然彼の人に私話したわ、ね、彼の人はそれはく、伶俐で善い人なんですもの』と、ナタアシャは云つた。……『泣か無いでね、ソオニヤ、可愛い、私の大好きな、大切の大切のソオニヤ』と、笑ひながら、ソオニヤに接吻した。『ヴェーラは意地悪よ、彼奴のことなんぞ氣に掛け無いでね、大丈夫心配することは無くてよ、ヴェーラは母上様に話しやアし無くてよ。ニコラインカが自分で母上様に話すわよ、ニコラインカはジュリエのことなんぞ一度も何とも思やアし無くてよ』

で、ナタアシャはソオニヤの頭に接吻した。ソオニヤは起き上がった、で、仔猫が甦へつた、眼を煌めかし、尾を振り、和がな前脚で跳びあがり、生れ付きの仔猫の爲方通りに、玉を弄ばうといふやうな心持になつたらしかつた。

『貴女左様思ふの？。眞實に？、全くなの』上衣と髪を直しながら、ソオニヤは斯う速語に云つた。

『眞實に、全くよ』と、友達の頭の太い髪のはつれた所を直しながら、ナタアシャは答へた、そして、二人とも笑つた。『さア、早く来て、泉をお話しなさいよ』

『行きませう、さア』

『で、ねえ、私の向ふに坐はつてた彼の肥つたビエールを貴女知つて、眞個に可笑しい人なのよ』と、ナタアシヤは、止まつて、不意に云つた。『あ、眞個に面白いわよ』で、ナタアシヤは、廊下を駆け出した。

上衣から羽毛屑を拂ひ落とし、詩を胸衣の、小さい喉と、突き出た胸骨との間の所へ挿し込んで、ソオニヤは、顔を赤くして、軽い足調で、ナタアシヤの後に隨いて、廊下を喫煙室へと駆けた。客の所望に任せて、若い連中は『泉』といふ四部合唱を歌つた、誰も彼もそれを面白がつた、それから、ニコライが、此頃覺えた歌を誦つた。

『月のやみしき光の下に、』

一人し思ふぞげにこゝちよき、

愛しき人一人尙世にありて、

我をのみ懐ひ、我をのみ夢み、

美し小指今宵もまた往時のごと、

黄金造りの立琴の面にさまよひて、

美しくしき、熱籠もる樂を奏で、

そが傍にと我を呼ぶらん、

明日よ、さなり、幸福は近づきぬと、

されど、あはれ、物皆過ぎ去りぬ、

我が女早世に在らず』

ニコライがこの歌の最後の行を誦し切るか切らぬかに、若い連中は、大廣室で舞踏を始める支度を爲だした、そして、樂隊は、奏樂席で、足踏を爲、咳嗽拂ひを爲始めた。

ビエールは客室に坐はつて、シインシンが、外國から歸つたばかりの男には面白からうと思つて、話して呉れて居た時事談を、寸毫も面白く思はぬながらも、聞いて居た。他の五六人が談話に加はつた。奏樂團が奏し出すと、ナタアシアが客室へ入つて来て、顔を赤くして、笑ひながら、ヅカ〜とビエールの傍へ行つて、『母上様が、貴下に踊つて頂けて云ひました』

「私が入ると全體の型を崩してしまふでせう」と、ビエールは云つた。「ですが、貴女がお師匠さんに爲つてくださるんなら……」で、太い腕を、相手の背に合ふやうにズツと低く下げて、細そりした小さい娘に手を貸した。

踊る連中が立場を極め、樂隊が調子を合はせて居る間、ビエールは小さい相手と一緒に坐はつて居た。ナタアシャは如何にも嬉しうであつた、自分は、今成人、而かも外國から歸つたばかりの人と踊るのだもので、誰にも見える所に坐はつて、成人のやうに彼と話して居た。ナタアシャは、誰か成人の婦人から持つて居て呉れと頼まれた扇を手に携つて居た、で、恐ろしく氣受つた態付（何時何處で覺えたのか）で、扇使を爲ながら、顔全體で微笑みながら、相手と話して居た。

「太した娘さんだね。見て遣つて下さい、見て遣つて下さい」と、大廣室を横断りながら、老伯爵夫人が、ナタアシャに指し、云つた。ナタアシャは赤くなつて、笑つた。

「あら、何なの、母上様？。何で笑ふの？。何がヘンなのよ？」

三番目の蘇國振の最中に、伯爵とマリヤ・ヅミツリイエヅナが勝負して居た客室の方では、

椅子の動く音がガタ／＼した、そして、自分の好い客や、年取つた連中の大部分は、長く坐つて居た後の伸身を爲て、紙入だの、財布だのを衣囊へ戻して、大廣室の戸口へ出て來た。眞先にマリヤ・ヅミツリイエヅナと伯爵が、兩方とも如何にも晴々しい顔色で來た。伯爵は、バレエの踊子のやうな調戲た態と氣な勿體振つた風で、輪のやうに張つた腕をマリヤ・ヅミツリイエヅナに貸して居た。彼は、身體を眞直に伸ばし、顔はヘンな嬉しうな心得顔の微笑で輝いた、そして、蘇國振の最後の型が了まうや否や、奏樂團に向けて手を叩き、「セエミイオン、」ダニエル・クウバアを知つて居るかい」と、第一ヴァイオリンに叫んだ。

それが、伯爵が若い時分に踊つたお箱の舞踏であつたのだ。（ダニエル・クウバアといふのは英國振の一つの型の名であつた）。

「父上様をご覧なさい」と、ナタアシャが、部室全體へ叫んだ（自分が成人の相手と踊つて居たことを全然忘れてしまつて、で、膝に觸れるばかりに、捲髪の頭を潜ぐらせて、廣室の隅隅まで響くやうな聲で笑ひ出した。勿論、廣室の人は誰も彼も、浮れ出したその老紳士を面白さうな笑顔で見居た。伯爵は、自分よりも背の高い、如何にも氣高い態の相手のマリヤ・ヅミツリイエヅナの側に立つて、兩腕を輪に曲げ、音樂に合せて、それを揺り、肩を動かし、兩

脚を廻して、踵で軽く床を叩き、そして、圓い顔にホヤ／＼微笑を湛えて、いよ／＼始めるぞといふ態様を見物人に見せた。奏樂團が、軽快な露西亞のツレバアクに何處か似通つたダニエル・クウバアの陽氣な何うしても靜然しては居られぬやうな調子を奏しだすや否や、大廣室に通ふ有らゆる戸口は、倏忽、家の耕奴の微笑を含んだ顔で一杯に爲つた——男連は一つの側、女連は他の側といふ風に別れて——彼等は、主人の浮かれるのを見に來たのだ。

『旦那だ、旦那は驚のやうに豪いんだ』と、年取つて乳母が高聲で云つた。

伯爵は舞踏は上手であり、自分でもそれを知つて居た、けれども、彼の相手は寸毫も踊れず、又善く踊らうといふ氣も無かつた。マリヤ・ヅミツリイエヅナの大きい勿體のある身體は、大きい腕を兩側へブラリとさせて、(合切袋は伯爵夫人に預けたのだ)、真直に立つて居た。踊つて居たのは、その嚴ぶかし氣な奇麗な顔ばかりであつた。伯爵の身體ぢうに表はれたことが悉皆、マリヤ・ヅミツリイエヅナの方では、だん／＼輝いて來るその顔色とヒク／＼する鼻とで表はされたのであつた。伯爵は精力を益々多く費して、撓やかな脚で人の意表に出るやうな自由自在な趾頭旋回だの跳返を行なつて見物人を魅して居る間、マリヤ・ヅミツリイエヅナは、全く無造作に、肩を一寸々動かして、腕を彎げなどしながら、足で音樂に合せて調子を取つて居

たのだが、さういふ所が、その婦人の勿體のある體姿と平常の威かつげな起居舉動に對照すると、誰にも甚く面白く思はれて、なか／＼強い印象を人々に與へた。舞踏は益々勢付いて來た。他の舞踏者たちは寸毫も見物人の注意を惹くことは能き無かつたし、又惹かうとも爲無かつた。總ての注意が伯爵とマリヤ・ヅミツリイエヅナの上に吸収された。ナタアシヤは、四邊に居た誰でも袖や長上衣を引張つて、父親を見させやうと爲て居たが、皆は、それを待つに及ばず、前から二人の舞踏者から眼を離さ無かつた。舞踏の間が來ると、伯爵は深い息を吐いて、手を振つて、もつと調子を早めると樂隊に叫んだ。だん／＼速く、だん／＼輕る／＼と、今爪頭で廻り、今踵で廻りながら、伯爵はマリヤ・ヅミツリイエヅナの周圍を踊り廻はつた。到頭相手の婦人を元の位置へ廻し戻し、撓やかな脚を後へ蹴上げ、汗みづくになつた頭と笑顔で、點頭を爲、右の腕を廣くグルリと廻して、ナタアシヤの笑聲が就中一番高く聞えた喝采と笑聲の裡に、踊り納めた。二人の舞踏者は突つ立つたなりで、大きく息を吐きながら亞麻の手巾で顔を拭いた。

『先づ斯ういふ風に前日には踊つたものです、貴女』と、伯爵は云つた。

『ダニエル・クウバア萬歳』と、マリヤ・ヅミツリイエヅナは云つて、袖をたくし上げ、深い

長い息を吸った。

## (十九)

ロストオフ家の舞踏室で、人々が六番目の英國振を踊り、樂隊が疲れて来て調子外れを奏し、疲れた従僕や料理人どもが夜食の準備を爲て居たのと丁度同じ時刻に、伯爵ベズウホフは辛中の六度目の發作に襲はれた。醫者たちは、最早回復の望は全く無いと宣告した、病人は不省のうち、贖罪式と聖禮を受けた。末期の塗膏式を行ふ爲に、種々準備が爲れて居る最中で、家中、斯ういふ場合の常の、間時の混雑と不安が満ち渡つて居た。戶外では、葬儀商どもが門の内を集まつて、乗り付けて来る馬車から見られ無いやうに氣を付けながら、伯爵の葬式に就て善い注文を受けやうと熱心に待ち付けて居た。伯爵の容體を尋ねに、絶えず副官をよこして居た莫斯科總督が、カザリン朝の名たる大身伯爵ベズウホフに最後の訣別を告げる爲めに、その晩自身來たのであつた。

壯麗な應接室は一杯であつた。總督が、病人と差し向ひで半時間居てから、病室から出て來た時には、客は残らず謹んで起ちあがつた。人々の目禮に極く幽に會釋して、彼は、醫者、僧侶、親戚などの目前を能きるだけ速く遁れやうと骨折つた。此二三日以來だん／＼蒼く瘦せて來た伯爵ヴァシイリは、總督を送つて出た、そして、小聲で何事か二三遍繰り返して彼に云つた。

總督を送つて了まつてから、伯爵ヴァシイリは、唯一人廣室の椅子の上で、片脚を高く重ね膝に肘を置き、そして、兩手で眼を隠して、坐つて居た、暫時左様爲て居てから、起ちあがり、平常よりは速い歩調で、長い廊下を横斷り不安な眼付で四邊を見廻しながら、一番上の公爵嬢の部室をさして、家の奥へと行つた。

公爵が後にした薄朦然した明りの應接室——病室の次の室——の人々は、切れ／＼の呬語で話し合ひ、やがて、黙まり、そして、末期に近づいて居る人の部室へ通ふ戸が、誰か入るか、出るかで、軋る度毎に、待ち設けるやうな尋ねるやうな顔でその方を見た。

『人間の壽命は』と、何かしら僧職の者だらうと思はれる小男が傍に坐つて自分の話を無邪氣に聞いて居た婦人に云つて、『人間の壽命は極まつて居るものでして、その極り以上に出ることは決してございません』

『末期の塗膏式が間に合ふでせうかねえ』と、その婦人が、相手の職名を云ひながら、この

事件には自分自分説を持つて居るのだといふ態で云つた。

「それは神祕です。貴女」と、僧職の男は、丁寧に梳いた半白の髪が少しばかり残つて居る禿頭の上を撫でながら、答へた。

「彼は誰です。總督自身なんですか」と、部室の他の隅では、尋いて居る人々があつた。「何て若く見える人なんでせう」

「あれで、六十歳を越してゐるんです。……伯爵は最早誰も分から無く爲つてるといふぢやアありませんか、ねえ？末期の塗膏式を爲る積りなんでせうか」

「私の知つた者で、末期の塗膏式を七度受けたのがありますよ」

二番目の公爵嬢が涙を眼に溜めて、病室から出て来て、カザリンの肖像の下の卓子に腕を載せて形の好い態様に坐はつて居た國手ロオレンの傍へ坐はつた。

「極く好い天氣で、醫者は天氣の間に佛蘭西語で斯う答へた、『極く好い天氣です、公爵嬢、それに、莫斯科では、宛然田舎に居るやうな好い心持です』

「え、眞個に左様ですね」と、公爵嬢は、溜息しながら、云つた。「何か飲む物を上げては？」  
ロオレンは少時考へた。

「薬は上りましたね？」

「え、」

醫者は手控を見た。

「白湯を一杯に中へ一摘み」(華奢な指で一摘みが何れ程だかを見せて)「酒石英をお入れなすつて」

「決して無いことなんぢやが」(獨逸人の醫者が、副官に、片語の露西亞語で斯う云つて)「第三の發作以後回復することはね」

「實に強い體質に違ひ無い」と、副官は云つて、「で、この大財産が一體誰のものになるでせうなア？」、呟語で斯う云ひ足した。

「候補者が幾人か直に出て来るわい」と、獨逸人は、微笑みながら、答へた。誰も彼も再戸の方へ向いた、戸は軋つて、ロオレンの指圖通りの飲み物を拵へた二番目の公爵嬢が、それを病室へ持つて行つた。獨逸人の醫者は、ロオレンの所へ行つた。

「明日の朝まで保つちやらうかね」と、滅茶苦茶な佛蘭西語で尋いた。

ロオレンは、屹と結んだ唇と、嚴づかし氣な顔で、鼻の前に指を動かして、否定の意味を



知らせた。

『今夜、それよりは保たん』病人の状態を過またず診断して、それを明言することの能きるのを得意に思ふ落着た笑顔で、低聲に斯う云つて、そして、歩いて行つて了まつた。

其様なことの有つて居る間に、公爵ヴァシイリは公爵嬢の部屋の戸を開けた。

部屋の裡は薄暗かつた、聖晝の前に唯だ二つの夜燈が點いて、香と花の好い香がして居た。

部屋は何處も彼處も小形の道具ばかりで、小さい戸棚、小さい本箱、それから小さい卓子といふ風に何でも小さかつた。衝立の陰には、高い羽毛褥の寢床の白い被褥が見えた。小さい犬が吠えた。

『あゝ、貴下でしたか』

公爵嬢は席を起つて、髪を撫で付けた、この嬢の髪は、何時でも——今でさへ——頭と續いた一つ物であり、そして、假漆でも塗つてあるかのやうに、非常に滑つくく見えるのであつた。

『何か有りましたか』と、公爵嬢は尋いて、『私始終気が氣で無いんですよ』

『何でも無い、何も變りは有りません。唯だ小許話し度い用件があるので來たんです、カチ

イシ』と、公爵は云つて、公爵嬢が今離れたばかりの低い椅子にさも草臥た態で、坐つた、『此所は實に暖かだね、でも』と、彼は云つた『さア、此所へお坐はりなさい、それで話させう』

『何か有つたのかと思つたもんですから』公爵嬢は斯う云つて、石のやうな嚴ぶかしさうな表情は寸毫も變へずに、公爵の向ふに坐はつて、聞く心構を爲た『少許でも眠て置かうと爲たけれども、全然駄目でしたよ』

『ねえ、貴女』と、公爵ヴァシイリは云つて公爵嬢の手を摺り、持ち前通りに、それを下へ曲させた。

この『ねえ』が、この二人が雙方とも言詞に出さずに了解したさまじくなことを指すものであつたことは明白であつた。

胴が不釣合に長い、瘡せた眞直な體姿の公爵嬢は、飛び出した灰色の眼に何の感情の表徴も見せずに、唯だジイッと公爵を見た。頭を振つて、そして、溜息しながら、聖晝の方を見た。公爵嬢の身振りは、悲哀と諦めの表情とも、又疲勞から速く通れ度いといふ望みの表情とも、孰らとも解せられるのであつた。公爵ヴァシイリは、それを疲勞の方と取つた。

『で、私の方が少しでも樂だと思つて居ますか』と、公爵は云つた『宛然驛遞馬のやうに疲

れて居るんです。今是非貴女と話し合は無ければならん事があるが、カチイシ、極く大切な事ですね」

公爵ヴァシイリは、止まった、頬部が両方更りがはりに癒撃つて、此の人が何處のでも客室に居る時の顔の上では決して見ることの能き無かつたやうな不愉快な表情を出した。眼も平常とは違つて居た、今倨傲な調戯けた態で見詰めるかと思へば、乍ち、コン／＼と見廻すのであつた。

公爵嬢は、瘠せた萎びた手で、膝へ犬を引上げて、公爵ヴァシイリの眼を凝乎と見詰めて居た、が、其儘朝まで黙まつて坐はつて居やうとも、公爵嬢の方から口を切る氣遣ひの無いことは明白であつた。

「ねえ、私と仲好しのカテリイナ・セミョーノヅナ」と、公爵は、云はうと思ふことを何うでも斯うでも云つて了まはうとアガいて居るやうな態様で、言葉が続けて、「今のやうな斯ういふ場合には、有らゆることを考へて置か無ければならんものですぞ。將來のことを考へて置かなければならん、貴女がたの……私は貴女がた皆を私自身の小兒かなぞのやうに思つて居るんだ、これは御承知だらう」

公爵嬢は、前と同じやうな瞭然した動か無い据はつた眼付で、公爵を見て居た。

「最後には、われ／＼は又私の家族のことも考へ無ければならん」公爵ヴァシイリは、公爵嬢を見ずに、腹立たし氣に小さい卓子を自分の前から突き遣つて、斯う言葉を續けた「ねえ、カチイシ、貴女がた三人マアモントフ姉妹と私の妻とが、——われ／＼だけが伯爵の直接の相續者なんではありませんか。いや、解かつて居ます、斯様なことを云つたり考へたりするのは、貴女がたには嘘ぞ辛いことせう。私に取つてもご同様に辛いです、けれども、ねえ、私は最早五十歳を越した身體で、何時何様な事があらうも知れんです。私がビエールを呼び寄せたこと、伯爵が、ビエールの肖像に指し、彼に逢ひ度いと知らせなかつたことを、貴女は知つておいでだらうね？」

公爵ヴァシイリは、尋くやうに、公爵嬢を見た、が、對手は、自分の云つたことを考量へて居るのか、唯だ自分を見詰めて居るだけなのか、孰方も判じ兼ねた。

「私は、唯だ一つの事ばかり始中終神様に祈つて居ます」と、公爵嬢は答へて、「神様が伯爵に憐みを掛けてくださつて、伯爵の高貴な靈魂が此世を離れ得られるやうにと……」

「左様、その通り」と、公爵ヴァシイリは、もどかし氣に續け、禿頭を撫で、再腹立たし氣に

寸前に突き遣つたばかりの卓子を自分の方へ引寄せて、「けれども、實際……實際肝腎な點は貴女自身ご承知の通り、この前の冬伯爵が遺書を造つたことなんだ、彼書では、直接の相續者は皆捨て置いて、財産全部ビエールに譲るといふことになつて居たぢやありませんか」

「伯爵はこれ迄随分種々な遺書を拵らへたやうですわね」と、公爵嬢は落着き拂つて云つた、「でも、ビエールに譲る譯には行か無いですよ。ビエールは庶子ですもの」

「もし」と、公爵ヴァシイリは、不意に云つて、卓子に向ふへ突き遣り、一層本氣になり、一層速語に話した。「けれども、陛下に書面で願つたとすれば、伯爵がビエールを正當の嗣子に爲る願書を出したのであつたら、何う爲ますね？。伯爵の勳功は願書の趣きを徹させるだけの力は十分ありませう、ね……」

公爵嬢は、自分が話して居る先方の相手よりは自分の方が話頭に上つて居る問題に就て復に多く知つて居るといふ自信のある人々の微笑むやうに、微笑んだ。

「私は尙進んで斯ういふことも云ひ得ますぞ」と、公爵ヴァシイリは公爵嬢の手を握り締めて談話を續けた。「出しは爲無かつたが、願書が書かれたのは確です、そして、陛下のお耳へも願書のことは入つたのです。問題は唯だそれが破毀されたや、否やといふだけなんだ。若し、破毀され無いとすれば、いよゝとなるが最期」と、溜息を爲て、「いよゝ」の意味は何ういふのだから瞭然と公爵嬢に解からずやうに爲て置いて、「すれば、伯爵の書類が開かれる、願書の添ふた遺書が陛下のお手許へ出る、そして、願書の趣きがお聞き届けになる。ビエールは、正當な嗣子として、何も彼にも受け取つて了まうんです」

「それで、私たちの分が何う爲るんですね」と、公爵嬢は、其様なことが、何うしたつて有るものかといふ態で、皮肉な笑顔で云つた。

「いや、それは白晝のやうに明かなことですよ。左様なれば彼の男が全部に對する唯一人の嗣子になつて、貴女がたは今の分さへ貰へんでせう、ね。だから、ねえ、貴女は、遺書と願書が書かれたか何うか、それが破毀されたか何うか、それを知らなければいかん。それから、若しそれが何うか爲て何處かに置き忘れてゝもあるとすれば、その有り所を知り、それを見付け出さなければいかん、何故かといふと……」

「まあ餘んまりぢやア無いの」と、公爵嬢は公爵の言葉を遮ぎつて、眼の表情は寸毫も變ずに苦々しさうに笑つた。「私は女です、だもんで、貴下は私たちは皆白痴ばかりだと思つておいでなんです、けれども、私だつて、庶子が財産相續の能き無い位は知つてますよ。私生兒へそ

の話を斯う翻譯したことで、公爵の主張の根據の無いことを一舉に證明し得るのだと思つて、斯う云ひ足した。

「何うしてこれが貴下に解からんのかねえ、カチイシ、眞個に。貴女は極く伶俐な人ぢやア無いか、若し、伯爵が陛下に書面を上げて、正當な嗣子としてビエールを認めてくださいと願へば、さうすれば、ビエールはビエールでは無く、伯爵ベズウホフに爲つて了まうんで、さうなれば、遺書に據つて彼の男が何でも彼でも、有らゆる物を譲られることになるといふのが、何うして貴女に解らんのだらう？。それで、若し遺書と願書が破毀され無かつたとすれば、其様なら、貴女は、伯父孝行であつたといふ慰藉と、自分の義務を善く盡くしたことから生ずる種々の満足とを除けては、何にも遺産として貰らうことはできませんぞ。これは事實です」

「遺書の出来たことは知つてます、けども、私は又それが無効なものかも知つてますよ、貴下は私を白痴扱になさるのねえ」と、女が、自分で何か氣の利いた皮肉なことを云つて居ると思ふ時に、何時も物を云ふやうな態度で、公爵嬢は云つた。

「私の好きな公爵嬢、カテリイナ・セミョーノヴナ」と、公爵ヴァシイリはさももどかしさうに云ひ始めて、「私は貴女に腹を立たせる爲めに此所へ來たのではありませんぞ、私は、貴女を骨肉の婦人、善い、親切な心の、信實な骨肉の婦人と見て、貴女の利害に關する話を爲に來たのですせ。これで十遍目にお話するのだが、陛下への願書や、ビエールの爲めの遺書が伯爵の書類のなかに有るのなら、貴女も貴女の妹さんたちも、相續人では有りませんぞ。私の云ふのが信せられ無いとしても、斯ういふことを善く知つて居る人の言葉はお信じなさい、私は今ホンの先刻ツミツリイ・オスフレイチとも話して見たんです」それは、ベズウホフ家の常雇の辯護士であつた」彼の男も私が今云つたのと同じことを云ひましたぞ」

確かに公爵嬢の考に不意に何か變化が起つたらしかつた、薄い唇が白く爲つた、眼は變ら無かつた、そして、物を云ひだすと、聲が、明かに公爵嬢自身思ひ寄ら無かつたらしい風に、だんだん變つて行つた。

「可訝しな事ぢやア有りませんか」と、公爵嬢は云つた「私何にも欲かア無つたんですよ。だから何にも要るもんですかよ」膝の上の犬を投げ落し、そして、袴の皺を撫で延ばした。

「彼の人の爲めに有らゆる物を犠牲に爲て了まつた人々が受ける禮や、感謝は先づ其様なものですわ」と、公爵嬢が云つた。「眞個に善いわ、結構だわねえ。私何にも要ら無いわよ、公爵」

「左様、けれども、貴女は一人では無い、妹御たちがお有りぢや無いか」と、公爵ヴァシイリ

が答へた。が、公爵嬢は公爵の言葉を耳にも入れ無かつた。

「左様、私は最早餘つ程前から知つて居た、けれども忘れて居たんだ、此の家ぢやア、卑劣なこと、虚偽、猜嫉、作略なんかの外、恩知らず、眞黒な恩知らずの外、何にも當てには能き無  
いんだつた……」

「その遺書が何處に在るか、貴女知つて居ますか、それとも、知ら無いのですか」と、公爵  
ヴァシイリは尋いた、頬部で痙攣のがますく、目立つて來た。

「左様だ、私は眞個に痴愚だつた、私は尙且人を信じて居て、その爲めに心配して遣り、そ  
して、私自身を犠牲に爲た、けども、卑劣で奸悪な奴たちの外は、誰も成功しや爲無い。この  
悪策は誰の業だか私解かつてよ」

公爵嬢は起つ所であつた、けれども、公爵が腕を撃つて抑へた。公爵嬢は不意に人間全體を  
信じ無くなつた人のやうな態であつた。意地悪るさうに、相手の伯爵を見た。

「未だ間に合ひますよ。宜しいか、カチイシ、それは悉皆伯爵が前後の考慮無しに爲たこと  
なんだ、腹の立つた時とか、病氣の時とかいふのでね、それで、それ限り忘れて了まつたもの  
なんですせ、だから、ねえ、伯爵の間違を正して、さういふ不公平なことを爲せ無いやうにし

て彼の人の末期を安らかにし、他の者を不幸に陥れたといふ後悔無しに死なせて遣るのが、わ  
れ々の義務ぢやアありませんか……」

「而かも、彼の人の爲めに有らゆる物を犠牲にした他の者なんですわ」と、公爵嬢は、公爵の  
言葉を補つた、で、烈しい勢で再起たうと爲た、けれども、公爵が放さ無かつた「犠牲を有り  
難く思つて呉れる人ぢやアありません。いゝえ」と、公爵嬢は溜息を爲ながら云ひ足して、「此  
の世の中ぢやア善い事の應報を待つなんて馬鹿なことだ、此の世の中にやア名譽も無ければ、  
公平も無いんです、私何う爲たつてこれは忘れ無いわ。狡猾と悪心だけしきや此の世の中は求  
め無いものなんだ」

「さア、まア、落着きなさい、貴女は立派な心の人ぢやア無いか」

「いゝえ、悪い心なのよ」

「貴女の心は善く解つて居る」と、公爵は繰り返して、「私は貴女の愛情を貴んで居ます、私  
も貴女と同じ了簡だと思つてください。落着て、時の有るうちに——それは二十四時間かも知  
れず、或ひは唯つた一時間かも知れんのだが——右に左時の有るうちに、肝腎の話を極めて置  
かうではありませんか。遺書のことと貴女の知つて居ることを悉皆私に聞かせてください、そ

れに、此際最も大切なことは、それが何處に置いてあるかといふことなんです、貴女はそれを知らず無きやアいかん。われは今直ぐにその遺書を持って行つて伯爵に見せませう。伯爵はその遺書のことなどは最早忘れて居るに違ひ無い、で、見せたら、破毀する氣に爲るでせう、私は、彼の人の望みを何處までも神聖に守もつてその通り實行しやうと爲る外に、何一つ他意は無いのですからねえ。私が此所へ来たのは唯だその爲めばかりなんです。私は、伯爵の爲めにも貴女の爲めにも、兩方の利益になるやうに爲度いと思つてやつて、来たんです」

「あゝ、全然私分かつたわ。誰の策略なんだか知れましたわ、私知つてるわ」と、公爵嬢は云ひ掛けた。

「其様なことは何うでも宜いぢや無いか」

「これは悉皆貴下の最負にして居る、貴下の大切の公爵夫人ヅルウベツスコイ、アンナ・ミハイイロヅナの業なんだわ、彼様な奴なんぞ女中にだつて遣つてやる氣は無いわ、眞個に下司な悪黨老婆つたら有りやアし無い」

「そんな悠長なことを云つて居る時ぢやア有りませんぞ」と、公爵は佛蘭西語で云つた。

「えゝ、何にも云はずに居てください。この前の冬此家へ無理に推し掛けて来て、私たちが皆

のことを伯爵にそれはく口汚く悪く告げ口を爲たことつたら、就中ソフィーのことが一等酷かつたのよ——此所でお話は到底能き無い程だつたわ——だもんで、伯爵は病氣に爲つた位よ、伯爵は二週間も私たちに逢は無かつたの。その時よ、今思へば、伯爵が彼の厭な怪しから無い書類を拵らへたのは、けども、私それは何でも無いものだと思つて居たんだわ」

「それだ。何故、貴女前にその話をわれに爲無かつたんですか」

「伯爵が何時も枕の下に入れて置く象嵌の有る書類挟みのなかに有ることよ。最早私分かつたわ、返答は爲すに、公爵嬢は斯う云つた『左様だ、私の罪になるのだつても、大變な罪になるのだつても、大變な罪になるのだつても、大變な罪になるのだつても、彼の悪黨老婆が憎くつて憎くつて堪まら無もの』と、公爵嬢は、全然人が變つたやうに、殆ど絶叫した『彼奴が何故推し掛けて来るんだらうね。でも、最早全然彼奴の腹は分かつたんだもの。今に見てるが宜い』」

(三十)

さういふ種々な談話が應接室や公爵嬢の部屋で爲れて居た間に、ビエール(呼びに遣つた)とアンナ・ミハイイロヅナ(ビエールに隨いて行くべきだと考へた)を載せた馬車が、伯爵ベズウ

ホフの邸宅の廣庭へ乗り付けられて居た。車轍の音が通路に敷いて有る藁に消されて了まうと、同伴に慰ぐさめの言辭を掛けて遣らうと振り向いたアンナ・ミハイロヅナは、それが隅の方で眠入つて居るのを見た、で、それを起した。目を眞個に覺まして、ビエールはアンナ・ミハイロヅナに隨いて馬車を降りた、で、其所で初めて、自分を待つて居る危篤の父親に逢ひに行くのだと思へさせた。自分たちは、客の入口へ乗り付けたのでは無く、裏の入口へ廻つて居たのに氣が付いた。馬車の踏み段から降り掛けた時に、商人の服装の男が二人入口から壁の陰へと跳び退いた。ビエールは、立つて待つて居る間に、同じやうな男が他にも幾人か兩側の家の陰に立つて居るのに氣が付いた。が、さういふ者等を見たに違ひ無いアンナ・ミハイロヅナも従僕も馭者も、それを何とも思つて居無い態であつた。では、これは何でも無いことなんだと、ビエールは極めて、アンナ・ミハイロヅナに隨いて行つた。急ぎ足でアンナ・ミハイロヅナは、後れ勝であつたビエールを迫り立てながら、薄暗い狭い石の階段を上がつて行つた。ビエールは何故伯爵の所へ行か無ければなら無いのか、一向その理由が解らず、又、何故裏階段から行か無ければなら無かつたのかといふ理由に至つては更に一層解ら無かつた、が、アンナ・ミハイロヅナが萬事心得た風でズン／＼行くのに勵まされて、さう爲るのが自分に

取つて必らず必要なことであらうと腹を極めて、階段を半分所昇つた所で、二人は、水桶を持つて、大きい長靴で音高く踏みながら、駈け降りて來た二三人の男に、既でのこと突き落とされる所であつた。さういふ男たちは、ビエールとアンナ・ミハイロヅナを通らせる爲めに、壁にビツタリと押つ着いて了まつた限りで、二人を見ても、寸毫も怪んだ態様は無かつた。

「これは公爵嬢の部屋の方ですか」と、アンナ・ミハイロヅナがそのうちの一人に尋いた。「へえ、左様で」と、従僕は、斯様な時は何んな事を爲ても構は無いといふのであつたかのやうに、無遠慮な高聲で答へた。「左の戸で、奥様」

「伯爵が私を呼んだのぢやア無いのかも知れ無い」と、階段を昇り切つた所で、ビエールが云つた。「私は私の部屋へ行つた方が宜いでせう」アンナ・ミハイロヅナは止まつて、ビエールが追ひ付くのを待ち合せた。

「あゝ、もし」と、公爵夫人は、その朝自分の息子に對して爲たのと丁度同なじ手付で、ビエールの手に觸はつた。「眞個に、私は貴下と同なじやうに苦しんでるんですよ。ね、斷乎して居てくださいよ」

「眞個に、部屋へ行く方が宜かア無いんですか」と、ビエールは公爵夫人を眼鏡越しに見や

つて、優しい聲で云つた。

『あゝ、もし、此れまで貴下が受けた酷い扱ひなんぞは忘れておしまひなさい、彼は貴下の父上だといふことをお思ひなさい……で、何うかすれば、末期の苦痛の時には』と、公爵夫人は溜息を吐いた。『私は、初めから貴下を自分の息子のやうに可愛く思つたでんすよ。私に委かせて置てください、ビエール。私は貴下の利益を忘れませんよ』

ビエールには何の事だか寸毫も解ら無かつた。が、再、彼は、總て斯ういふことは爲ら無ければなら無いことだと、前より一層強く感じた。で、最早戸を開け掛けて居たアンナ・ミハイロヅナの後へ溫和しく随た、戸は裏階段の前房に通ふのであつた。隅の所に、公爵嬢の老僕が靴足袋を編んで居た。ビエールは家の斯ういふ方へは未だ一度も来たことは無く、又、斯様な部屋々々があらうとは夢にも知ら無かつた。女中が一人、酒瓶の載つた盆を持つて、二人に追ひ付いた。アンナ・ミハイロヅナは(其女を『お前さん』とか、『好い娘』とか呼んで)公爵嬢たちは機嫌が克か何うかなど、尋き、そして、石床の廊下をビエールを引張つてヅン／＼進んだ。左の最初の戸は廊下から公爵嬢たちの居室へ通つて居た。瓶を持つた女中は急いで居た(その時は、その家では何事でも大急ぎで爲れて居たやうであつた)で、後を閉め無かつた。ビエー

ルとアンナ・ミハイロヅナは、通りすがりに我れ知らず一番年長の公爵嬢と公爵ヴァシイリが接近して坐はつて話して居る部室の裡を一寸と見た。二人の通つて行く姿を見るや否や、公爵ヴァシイリはもどかしさうな身振りで、體を引き退けた、公爵嬢は跳びあがつて、絶望の手付きで、戸を力一杯叩き付けるやうに閉めて了まつた。その舉動は公爵嬢の平常の落着には甚く不似合であつたし、公爵ヴァシイリの顔に出て居たギョツとした様子も甚く彼の勿體振つた所と不釣合であつたので、ビエールはビタリと止まつて、不思議さうに、自分の案内者を眼鏡越しに見た位であつた。アンナ・ミハイロヅナは少しも驚いた様子は無かつた、悉皆豫期して居たのを見せやうとするかのやうに、唯だ微笑んで、溜息を爲たばかりであつた。

『斷乎して居てくださいいよ、もし、私は貴下の利益の爲に心配して居るんですからね』と、アンナ・ミハイロヅナは、ビエールの不審さうな顔付に答へた、そして、廊下を一層速歩で進んだ。ビエールは、その時の事態は何ういふのか寸毫も解ら無かつた、自分の利益の爲めに心配して呉れるとは何ういふことなのか、更に解ら無かつた。が、何事でも悉皆左様爲ら無ければなら無いのだと感じた。二人は、廊下から、伯爵の應接室に續いた半分暗い廣室へ入つた。これは、客用の階段からの通路になつて居る、ビエールの好く知つた、寒い、立派な裝飾の部室



の一つであつた。が、この部屋さへ、床の真中に空の浴桶が置き捨て、あつて、水が敷物の上に滾れて居た。二人は、其所で家僕と香爐を持た寺男とが、足を爪立つて歩いて来るのに出逢つたが、彼等は二人をロクに見もし無かつた。二人は、冬向きの庭の方へ開いた應接室へ行つた。これはビエールの善く知て居る、伊太利風の窓の二つある、カザリン女帝の大きい胸像と等身の肖像のある部屋なのだ。應接室では、前同様な人々が悉皆殆ど前同様な位置に坐はつて、呬語を交換して居た。涙に瘦れた蒼い顔で入つて来たアンナ・ミハイロヅナと、頭を垂下れて其後から溫和しく隨いて来たビエールの大きい肥つた姿を、衆皆談話を止めて、ジロ／＼見た。

アンナ・ミハイロヅナの顔容は、大切な時が来たときと自覺して居ることを表はした。飽くまで事馴れた彼得堡婦人の態で、ビエールを側に引き付けて、朝よりも尙一層大膽に部屋へ歩み込んだ。自分は今危篤の病人が逢ひ度がつて居る人を伴れて行くのだから、自分が人々から重せらるゝことは確だと感じて居たのだ。唯つた一眼で、部屋のなかの人々を悉皆見分けて了まひ、伯爵の顧問僧を見るや否や、點頭を爲るといふのでは無く、不意に何うか爲て背が低くなつたといふ態で、小走りに僧の所まで泳ぐやうにして行き、最初は一人の僧から、次ぎには他の僧からと、順々に、信心深い態様で、祝禱を受けた。

「神様のお蔭さまで、間に合いました」と、僧に云つた。「私ども、親族一同最早非常な心痛でした。この若い人は伯爵の息子です」と、少し低聲に爲つて云つた。「實に悲しい時です」さう云つて了まうと、アンナ・ミハイロヅナは、醫者に近寄つた。

「ねえ、先生」と、醫者に云つて、「この若い人が伯爵の息子です。未だ望みは有りますでせうか」

醫者は何とも云は無かつた、唯だ急に肩を揺つて、眼を上方へと向けたばかりであつた。それと寸分違は無い身振で、アンナ・ミハイロヅナは、肩と眼を動かし、眼臉を殆ど閉ぶるやうに爲て、溜息を爲、そして、醫者の所を離れて、ビエールの方へ行つた。ビエールには、際立つた尊敬と、優しい悲しさうな様子で、言語を掛けた。

「神様の御慈悲をお頼りなさいよ、ビエールに斯う云ひ、そして、坐はつて待て居ろといふ風で、長椅子に指し、て教へて置いて、自分は衆皆の見て居る戸口へ、足音を忍ばせて行つた、で、殆ど音を爲さずにそれを開けてから、その彼方へ見へ無くなつて了まつた。

ビエールは、何事でもその指揮者の婦人の云ふなりに爲やうと決心したので、指された長椅子の方へと動いた。アンナ・ミハイロヅナが居無くなるや否や、部屋ちうの人々の眼が、好奇

心とか同情とかいふものより以上の何物かを含んだ眼付で、自分一人の上に据えられて居るのに気が付いた。彼は、衆皆が畏怖や、阿諛の尊敬とさへ云へさうな何物かで自分の方を見ながら、呷り合つて居るのに気が付いた。彼等は、前には彼に對して一度も示したことのないやうな尊敬を表した。彼の方では一向知らぬ婦人で、僧と話して居たのが、起ちあがつて、席を譲つた。助手は、ビエールが落した手袋を拾つて、渡して呉れた。醫者たちは、彼が傍を通ると、謹んで談話を止めて、彼に路を譲る爲めに傍へ動いた。ビエールは、最初は、婦人を煩らはさぬやうに、何處か他へ坐らうと思つた、自分で手袋を拾ひ、寸毫も通路の邪魔には爲らなかつた醫者の所などは廻つて行き度かつたのだ。が、彼は、フイと、さう爲ては穩當で無いのだと感じた、又、自分はその晩は、誰もが自分に待ち望む或る恐ろしい儀式を経なければならぬ人間であるのだから、それで、誰に世話を焼かせても構はぬ筈だと感じた。黙まつて、助手から手袋を受け取り、婦人の席に腰を下ろし、膝に手を置き、埃及塑像のやうな如何にも自然な釣合の好い姿勢で坐つて、そして、腹の裡では、最早泣いても笑つても左様して居るより外爲やうは無いのだから、前後を取り失なつて、何か馬鹿なことを爲無いやうに爲るには、その晩だけは、自分の考慮は頼まずに、一切導いて呉れる人々の了簡通りに爲つて居なければならぬのだと、極めて居た。

二分と過ぎ無いうちに、公爵ヴァシイリは、勳章の三つ着いた上衣を着、頭を高く擧げて、堂々と部室へ乗り込んで来た。朝から此方、大分癢せたやうに見えた。平常よりは大きいやうに見えた眼で部室をジロロと見て、ビエールを見付けた。彼の所へ行つて、手を摺り（前には一度も其様なことは無かつたのだ）、そして、その力を試すまでも云ひさうに、下へ向けて引張つた。

「確乎して居なさい、確乎して居なさい、ねえ、君、伯爵は君に逢ひ度いと云つた、夫りやア宜い……」で、公爵は後を續ける所であつたが、ビエールは、「何ういふ態で……」と自分の方からも聞くべきものだと思つたのだ。彼は躊躇つた、危篤なその人を「伯爵」と呼で宜いものなのか何うか分から無かつた、さればと云つて、「父」と呼ぶのは耻かしく感じたのであつた。

「半時間前に又一つ打撃が來たのだ。確乎して居なさい、ねえ、君」

ビエールは甚く心が轉動して居たので、その「打撃」といふ語が、重い物體で打つといふやうな意味を心に喚び起した位であつた。彼は思案に餘まつた態で公爵ヴァシイリを見た、そして暫時経つて艱然、病氣の襲撃を「打撃」と云ふのだと気が付いたのであつた。公爵ヴァシイリ

は通りすがりに、ロオレンに二言三言云つて、爪立つて戸口へへ行つた。彼は、爪立つては巧く歩け無かつた、で、拙態に身體全體を上下にギクシヤク爲せた。その後から年長の公爵嬢、それから、僧、寺男が續いた、二三人の家僕が又その戸を入つた。その戸越しに、裡の混雑が聞き得られた、やがて、アンナ・ミハイロヴナが、未だ顔が蒼かつたけれども、義務を成し遂やうといふ斷乎した顔付で、駈けて出て来て、ビエールの腕に觸つて、

『天のお恵は限りがありません、今末期の塗膏式を始める所なんですよ。さア』

ビエールは、和かな絨氈の上を歩きながら、入つて行つた、そして、助手も、誰だか分からぬい婦人も、又二三人の僕も、誰も彼も、最早その部屋に入るのに許可を得る必要は無くなつて居たかのやうに、自分の後に隨て来たことにビエールは氣が付いた。

(三十一)

ビエールは、幾つもの圓柱と一つの穹窿で分かれたれ、波斯絨氈を敷いたその大きい部屋を善く知つて居た。部屋の圓柱の後の部分は、一方の側には、絹の帷の有る桃花心木の高い寢臺が立ち、も一つの側には、聖畫の大きい箱が有つたが、その部分全體が、教會堂が夕勤の爲めに

明らされるやうに、カン／＼華やかに燈明が點いて居た。箱の燦々する裝飾の下に、長い病人用の椅子があり、そして、その椅子の裡に、雪白の、皺の無い、新しい枕の上に、パツとした緑の褥を腰まで掛けて、廣い額に獅子の立髪のやうな白髪の房を持ち、美しく赤黄色な顔に何處までも貴族的な深い皺の出來て居る父親、伯爵ベズウホフの氣高い姿をビエールは認めた。彼は、聖畫の眞下に横に爲つて居た。大きい肥つた兩腕が褥の上に乗かれて居た。掌を下にして横たはつて居た右の手には、蠟燭が拇指と人差指との間に挟まれて居、老僕が一人椅子の上へ押つ冠ぶさるやうに爲て、蠟燭を其所へ押さへて居た。椅子の周圍には、僧侶たちが、燦爛する法服を着て、その上へ長い髪を振り掛けて、起つて居た。彼等は手に手に點もした蠟燭を持つて、緩然と嚴肅に式を行なつて居た。その少し後に、二人の若い方の公爵嬢が眼へ手巾を當て、立ち、その前に、一番年長の公爵嬢が居た。カチイシは、若し傍目を爲ても、それは自分の知つて爲ることでは無いと衆皆に言ひ渡して居るとも云ひさうに、聖像から決して片時も眼を離さずに、憤然となつた斷乎とした態で立つて居た。アンナ・ミハイロヴナは敬虔な悲哀と宥恕の顔容で、誰だか分からぬい婦人に並んで戸口に立つて居た。公爵ヴァシイリは、戸のも一つの側で、病人の椅子に接近して立つて居た。彼は、自分の傍へ彫刻の有る天鵝絨の椅

子を引寄せ、蠟燭を持つて居る左の手をその背に掛けて、凭れて、右の手では、十字を切り、額へ指を付ける度毎眼を上へと向けて居た。彼の顔は平靜な信心と神の意への服従を表はして居た。『若し、お前たちが斯ういふ感情を解き無いと云うのであつたら、それだけお前たちに取つて氣の毒なことだ』彼の顔は斯う云つて居るやうに見えた。

公爵の後には、副官と、醫者たちと、従僕どもが立つた、男と女は寺院に居るかのやうに、別々に列んだ。衆皆黙まつて十字を切つて居た、讀經の聲、抑へた深い低音の歌の外、何の音も爲無かつた、唯だ沈靜の合間々々に溜息と足の軽く動く音とが聞えるばかりであつた。自分が何を爲て居るのか自分で善く解つて居ることを見せる心得た態で、アンナ・ミハイロヴナは部屋を真直に横断つてビエールの所へ歩み寄つて、蠟燭を渡した。彼は、それを點した、そして、周囲の人々の態様を見るのに氣を取られて了まつて、臆然して、蠟燭を持つた手の方で十字を切つた。黒子の有る、桃色の顔の笑好きなソフィーはビエールを見て居た。その公爵嬢は微笑んだ、手で顔を隠して、長いこと、顔を擧げ無かつた。が、再びビエールを見て、再笑つた。公爵嬢は笑はずにビエールを見ることは能き無い癖に、又見すには何うしても居られ無いのらしかつた、で、さういふ誘惑を連れやうと、竊然と圓柱の陰へ引つ込んだ。式の真中で、僧たちの聲々が

ハタと止んだ、そして、彼等は互に何事が呬き合つた。伯爵の手を抑えて居た老僕が起つて、婦人たちの方へ振り向いた。アンナ・ミハイロヴナが、歩み出て、病人の上へ屈んだ、後向なりにはロオレンを招いた。佛蘭西人の醫者は、蠟燭を持たずに、圓柱に凭れて居た、で、その態様は、外國人で、宗教は違ふに拘はらず、その儀式的嚴肅な意義は十分解して居るのみならず、その上に、それに賛同さへ爲て居ることを示す謹んだ態であつたのだ。屈強の男の音の無い歩で、彼は病人の所へと行つた。華奢な白い指で、蒲團から病人の明て居る方の手を持ち上げ、傍を向いて、そして、注意を集中して脈を伺がひだした。病人には何か飲み物が與へられた、その周圍にはホンの少し人々がバサ／＼したのみで、直きに衆皆それ／＼の立場に歸り、そして、式が續けられた。式の中斷の間に、ビエールは、公爵ヴァシイリがそれまで凭れて居た椅子の背の所を離れ、俺は、自分の爲ることは自分でチャンと知つて居るんだが、それがお前たちに解から無ければ、それだけお前たちの損なのだ云つた態の前同様の様子で以つて、病人の所へは行かずに、その傍を通り越して、一番年長の公爵嬢と一緒に居るやうに氣が付いた。それから、二人一緒に、部屋の方の隅、絹の天蓋の下の高い寢臺の所へ行つた。やがて又寢臺の所を離れるかと思ふと、公爵も公爵嬢も一緒に、その先の戸口を通つて居無く

なつて了まつた、が、式の終らぬうちに、二人共前後して各自の元居た所へ歸つて來た。ビエールは、最早その晩彼の眼に入る事柄は總て悉皆何うしてもさう無ければならぬことに違ひ無いと思ふことに極めて了まつてからなので、その公爵の舉動にも他の一切の事と同じやうに別段に深く注意は爲無かつたのであつた。

宗教歌の響が止んだ、そして、その神秘的な式を滞り無く受け終はつたことを病人に向つて祝する主座僧の聲が聞えた。死行く人は矢張り生命無きさまでピリツとも動かすに横はつて居た。誰も彼もその周囲を動いて居た、多くの足音と多くの呬語の聲が爲て居たが、就中、アンナ・ミハイイロヴナの呬聲が一番高かつた。

ビエールには、アンナ・ミハイイロヴナが、「何うしても寢床の方へ伴れて行つてあげなければ不可ませんよ、それは駄目……」と云つて居るのが聞えた。

病人は、醫者たち、公爵嬢たち、それから、家僕どもに全然取り圍かれて了まつたので、ビエールは、儀式の間、他の人々の様子を見ては居ながらも、決して片時も眼を離さ無かつた白髪の立髪を頂いた赤味が、つた黄色い顔を最早見ることが能き無くなつて了まつた。で、椅子の周囲の人々の非常に用心した舉動で以つて、彼等が、死掛かつて居る人を抱きあげて、他所へ

持つて行くところだと推量したのであつた。

「俺の腕につかまれよ、夫ぢやア落しちまう」と、家僕の一人の怖ぢた呬語が、ビエールに聞えた。「もつと下だ……も一人此方へ」と、幾人もの聲がした。で、衆皆の苦しうな息使ひと急ぎ歩の様子では、彼等が持つて居る重荷は彼等の力に過ぎたものであることが知られた。

人々が——アンナ・ミハイイロヴナもその一人として——ビエールの傍を通つて行く時に、その若い男は、人々の背部や頸の彼方で、病人の大きい筋骨逞しい開いた胸や、白髪の縮れた、獅子のやうな頭や、腋下を捉まへて支えて居るので突き上げられて居る頑丈な肩などを、瞥然見ることが能きた。圖抜けて廣い額と頬骨、美くしい肉感的な口、傲然とした冷たい眼を持つた頭部は、死の近づいて居るに拘らず、少しも醜く爲つては居無かつた。それは、その父親にビエールが彼得堡へ遣られた時、即ち三月前に彼が見たのと少しも變つて居無かつた。が、その頭部は、擔いで行く人々のギクシヤク爲た歩調に伴れて、グタリとして彼方此方揺れ、そして、冷たい無感覺のやうな眼は、何處を見るときも無しに、唯だ大きく開いて居た。

人々は少時の間高い寢臺を取り巻いて、忙がしさうであつた、が、やがて、伯爵を移した人は、四方へ別れた。アンナ・ミハイイロヴナは、ビエールの腕に手を觸はらせて、「さ、此方へ」

と、云つた。ビエールはそれに隨いて、寢臺に近寄つたが、病人は今の先刻終つた神聖な儀式に適應つた嚴やかな姿勢に置かれて居た。頭は枕の上に高く支えられて居た。手は掌を下向して緑絹の蒲團の上に兩方とも列べて形善く置かれて居た。ビエールが傍へ寄つた時には、伯爵は彼を眞直に見詰て居た、が、その眼の意味は誰にも解き難いものであつた。その眼は何にも云はずに、唯だ眼としては何物かを見て居無ければならぬので見て居たゞけなのか、或は、云はふとすることが餘りに多かつたのか、何方かであつた。ビエールは、何う爲て宜いのか分から無かつたので、唯だ突つ立つて、何う爲るのかといふ顔付きで、指揮を爲て呉れる夫人を見た。アンナ・ミハイロヴナは、病人の手を指し、自分の唇で、影の接吻をその方へ投げる眞似を爲て、ビエールにチラリと胸を爲た。ビエールは指揮通りに爲た、そして、蒲團からまら無いやうにと、そおつと頸を延ばして、骨太の逞ましい手に接吻した。その手には幽な微動も無かつた、又伯爵の顔の筋一つだに動か無かつた。ビエールは再その次には何う爲べきか教へて貰はうと、尋くやうな顔付でアンナ・ミハイロヴナを見た。アンナ・ミハイロヴナは、寢臺の傍に立つて居た肘掛椅子の方をチラと見た。ビエールは、その通りに其所へ行つて坐はつたが、眼は尙且、それで好かつたのか、尋いて居た。アンナ・ミハイロヴナは、結構だといふ

態に點頭いた。ビエールは、自分の圖抜けた體軀が餘りに場塞げなのに困じて、成るべく小さくなるやうにと甚く骨折て居る體で、再埃及塑像の自然な均整した姿勢に爲つた。彼は、伯爵を見た。伯爵は矢張り、ビエールが立つて居た時にビエールの顔が在つた場所を見詰めて居た。アンナ・ミハイロヴナの態様は、父と子の最後の面會の哀れに嚴肅な意味を十分に認めて居ることを表はして居た。總體僅か二分程のことであつたのだが、ビエールは一時間も掛つたやうな氣が爲た。倏忽、伯爵の顔の逞ましい筋肉と皺の上に戦慄が過ぎた。その戦慄は一層甚くなつた、美しい口が歪んだ（その時初めてビエールは、父親が何れ程死に近よつて居るかを知り得たのだ）、そして、その歪んだ口から、皺腹たボンヤリした音が出た。アンナ・ミハイロヴナは病人の口を凝乎と見詰めて居たが、病人の意を察しやうと骨折つて、先づビエールに指し、その次に、飲み物を指さし、その次ぎに、尋くやうな呬語で公爵ヴァシイリの名を云ひ、それから、蒲團に指した。病人の眼と顔はもどかしさを示めた。そして寢床の頭を一度も去ら無かつた家僕に懇然目くばせ爲やうと爲た。

「閣下は反側を爲さり度いんで」と、家僕は呬いた、そして、伯爵の重い體軀を壁の方へ向けて反側らさうと起ちあがつた。

ビエールは家僕に手傳はうとして起つた。

伯爵が反側らされて居るうちに、片方の腕がグダリと後へすれた、伯爵はそれを自分で戻さうと徒勞に骨折つた。伯爵は、その生命無き腕を見たビエールの慄然とした顔に氣が付いたのか、それとも、何か他の考想がその死に掛つて居る腦裡を過ぎつたのか、その云ふ事を聞かぬ腕を見、ビエールの顔の慄然とした表情を見、再自分の腕を見た、そして、彼の顔貌にはへんに不似合な微笑が顔へ出て來た、それは、自分の爲方の無くなつた有様を自ら嘲ける、諦めた、力の無い微笑であつたのだ。その笑顔を見ると、倏忽、ビエールは、喉頭には塊、鼻には滴りを感じた、そして、涙が眼を曇らせた。病人は壁の方に向けられた。彼は、溜息した。

『一眠大爲さるんですよ』と、公爵嬢の一人が寢床の傍に番を爲に來たのを見て、アンナ・ミハイロヴナは斯う云つた。『行きませう』

ビエールは出て行つた。

## (三十三)

最早應接室には誰も居ず、唯だ公爵ヴァシイリと一番年長の公爵嬢が、カザリンの肖像の下

に坐はつて、一生懸命に話合つて居た。二人はビエールとその同伴者を見ると、バツタリ黙まつて了まつた、公爵嬢は、ビエールの思つたには、何物か隠くしたやうであつたが、斯う叫びた、『彼の女を見るのが眞個に厭で堪まら無いのよ』

『カチイシが小さい應接室の方へ茶を點れさせて置きましたから』と、公爵ヴァシイリはアンナ・ミハイロヴナに云つた。『おいでなさい、アンナ・ミハイロヴナ、何かお喫べなさい、で無くば、身體が續きませんよ』

彼は、ビエールには何とも云は無かつた、唯だ同情の態でその腕を握つたばかりであつた。ビエールとアンナ・ミハイロヴナは小さい應接室へと出て行つた。

『徹夜の後の、斯ういふ好い露西亞茶の一杯位力の付くものは無いね』と、ロオレエンが快活さを抑へたやうな態で云つた、彼は、小さい圓形の應接室のなかで、茶の道具や、冷たい夜食の料理の載つて居る卓子の傍に立つて、把柄の無い美しい陶器の茶碗から茶を吸つて居たのだ。その夜伯爵ベズヴォフの家に居た人々は、腹を丈夫にして置かうといふ考慮で、各自その卓子の周圍に集まつた。ビエールは、姿鏡と小さい卓子の幾つもあるその小さい應接室を記憶して居た。伯爵の家に舞踏會が有つた時分は、踊れ無かつたビエールは、姿鏡の澤山

あるその小さい部屋に坐はつて、露出の肩の上に真珠や金剛石を飾つた舞踏装束の婦人たちが、その部屋を横断つて、めい／＼の姿を幾度も寫し返へすクワツと明るい姿鏡に寫るめい／＼の姿を見て居るのを、眺めるのが好であつた。が、今は、その同なじ部屋が、二つの蠟燭で朦朧と照らされ、夜の最中に、小さい幾つもの卓子には茶道具や夜食の皿が狼藉として居、雑多な平服を着た人々が其所に坐つて呷き合ひ、一言毎に、誰もがその瞬間に過ぎ行きつゝあつた事と、これから寢室で起らうとして居る事とを忘れることの能き無いのを示めして居た。ビエールは、食ふ氣は十分有りながら、何も食は無かつた。彼は、何う爲て宜いのかといふ風に、指揮人の婦人の方へグルリと振り向いた、そして、その婦人が、公爵ヴァシイリが一番年長の公爵嬢と一緒に残つて居た應接室へと忍び足で行つたことを認めた。ビエールは、それも又その夜の所置の何うしても爲らずには済まされぬ部分なのであらうと思つた、で、少時躊躇つたのみで、直ぐ、その後隨つた。アンナ・ミハイロヅナは公爵嬢の傍に立つて居て、雙方甚く氣色ばんだ調子で一時に物を云つて居た。

「奥様、私自身の爲べき事と、爲て悪るい事とを極めるのは、私の勝手に委しといてください」と、居間の戸を叩き付けて閉めたと同じやうな激し切つた氣分であるらしかつた公爵嬢が、云つた。

「ですけれども、公爵嬢」と、アンナ・ミハイロヅナは、寢室への道に立塞がつて、公爵嬢を通させずに、穏やかに説き勸めるやうに云ひ掛けて居た。「心を平和に爲せて置いてあげなければならぬ斯ういふ大切な時に、伯父さんに其様な話を聞かせるのは、伯父さんに取つては餘まり苦し過ぎる事ぢやア無いでせうか。靈魂が最早天国へ行くやうに用意されてる今になつて、この世の用事を話すなんて……」

公爵ヴァシイリは片脚を高く重ねた常例の姿勢で、低い椅子に坐つて居た。兩方の頬部が烈しくビク／＼して居た、で、それが緩やかになつて了まうと、下の方へ膨れたやうに見えた、けれども、婦人二人の諍論には何の利害も持た無い人のやうな態を表はして居た。

「いや、アンナ・ミハイロヅナ、それはカチイシの勝手に爲て置きなさい。伯爵が甚く可愛がつた娘なことは貴女も知つて居る通りだから」

「この書類は何ういふものなのか、それさへ私は知ら無いんですわね」と、公爵嬢は、公爵ヴァシイリに向いて、手に携つて居た象嵌の書類挾を指した。「私は、真正の遺書は書類筆筒にあつて、これは伯父さんが置き忘れた書類だといふことしきや、知ら無いんですわよ……」



公爵嬢はアンナ・ミハイロヅナの横を廻つて行かうと爲たが、後者は又小走りが出て、行方を塞いだ。

『解かつてますよ、まア、貴女、好いお嬢さんだからさ』と、アンナ・ミハイロヅナは、何うあつても離しさうも無い態で、書籍挾を牢乎と捉まへた『ねえ、公爵嬢、願ひます、お頼みです、伯父さんを苦しめてくださいますなよ。後生ですからさ』

公爵嬢は物を言は無かつた。聞えたのは、書籍挾を引張り合ふ音ばかりであつた。公爵嬢が若し言語を出すのであつたら、その言語はアンナ・ミハイロヅナに取つて決して有り難いものでは無かつたらう。アンナ・ミハイロヅナは緊乎と握つて居た、が、それでも、聲は平常の優しい落着と和かさを飽くまで失はずに居た。

『ビエール、此所へお出なさい、お前さん。家の相談に彼の人を加はつたつて、餘計なことでは無いでせうね、ねえ、公爵』

『何故何にも云は無いの、もし』と、公爵嬢は、不意に、小さい應接室に居た人々にも聞えて、何事だらうと吃驚した程の高聲で、喚いた『斯様な他人が厚顔しい干渉を爲て、危篤な病人の部室の直ぐ敷居の所で亂暴してるのに、貴君は何故何とも云は無いのよ。悪黨』と、さも憎體

に云つて、力一杯書類挾をシヤクつたが、アンナ・ミハイロヅナは手の放れ無いやうに、二歩三歩前へ出て、持ち換えた。

『おい』と、公爵ヴァシイリは、訓戒めるやうな驚愕で、云つた。起ちあがつた『見つとも無いぢや無いか。さ、放しなさい。これ』公爵嬢は放した。

『貴女も』

アンナ・ミハイロヅナは知らん顔を爲て居た。

『放しなさい、もし。私が全體の責を負つて爲る。私が行つて尋かう。私が……貴女はそれを放しなさい』

『ですが、公爵』と、アンナ・ミハイロヅナは云つた。『この神々しい聖禮の後では、少時心を平和に爲せて置ておあげなさいよ。もし、ビエール、貴下の考想を聞してください』と、三人の傍へ来て、禮儀の外観を全然投げ捨てた公爵嬢の絶望に爲つた顔と、公爵ヴァシイリのビクビク痙攣る頬部とを、呆れた顔で見詰て居た若者に振り向いた。

『斯ういふことの責任は悉皆貴女たちに歸するのでござ』と、公爵ヴァシイリは荒々しく云つた。『貴女たちは自分が爲つて居ることは何んな事なのか自分で知らずに居るんだ』

『悪黨老婆』と、公爵嬢が怒號つて、不意にアンナ・ミハイロヅナに跳び掛つて、書類挾を引奪つて了まつた。公爵ヴァシイリは頭を下げて、両手を投げ挙げた。

その途端に、戸——ビエールが長いこと見詰めて居た、これまでは極く徐にばかり開けられて居たその恐ろしい戸が、壁に叩き付られるまで、急に、騒がしく投げ開けられて、二番目の公爵嬢が自分の手を振り絞るやうにして駆けて来た。

『貴下たち何を爲てるのよ』と、絶望して云つた。『最早臨終よ、だのに、私ばかりに爲ると』

一番年長の公爵嬢は、書類挾を落した。手早くアンナ・ミハイロヅナは跣んだ、そして、諍論のその目的物を引奪くるやうに拾ひあげて、寢室へ駆け込んだ。一番年長の公爵嬢と公爵ヴァシイリは、艱然我に返つて、その後を追つた。二三分経つて、年長の公爵嬢は、蒼い萎びた顔をして下唇を噛みながら、再出て来た。ビエールを見ると、公爵嬢の顔は堪え切れぬやうな憎悪を表はした。

『左様、最早幾らでもお威張りなさい』と、云つて、『貴下の思ひ通りに爲つたんだもの』で、獻辭げだして、顔を手巾で隠くして、部室を駆け出た。

次に出て来たのは公爵ヴァシイリであつた。ビエールが坐つて居た長椅子へと跟けて来て、その上にヘタ／＼と沈むやうに掛けて、手で眼を隠した。ビエールは、公爵は蒼い顔をして、そして、下顎が瘡に罹つたとしても云ひさうに震へ動いて居るのに、氣が付いた。

『あ、君』と、ビエールの脇の所を押へて、云つた——で、その聲には、ビエールが公爵の聲のなかでは是れ迄一度も氣付たことの無い、鞏實と弱さがあつた——『私は随分多くの罪を犯し、随分多くの虚言を云ふ、そして、それは何の爲だ？ 私は最早五十歳をズツと越して居るんだ、君も……私も……皆死で終つて了まうんだ、何も彼も。死は恐ろしいものだ』公爵は泣きだした。

アンナ・ミハイロヅナが一番最後に出て来た。夫人は、静な緩然した歩調でビエールに近寄つた。『ビエール』と、云つた。ビエールは、尋くやうな顔付で夫人を見た。アンナ・ミハイロヅナは、若者の額に接吻して、自分の涙で彼を濡した。少時何とも云はずに居た。

『最早此の世にはおいでありません……』

ビエールは眼鏡越しにアンナ・ミハイロヅナを見詰めた。

『さ、彼方へ行きませう。お泣きなさい。涙ほど心の慰藉になるものは無いんですよ』

アンナ・ミハイロヅナは、ビエールを暗い客室へ連れて行つた、で、ビエールは誰も自分の顔を見る者が居無いのを嬉しく思つた。アンナ・ミハイロヅナはビエールの傍を去つたが、少時経つて返つて来ると、彼は腕を枕にして、眠入つて居た。

次の朝、アンナ・ミハイロヅナは、ビエールに斯う云つた、「左様、貴下、これは私たち總體に取つて大變な喪失なんですわ。貴下のことを云ふのぢや無いんですよ。神様が貴下の後見を爲すつてくださるでせう、未だお若いんだし、而かも、今ぢやア莫大も無い財産を持つことにお爲りでせうよ。遺書は未だ開けられは爲無いんです。貴下はその財産の爲めに急に氣が違つたやうに爲る方で無いことは、貴下の平常で私には善く解かつて居ます、ですが、それが爲めには貴下に種々な義務が懸つて来るでせう、だから、確乎して居なければいけませんよ」

ビエールは何とも云は無かつた。

『もつと後に爲りましたらばね、又お話し爲ますでせうけれどもね、私か彼處に居無かつたら、何う爲つたことだか全く解から無いんですよ。御承知でせうけどもね、伯父さんはツイ一昨日ポリイスのことは忘れ無いと私に約束してくださいましたの。ですが、最早時が無かつたんです。ねえ、貴下、貴下はお父上のお望みをお守りなさるでせうねえ』

ビエールは何の事だか一言も解ら無かつた、で、バツが悪るさうに赤く爲つて、黙まりでアンナ・ミハイロヅナを見た。ビエールに話爲た後で、アンナ・ミハイロヅナはロストオフ家へ馬車で歸つた、そして、寢床に入つた。午前中に起きて、ロストオフ家の人々其他自分の知人たちに、伯爵ベズウホフの死の顛末を詳しく話した。アンナ・ミハイロヅナは、伯爵は、ミハイロヅナ自身も彼様死ねれば不足は無いと思ふ位な立派な死方を爲たと云ひ、伯爵の末期は唯だ悲哀であつたのみで無く、更に又壯大であつたと云ひ、父と息子との最後の對面は、憶ひ出す度毎に涙の滾ぼれる程哀なものであつて、全くの末期までも、何んな物も、何んな人も善く記憶へて居て、息子に實に慈愛の深い哀れな言葉を掛けた父も、全然くづ折れて居ながらも、末期の父に心配させまいと、自分の悲痛を隠くさうと努めて居て見ても傷ましかつたビエールも、執方を執方と云ひ難い雙方共に氣高い舉動で有つた、と云つた「それは傷ましいことです、けれども、人の心の爲めには爲るんですよ、年老つた伯爵や、その立派な息子のやうな人々を見れば、誰の心でも高尚に爲りますわ」と、云つた。で、又公爵嬢や公爵ヴァシイリのことも人々に話した、が、それは、非常な秘密だといふので、呟語で話した、勿論、非難の意味を添へて。

## (二十三)

公爵ニコライ・アンドレエヴィチ・ボルコンスキイの領地、荒涼丘では、若公爵アンドレエー夫婦の歸省が毎日待ち設けられた。が、この待ち設けの爲めに、老公爵の家内の日々の常例の生活は攪き亂されは爲無かつた。交際社會では「普魯西亞王」と綽名されて居た、一度總司令官であつた公爵ニコライ・アンドレエヴィチは、ポオル帝の治世に、自分の領地へ追放されて、それ以來ズツと、公爵嬢マリヤやその附添のマドモアゼル・プウリアンヌなど、一緒に、荒涼丘で暮して居たのだ。新帝の世になつて、都へ歸へる許可を得てさへ、彼は、誰でも彼に逢ひ度く思ふ者は、其者の方からして、莫斯科から荒涼丘まで百五十露里の旅を爲て來るのが宜からう、彼自身の方では、何人も何物も見度くも、欲くも無いのだと云ひ、一度も田舎の家を出無かつた。この人の持論に依ると、人間の不徳は悉皆唯だ二つの根源——懶惰と迷信——から出るものであり、又、人間には唯だ二つの徳しきや無い——即ち、精力と伶俐がそれだ、といふのであつた。彼は、自分自ら娘の教育を企てた、娘の身に前云ふやうな良質を育成しやうといふので、彼は、娘が二十歳になるまでズツと續けて代數と幾何を教へた、そして、

娘の生活を何時でも何かしら爲て居るやうに割り振つて極めて了まつた。彼自身はといふと、何時も感想録を書いたり、高等數學の問題を解いたり、旋盤の上で喫煙草函を造つたり、庭畑の手入れを爲たり、何時も領地の何處かしらで建築中であつた農事の建物を見廻つたりして、暮して居た。仕事をやり上げるのに大切なことは規則正しくするといふことだといふので、彼は、自分の暮し方を正確の最高度にまで規則正しく爲て了まつた。食事はキッチンと極まつて何時も變はらずに出され、何時といふどころでは無く、何分といふまでチャンと極まつて居た。周囲の者に對しても娘から召使に至るまで、公爵は油斷無く何時も嚴重に扱かつた、で、沒義道であること無しに、彼は、最も沒義道な人でも容易には得ることが能き無いやうな度合の尊敬と畏怖を家内のものに起こさせたのだ。退職者であり、政治社會には何の勢力も無い人であつたに拘らず、公爵の領地があつたその地方の高官が誰も彼を訪問し無ければならぬやうに思つて、建築技師や、庭師や、公爵嬢マリヤなど、宛然同なじやうに、立派な客室で、公爵が必定其所へ出て來る何時もの極まつた時間まで待つた。で、書齋の非常に高い戸が開いて、小さい萎びた手の、顔を擧める度毎に鋭い若々しい眼の光を隠す白い押冠さるやうな眉の、裝粉を撒つた鬘を冠つた老人の小さい姿を現はした時には、客室に居る人々は誰彼無しに、同なじ

やうな尊敬は元より、畏怖の念さへも起すのであつた。

若い人々が歸り着く筈であつた日は、公爵嬢マリイヤは何時もの極まつた時間に、父親に朝の挨拶を爲る爲めに、客室へと行きながら、オド／＼して、十字を切り、腹の裡で祈禱を繰り返した。毎日公爵嬢は左様いふ風で行き、毎日、父親とのその日の對面が事無く済むやうにと祈つたのだ。装粉を撒つた鬢の老家僕が客室の自分の席から静に起つて、「お入りなさい」と、叫びた。戸越しに旋盤の音が聞えた。公爵嬢は滑らかに軽く開いた戸を恐は／＼抑へたま／＼で、戸口に立ち止まつた。公爵は旋盤を動かして居た、そして、少時振り返つたばかりで、仕事を續けた。

大きい部屋は、始終使用つて居るらしい道具で一杯であつた。書籍や圖の載つた大きい卓子、鍵の付いた硝子張の高い幾個かの書籍函、開いたまゝの古い雜記帳の載つた公爵が立つたまゝ、で書く爲めの高卓子、細工道具を周圍に列らべ、鉋屑を散らかした指物用の旅盤、斯ういふ總ての物が、絶間の無い、何時も變はらぬ、秩序正しい活動を示めて居た。鞆鞆風の銀刺繍の靴を穿いた公爵の小さい足の運動、筋ばつた小さい手の確乎した押し方が、未だ意志の強い敏捷な健かな老年の力を表はして居た。もう二三通廻してから、公爵は旋盤の踏板から脚を離し、

鉋を拭き、盤に付いた革袋のなかへそれを落とし、卓子の所へ行つて、娘を呼んだ。彼は決して兒子に普通の祝禮を授け無かつた、唯だ毛の蒙茸とした未だ剃ら無い頬部をさし出し、娘を頭から脚までズツと見渡して、荒々しいながら、同時に非常に愛情の籠もつた聲で、「變りは無いか。……宜しい、では、お坐り」と、云つた。で、自分で手づから書いた幾何の問題帳を取り、脚で椅子を引寄せた。

「明日は」と、開けた頁に振り向き、ザラ／＼した爪で一つの節から他のへと記印を付けながら、速語に云つた。公爵嬢は問題帳の上へと顔を寄せた。「待ちなさい。お前に手紙が来て居る」と、老人は不意に云つて、卓子の彼方に垂下てある袋から、女の手の封筒を引張り出し、それを卓子の上に置いた。

公爵嬢の顔は、手紙を見ると、所斑に赤く染まつた。で、それを急いで取つて、その上へ顔を下げた。

「エロアズからかの」と、公爵は、冷たい微笑で、未だ強い黄色い齒を見せて、尋いた。「左様です、ジュライから」と、オツ／＼と公爵を見、オツ／＼と微笑みながら、公爵嬢が答へた。

「これから来る手紙でもう二つはその儘お前に渡すが、三本目は私が読む」と、公爵は酷しく云つた。「お前は痴愚なことを散々書いて居りはせんかな。三本目は私が読む」

「これもお読みなさい、父上様」と、尙一層赤くなつて、手紙を父親に指し出しながら、公爵嬢は答へた。

「三本目だ、三本目と私は云つたのだ」と、公爵は言葉短に叫んで、手紙を突き遣つて、卓子に肘を凭せて、幾何の圖のある帳面を自分の傍へ引寄せた。

「さア、嬢様」と、娘の顔に摺れ付くやうに帳面の上へ顔を持つて行き、娘の坐つて居る椅子の背に片腕を掛けて、老人は始めた、で、公爵嬢は、最早長いこと父親に附屬物のやうに思ひ慣れて居た老年と烟草とのへんな強い嗅氣に四方から圍まれたやうな氣が爲た。「さア、嬢様、この三角形は孰も等しいのだ、善くご覧、ABC角……」

公爵嬢は自分の顔の傍で輝つて居る父親の眼を恐々一寸く見た。赤い所が顔全體方々に出来、そして、勿論一語も解から無かつた、太くオド／＼して了まつて、餘りの恐さに、それから父親が爲て呉れた説明は、何れ程明白なものであつても、寸毫も呑み込み得られ無かつた。教へ人の答か、習ひ人の答か、毎日さういふ同なじ體態が繰り返された。公爵嬢の眼は曇つた、

何物も見ることができず聞くこともでき無かつた、自分の傍にある嚴ぶかしい父親の干涸びた顔、呼吸、嗅氣の外何物も感ぜられ無かつた、そして、何うかしてその書齋から能きだけ早く逃げ出し、自分の部室で氣儘に問題を解き度いものだと思ふより外、何物も考へられ無かつた。老人は機嫌を損じた、高いガリ／＼いふ音を爲せて、自分の坐つて居た椅子を後へ引摺り下げて、怒りだすまいと、自分を抑制へやうと骨折つたが、大抵毎時も、怒り出し、叱り付け、そして、時には、帳面を擲り飛ばした。

公爵嬢は問に間違つた答を爲た。

「あ、お前は實に間拔だ」と、公爵は叫んで、帳面を突き飛ばして、グルツと背部を向けた。が、直ぐ立ちあがり、彼方此方と歩き、公爵嬢の髪の上に手を措いて、そして、又坐つた。卓子に身體を寄せて、説明を續けた。「これでは不可、これでは駄目だ」と、公爵嬢マリヤが宿題と一緒に問題帳を傍へ引寄せ、それを閉ぢて、部室を出やうと爲した時に、公爵は云つた。「數學は大きい學問だ、嬢様。私は世間の痴愚な娘たちに有り勝な風にお前をならせ度く無い。耐忍しなさい、今にこれが好きになるから」。娘の頬部を軽く叩いた。「數學はお前の頭の裡の痴愚なことを悉皆追ひ拂つて了まつて呉れるわい」。娘は去る所であつた、が、公爵は手真似で止めた、

そして、高卓子から新しい縁の切つて無い書籍を取つた。

『エロアズがお前によこした書籍もあつた、神祕の解訣と云ふやうなものだ。宗教的なけれども、私は誰の信仰にも干渉は爲ん……私はこれを見た。持つておいで。さア、急げ、急げ』

公爵は娘の肩を叩いた、そして、自身娘の出た後の戸を閉めた。

公爵嬢マリイヤは、滅多に顔から無くならず、その爲めに、不器量な病身らしい顔が益々不器量にされたその銷沈たオヅくした表情で、自分の部室へ返つた。小形の肖像の幾つも載り、書籍や寫本の散らばつて居る書記卓子の所へ坐つた。公爵嬢は父親が奇麗好きなのと同じ度合に於てダラシが無かつた。公爵嬢は幾何の問題帳を下へ置いて、もどかしさうに、手紙を開けた。手紙は公爵嬢の小兒の時分からの友達から來たのであつた、その友達といふのは、誰でも無い、ロストオフ家の命名日の客に行つて居たジュリイ・カラアギンその人であつた。

ジュリイは佛蘭西語で斯う書いた。

『親愛な、そして、非常な信友——離れて居るつてもものは眞個に厭な苦しいものねえ。私の存在と幸福のうち半分は貴女のお陰だと私自分で始中終云つてますの、また、斯様に遠く

離れて居ても、二人の心は見え無い縁で互に結び付けられてるんだと、云ひくしてますの、ですけども、私の心は今の境遇に謀叛するのよ、種々面白いことはあつても、私はお互に別れてから以來私の心の奥で感じて或る潜んだ悲哀は征服することができませんわ。何故私たち二人は貴女の家の大きい書齋でこの夏のやうに、あの青い長椅子、あの二人切りで胸を打ち開け合つたあの長椅子の上と一緒に居られ無いでせうね、何故私は、三月前のやうに、眞個に懐しい眼付、私がこの手紙を書けると眼前にチラ付くやうな眼付、彼の貴女の優しい、落着た、物を見徹すやうな眼付から、新しい道徳上の力を與へて頂くことが能き無いでせうね』

此所まで讀んで來ると、公爵嬢マリヤは溜息して、右に立つて居た姿鏡の方を見返つた。鏡は弱々しい形の好く無い姿と瘦た顔を映し返した。何時も陰氣な眼は、今しも、鏡の裡の自分を殊に失望した表情で見居た。お諛辭だと、公爵嬢は思つた、そして、振り向いて讀み續けた。が、ジュリイはお諛辭を書いたのでは無かつた、公爵嬢の眼——大きい、深い、輝いた——(暖かな光線が時に依りそれから流のやうに射出すやうに見えた)——は實際なかく美しかった、

顔全體の平凡であつたに拘はらず、眼だけは屢、唯の美人よりも、人を引付ける位であつた。公爵嬢は、自分の美しい表情を自分で見たことは無かつた、さういふ表情は公爵嬢が自分自身の事を思つて居無い時に現はれたのだ。誰でも左様である通りに、公爵嬢も鏡に向ふが最期、顔は氣取つた不自然な醜い表情に爲るのであつた。

公爵嬢は讀み續けた――

「莫斯科ぢう何處へ行つても戦争の話ばかりなの。私の二人の兄のうち一人は最早外征しました、もう一人は近衛に居て、やがて、國境へ進軍するといふんです。聖上陛下も彼得堡をお出になりました、世間の取沙汰では、戦争の危険に玉體をお曝しにならうといふのださうです。何うか神様の御意で、歐羅巴の平和を破壊しつゝあるコルシカの大妖怪が、全能の御恵で皇帝としてわれわれに與へられた天使の御手に依つて滅ぼされるやうにし度いものは有りませんか。二人の兄のことは申しませんが、この戦争のお陰で私の一番氣の合つた親愛な人を奪られて了ましたのよ。愛國の熱心で唯だじつとしては居られ無く爲つて、大學を廢して軍隊に投じた若いニコラス・ロストオフのとなんですの。ねえ、親愛なマリ

イ、私貴女に白状するけども、ニコラスが、未だ彼様に若いのに、軍隊に入つて了まつたのは、私に取つては非常な悲哀なんですわ。この夏貴女にも噂したこの若い人は、今の世この頃のやうな二十歳で老爺さんになつて了まう男たちの間では、眞個に珍らしい位氣高くて若々しい人なんですの。取り分け、非常に率直で、情の深い所が結構なのよ。眞個に心の清い、詩的な人なもので、私の交際は、ホンの少時だけでも、それが、最早これまでに随分苦しんで来た私の哀れな心の一番懐かしい憶記に爲つて居る位なんですの。私何時か、訣別と、別れる時に話し合つたことなんぞを悉皆貴女にお話し爲ますわ。今は未だそれが餘り新し過ぎてお話しする氣に爲れ無いのよ。あ、親愛な友よ、貴女は、眞個に強く胸に徹する左様いふ喜びも苦痛も経験したことの無いのは幸運なんですの。貴女は幸運よ、大抵苦痛の方が自然強いですからね。伯爵ニコラスは私に取つて友達より以上のものになるには未だ若過ぎることは私善く知つて居るんです、けども、この詩的な純潔な交際は私の心の要求を十分満足させたんですわ。まア、この話はこれ切りにしませう。莫斯科ぢう何處へ行つてもそれで持ち切つて居る此頃の話の種は、老伯爵ベズウホフの亡つたこと、その遺産のことなんですの。思ひ懸け無いでせう、三人の公爵嬢は宛然何にも貰は無い位、公爵ヴァシイリ、これ



は眞個に何にも貰へずに、何も彼も悉皆モシユ・ビエールに遺されたんです、ビエールは尚その上に、正當の息子と認められたもんですから、彼の人は今は伯爵ベズホフに爲つて、露西亞ちうで一番の物持になつて了まつたんですよ。噂では、公爵ヴァシイリはこの事件では大變面白く無い行動を爲たとかで、全然銷沈り切つて彼得堡へ引上げて了まひましたつて。

私なんぞ遺産だの遺言状だのつて其様な複雑なことは寸毫も解りは爲無いんですけれどもね、面白いことには、私たちが唯のモシユ・ビエールとして知り來つた彼の若い人が伯爵ベズホフと爲つて、露西亞ちうで一番大きい仲間に數へられるやうな富豪に爲つてからつてものは、妙齡の娘を背負てる母親連やさういふ娘たち自身の人——まづ餘まり香ばしく無い人と云つて宜いだらうと私何時も思つて居たんですが——に對する聲の調子だの舉動なんぞは、俄然と變はつて了まつたんですよ。世間の人は面白づくにこの二年以來といふもの何處の人だか私の知りも爲無い人を私の夫に擬らへて居たんですが、今度は、莫斯科の結婚評判記では、大抵私を伯爵夫人ベズホフに爲て居るんですよ。けども、貴女は必然私にさうなる氣の無いことを認めてくださるでせうね。時に、結婚といへば、誰も伯爵さん——世話好きの——アンナ・ミハイロヅナが、極く秘密だからとのお斷り付で、貴女の爲めに

企畫んで居るつて、内密で私に話してくださいましたんですよ。先方は誰あらう公爵ヴァシイリの息子さんのアナトオルなの、何でも身持を直させる爲めに、金持で身分の高い人をお嫁に貰はうといふんで、親類ちうの札が貴女に落ちたといふんですの。貴女がこれを何うお考へなのか、それは私解から無いけども、前以て貴女に知らせとくのが義務だと私思ふんですの。彼の人は、大變奇麗で、極く烈い身持の人ださうです、私の聞き出せたことは唯だそれだけの。

けども、噂は最早これだけに爲ませう。最早これで二枚目の紙が書き切れる所なの、そして、母がアブラアキシンへ晩餐に行くんだからつて、呼びによこしてのものですもの。此方では今大評判の宗教書を送りますから読んでください。この書籍のなかには、人間の考想では其所まで達することは到底も能き無きことがなかく、多いんですけども、眞個に好い書籍には違ひ無く、讀めば心が落ち着て高まるのですの。左様なら、貴女のお父上に宜しく、マドモアゼル・プウリアンヌには呉々も宜しく。心から私貴女を抱擁してよ。——ジュリイ。それから——貴女のお兄さんと奇麗な可愛い奥さんのことを聞かせてください」

公爵嬢マリイヤは、夢見るやうに微笑みながら、少時考へて居た（輝いた眼に勢ひづけられた顔は、平常とは全然變はつて了まつて居た）。突と起つて、重い足音を爲せて、卓子へ行つた。紙を取り出した、そして、手が手ばしくその上を動き始めた。公爵嬢は次のやうな返答を書いた――

「親愛な、非常な信友――十三日のお手紙は大變嬉れしく拜見しました。では、依然貴女は私を愛してくださるのね、詩人らしい心のジュリイ。では、貴女がさう太く厭がる遠く離れて居るといふことも、貴女にはその常例の影響を及ぼさ無かつたのですね。貴女は離れて居ることを歎いて居らつしやる――けども、ねえ、若し私もそれを歎くので有つたら、私のやうな自分の懐しい者は皆居無くなつて了まつた者は何うすれば宜いのでせうね。あ、若し私が私を慰さめて呉れる宗教を持つて居無いのであつたら、人生は私に取つて何んなに悲しかつたでせう。彼の若い人に對する貴女の愛情の話を聞いて私が嚴づかしいことを云ふだらうと、何で貴女さう思つたんですか。さういふ事柄では、私は私自身に對しての外は、何方に向つても酷しくは爲ませんわ。私他の人のさういふ心持は察せられますわ、で、私自

身さういふ感情を持つたことが一度もありませんから、同情は能き無いかも知れませんが、決して非難は爲ませんのよ。唯だ、基督教の愛、われ／＼の隣人を愛すること、われ／＼の敵を愛することの方が、若い男の美しい眼の爲めに、貴女のやうな詩人的な優しい若い娘の胸の裡に起させられるさういふ感情より、もつと貴く、もつと快く、そして、もつと美しいと、私には思はれるだけですの。

伯爵ベズウホフの亡くなつた報知は、貴女のお手紙より前に、私どもへ参りました、そして、父に大變強い感動を與へました。前の「大世紀」の代表者は伯爵ベズウホフと外もう一人ある限りなのだから、今度は自分の番なのであらう、けども、自分は能きただけを遅く來させるやうに努めるのだから云つてますの。神様のお助で、左様な恐ろしい不幸の起ら無いやうにと祈つて居ますのよ。ビエールは私小兒の時から知つてるので、彼の人に對する見方は貴女とは私少し違ひますわ。彼の人は非常に善い心を持つてるやうに私には何時も思はれたんです、それが私には人に於て最も尊ぶ長所なんです。遺産と、それに就ての公爵ヴァシイリの舉動のことは、孰方に取つても實に悲しいことではありませんか。あ、親愛な友よ、富める者の神の國に入よりは駱駝の針の孔を穿るは却て易しといふ、われ／＼の神聖

な救主のお言辭は恐ろしい眞實の言辭です、私は公爵ヴァシイリを憐れみ、ピエールの爲めには眞個に氣の毒に思ひますの、彼様な若い身で、非常な富の重荷を負せられたのですもの、何んなにか様々の誘惑に曝されることなんでせう。私は私がこの世で一番願ふことはと尋れば、それは、最も哀れな乞食よりも尙食乏であることなんでせう。其地で大評判だと云つて送つてくださった書籍はホントに有り難うございます。貴女は、多くの善い物のなかに、われ／＼の弱い人間の理解力では解から無い物があると云つてくださったのですが、何うしても解から無い書籍を一生懸命に讀むのは何うも無益のやうに思はれますわ、解から無ければ何の利益も無い譯では有りませんの。自分たちの想像心を煽り立て、基督教の簡素とは全く反對な、事を過大に爲る氣分を拵へさせて、唯だ疑惑ばかり起こさせるやうな異様な書籍で自分たちの頭腦を混雜させて了まうことを、何だつて、或る人々が彼様熱心に好くのだが、今まで何うしても解から無いで居ますのよ。私たちは師徒語録や、福音書を讀のが宜いんですよ。そんな裡にある神祕なことは無理に解かうと爲無い方が宜いんです、われ／＼のやうな哀れな罪ある者は、われ／＼と永遠の神様との間の超えることの能き無い幕に成るこの肉の殻を着て居ながら、神様の恐ろしい、そして、神聖な祕密に參しやうなんぞと、何うして

厚顔しく出しや張れるものですかね。私たちは、われ／＼の神聖な救主がこの世の中でのわれわれの行爲の案内としてわれ／＼に遺して下さつた種々な崇高い法則を學ぶだけに止めて置く方が宜いんです、私たちは、さういふ法則に従ひそれを守るやうに努めやうぢやありませんか、私どもは、われ／＼の弱い人間の知恵を頼みに爲無ければ爲無いほど、神様から出無い有ゆる知識をお排ぞけなさる神様の御意には一層協ふといふこと、神様がわれ／＼に知らせまいとお隠しなさる積りの物を、無理に知らうとするやうなことを爲無ければ爲無いほど、神様はさういふ物を一層早くご自分の神聖な靈に依つてわれ／＼に現はし示めて下さることを、固く信じるやうに爲やうぢやありませんか。

父は未だ縁談を云ひ込んだ人のことは私には話しませんの、唯だ手紙が来たといふこと、公爵ヴァシイリが逢ひに来る筈だといふことを、私に話した限りなんですの。私の縁談に就ては、私は、親愛な非常な信友の貴女に、私は、結婚つてものは、われ／＼が従は無ければなら無い神聖な制度だと思つて置くことを云つて置きます。何れほどそれが私に取つて苦しくとも、若し全能の御神が妻となり母となる義務を私に負はせ給ふことになつたら、夫として神様が私にお與へなさる人その人に對する私の感情を自分で調べて心配するやうなこと無し

に、私の力で能きる限り忠實に私の義務を盡すやうに骨折りませう。

私は、家内と一緒に荒涼丘へ来ることを云つた兄からの手紙を受け取りました。これはほんの短い間の嬉しさです、兄は、何の理由でか、又何うしてだかわれ〜が引き込まれた、この不幸な戦争に出る爲めに直に去つてしまふんですもの。戦争の外何の話も爲無いのは、用務と交際の忙がしい貴女がたの方ばかりでは有りません、此所でも、都會の人々が田舎は大抵左様だと想像する田舎らしい労働や自然の物寂かきのなかで、尙且戦争の風説が傷ましく聞かれ、そして、傷ましく感じられてるのです。父は、前進とか背進とか、そんな様な私なんぞには寸毫も解ら無いとばかり云つて居ますの、そして、一昨日のこと、私何時ものやうに村の街路を散歩してまして、胸も張り裂けるやうな事を見たんのです……。それは、この邊の地方で募られて、軍隊に送られる徴募兵の出發でしたんです。出て行く人々の母親や、家妻や、小兒たちの態を貴女に見せ度かつたわ、雙方で歎けける聲を聞せ度かつたわ、哀れたつて、悲しいたつてお話には到底なりませんの。人間が、愛と罪を宥すこと、をお説きなすつた神聖な救主の律法を全然忘れてしまつて、お互ひに殺し合ふ術が非常に尊いものだといふことに爲て了まつたかのやうですのね。

左様なら、親愛な善い友よ、われ〜の神聖な救主と、その最も神聖なる母の恩寵と強い保護が貴女の上に常に在らんことを。——マリイ

『あら、貴女も手紙をお出しなさる所なの、公爵嬢、私も自分のを最早書いて了まつたのよ。私のは母親に遣るんです』と、Rを轉がして發音して、マドモアゼル・プウリアンスが、その心持の好い汁氣の多い聲で速語に云つた。顔全體を微笑に爲て、入つて来たその女は、公爵嬢マリイアの深い、沈鬱な、薄暗い零圍氣のなかへ、陽氣な氣輕さと自足の他の世界を齎らした。『公爵嬢、氣をお付けなさいよ』と、聲を低くして、云ひ足して、『公爵が云ひ合ひをなすつたの』と、Rをへんに轉がして發音し、自分の聲に聞惚て居るやうな態で、云つた。『ミハイイル・イヴァーノフと云ひ合ひをなすつたの。今甚くご機嫌を損じてるのよ、甚く氣むづかしくなつてるの。用心なさいよ、ねえ』

『もし、貴女』と、公爵嬢マリイアは答へて、『私、何様なご機嫌で父上様がいらつしやるか前以つて知らせてくださいと、貴女に頼んだ覚えは有りませんことよ。私尙且にも父上様のことを陰で彼此云ひなんぞ爲無いんです、そして、誰も其様なことなんぞ云つて頂き度く有りません』

公爵嬢は自分の時計を一寸と見た。そして、翼琴の稽古を爲るのに極まつて居た何時もの時間に最早五分後れて居ることを見て、不安な顔に爲つて喫煙室へ行つた。一日を割り付けた規則に依つて、公爵は十二時から二時まで晝寝し、その間に、若い公爵嬢は翼琴の稽古を爲るのであつた。

(二二四)

白髪の侍僕が、大書齋での公爵の駢聲をうとくと聞きながら、客室で坐はつて居た。家のズツと離れた方から、閉めた戸越しに、デュセックのソナタの難づかしい歌節を二十度も繰り返へす音が聞えて来た。

その時、馬車と小荷馬車が昇降段へ乗り付けて来た、そして、公爵アンドレーが馬車から降り、小さい妻を扶け降ろし、自分の先きへ立たせて家の方へ行かした。鬘を冠ぶつた白髪のティフォンが、客室の戸口へヒヨイと現れて来て、公爵は今晝寝中だと、呟語で知らせて、そして、急いで戸を閉めた。ティフォンは何様な非常な事件でも、縦し實の息子の歸着でも、日々の常例を破ぶることは許されまいと思つたのだ。公爵アンドレーも勿論ティフォン同様その事實を善

く知つて居た。公爵は、暫時逢は無かつたうちに父親の習慣が變はつたか何うか確かめようとすると云ひさうに、懐時計を見た、そして、それが變はつて居無いことを確かめて、妻に振り向いた。

「最早二十分経つと起なさる。マリイの所へ行かう」と、彼は云つた。

小さい公爵夫人は此頃肥つた、が、微笑と極く薄い口鬚とを持つた短い上唇は、物を云ふ度毎に、尙且陽氣らしく可愛げに上がるのであつた。

「まあ、宛然宮殿ね、世間の人が舞踏會で亭主に挨拶を爲ると丁度同なじ表情で四邊を見廻はして、夫に斯う云つた。『おいでなさい、さ、早くよ、早くよ』で周囲を見廻はしながら、ティフォンに向いて笑み、夫に向いて笑み、裡へ案内して居た従僕に向いて笑んだ。

『マリイが稽古して居るんですね。そおつと行きませうよ、不意に驚かすのよ』公爵アンドレーは丁寧な、氣の無い表情で隨いて行つた。

『お前少しフケたね、ティフォン』と、手に接吻して居る老人に、云つた。

二人が翼琴の音が出て来る部屋へまで行か無いうちに、可愛らしい、赤つ毛の佛蘭西女が横戸から出て来た。マドモアゼル・ブウリアンヌは嬉しくて堪まらなさうであつた。

『あら、公爵嬢が何様にお喜びでせう』と、勢込んで云つた。『到頭でしたね。申して来ませう』  
『いゝえ、いゝえ、何卒、いけ無いのよ……』と、小さい公爵夫人は云つて、先方に接吻した。『貴女マドモアゼル・ブウリアンヌね、家の義妹の仲好の方だといふんで、最早ズツと前から貴女のこととは知つたてんですよ。彼の女は私たちが今日歸るとは思つて無いんですよ』  
それから、同なじ歌節を繰り返へし繰り返し爲て居る音が聞えて来る喫煙室の戸へと行つた。公爵アンドレーは、不愉快な何物かを豫期するとても云ひさうに、顔を顰めてハタと立ち止まつた。

小さい公爵夫人は入つて行つた。歌曲は真中で断れた、驚いた聲、公爵嬢マリイヤの重い足音、そして、接吻の音を公爵は聞いた。公爵が入つて行くと、公爵の婚禮の時に一度少時顔を合はせた切りの二人の婦人は、互に抱き合つて、さも懐かしさうに、互に唇の觸はり次第其所へ、唇を押し付けて居る所であつた。マドモアゼル・ブウリアンヌは、両手を胸へ押し付けて、二人の側に立つて居た、その恭やしい笑顔は笑ひ出しさうでもあり、泣き出しさうでもあつた。公爵アンドレーは、肩を揺すつた、そして、音楽の好きな人々が調子外を聞く時のやうに、顔を顰めた。二人の婦人は離れた、が、再、互に後れては大變だと思ふかのやうに、大急ぎで

抱き合ひだし、互に手に接吻し合ひ、引張り合ひ、それから、再顔に接吻し合ひだした。公爵アンドレーの非常に驚いたことには、二人は不意に泣きだして、再更に接吻を行ひだした。マドモアゼル・ブウリアンヌも泣いた。公爵アンドレーは、何う見ても、不安の態様であつたが、二人の女には自分たちが泣くのは全く當然のこと、思はれたのだ、二人が顔を合はせて涙を出さずに居られやうなどは、二人とも夢にも思は無かつたらしく見えた。

『あら、貴女……』  
『あら、マリイ……』二人の婦人は雙方同時に話したり、笑つたりした。『私昨夜夢に見たの。では、貴女今日だとは思つて無かつたの。あら、マリイ、貴女瘦せたことねえ』

『けども、貴女健康さうにおなりですわ……』

『公爵夫人だと直ぐに判りましたの』と、マドモアゼル・ブウリアンヌが口を挾れた。

『私夢にも思は無かつたの……』公爵嬢マリイヤが叫んだ。『あら、アンドレー、私寸毫も気が付か無かつたわ』

公爵アンドレー兄妹は互に手に接吻した、公爵は妹に、昔時のやうに依然泣き虫だなど云つた。公爵嬢マリイヤは兄に振り向いた、そして、涙の間から、その時美しく爲つた大きい涼しい

眼で、優しい懐かしさうな風で、公爵アンドレーの顔を見詰めた。小さい公爵夫人は間斷無しに話した。柔毛のある短い上唇が、必要次第、桃色の下唇に合ふ爲めに絶えず飛び下り、そして、又、キラ／＼する齒と眼の微笑に伴つて、別れた、小さい公爵夫人は、スバアスカヤ山で起こつた、既でのご自分の今の身體には大變なことになるさうであつた危険かつたことを詳しく話した。それから、直ぐ、彼得堡に衣服を悉皆置いて来て了まつたので、此所では何を着て居たものだらうか當惑して居るといふことや、アンドレーは前とは全然變つて了まつたことや、キティ・オディーンツォアが或る老人に縁付いたことや、公爵嬢マリイヤに對し立派な候補者が、出て来て居るのだが、その話は後で爲やうといふことなどを話した。公爵嬢マリイヤは尙且黙つて兄を見詰て居た。眼は、愛情と鬱憂に満ちて居た。明白に、その考想は、兄嫁の饒舌とは全く掛け離れた自分の方の道をたどつて居たのだ。公爵夫人が彼得堡での最後の夜會の談話を爲て居る最中に、マリイヤは兄に話し掛けた。

「で、戦争にお出なさることは最早全く極つてゐるんですか」と、云つて、溜息した。リザも溜息した。

「左様だよ、而も、明日だ」と、兄は答へた。

「私を捨てつちまうの、何故だか分から無いわ、昇任するといふと……」公爵嬢マリイヤは、終局まで聞か無かつた、で、自分の方の考想の道を追つて、兄嫁に振り向いて、優さしい眼を相手の腰に着けた。

「眞實なの？」と、云つた。

兄嫁の顔は變つた。溜息した。

「え、眞實よ」と、云つた。「あ、恐いことつたら……」

リザの唇が垂れ下がった。義妹の顔の傍へ自分の顔を持つて行つて、そして、再不意に泣きだした。

「慰ませ無きやア不可」と、公爵アンドレーは顔を擧めて、云つた。「何うだい、リザ？。お前の部室へ伴つてつてお呉れ、私は父上様の所へ行つて来るから。何うだね、彼方は——先の通りかい」

「同なじよ、先の通りなの、貴下は何うお思ひなさるか知れ無いけども」と、公爵嬢マリイヤが嬉しさに、云つた。

「同なじ時間、庭の散歩、旋盤もか」と、尋いた公爵アンドレーは、極く／＼微弱な微笑で、

父親に對して十分な愛情と尊敬は持ちながら、その持ち前の癖は可笑しがつて居ることを見せた。

「同なじ時間、そして、旋盤、數學も、それから、私の幾何のお稽古」と、さういふ稽古が自分の生涯の一番面白いことの一つでもあつたかのやうに、公爵嬢マリイヤは、如何にも快活に答へた。

二十分経つて、老公爵が起きる時間が来ると、ティフォンが呼びに来た。老人は、息子の歸着を祝つて、常例の規定を破ぶつた。食事前に、自分が着換を爲て居る所へ入つて来るやうにと云つた。老人は、土耳其下衣を着、装粉を使ふ、昔風の服装を爲るのであつた。で、公爵アンドレーが——他家の客室へ入つて行く時のやうな他人を侮蔑するやうな顔や舉動では無く、ビエールと話した時のやうな熱心な顔で——父親の部室へ入つて行くと、老紳士は、化粧部室で、被蓋布の掛つた廣いモロッコ皮の椅子に坐つて、ティフォンの手に頭を委せて居た。

「やア、勇士。では、いよ／＼ポナバルトと戦ふ積かの」と、ティフォンの手にある編んだ豚尾が許るす限り、装粉を付けた頭を振つて、云つた。

「奴にやア飽くまで用心せえ、右も左も、さうで無いと、奴直きにわれ／＼を臣下の列に加

へ居るわい。や、變りは無いかの」

で、息子に自分の頬部をさした。

老紳士は、食前の晝寢の後で、非常な好い機嫌であつた。(正餐後の睡眠は銀で、正餐前のは金だと云つて居たのだ)。濃い蓋被さつた眉の下から、息子を横眼で嬉しうにジロリ／＼見た。公爵アンドレーは行つて、父親が指した場所に接吻した。彼は父親の得意の問題——當時の軍人、殊に、ポナバルトに、就いての冷嘲には——何とも返答し無かつた。

「え、父上様、妊娠の家内を伴て参りましたんで、公爵アンドレーは、熱心な恭やしい眼付で父親の顔の有らゆる動きを見まもりながら、斯う云つた。『お身體は如何です』

「痴者か放蕩兒かで無くば病身では無い、私はお前の知つての通りだ、朝から夜まで働き續けの上に、まだ攝生して居る、で、勿論健康だ」

「神のお陰で、真に結構です」と、息子は微笑んだ。

「神は餘まり關係は無いわ。さア、何うだね」と、老人は言葉を繼いで、何時もお箱の問題に立ち戻つて、「確か戦略とか云つたね——ポナバルトと戦ふ獨逸仕込みの科學的方法といふのを聞かせ無いかい」



公爵アンドレーは微笑んだ。

「まあ一息繼がしてください、父上様、父親の癖が父親に對する自分の尊敬と愛情を少しも減らさ無いことを見せる笑顔で、斯う云つた。『ねえ、ホンの今しがた歸り着いた儘なんです』

「痴愚な事、痴愚な事」と、緊然組んであるか何うか豚尾を振つて試めし、それから、息子の手を取つて、老人は云つた『嫁の部室は準備して置いた。マリイが引受けて、いろ／＼な物を見せ、大籠に三杯振り位話し合ふだらう。女といふものは左様なものだ。嫁が来たのは私は嬉しい。さ、坐つて話さない。ミイヘルソンの軍、これは解かつた、トルストイのも……同士の進軍だ……だが、南方軍は何う爲て居るのかね。普魯西亞。その中立……それも皆知つて居る。塊地利は何うかね』斯う云つて、椅子から起つて、部室のうちを歩きだしたので、ティフオンは、その後から駈けるやうにして、服装のいろ／＼な品を渡した『瑞典は何うだね。何ういふ案配にボメラニアを通るかね』

公爵アンドレーは、父親の間の急激なのを見て、今始まらうとする戦役の軍略を説明した、最初のうちこそ氣乗の爲無い態であつたれ、進むに随つてだん／＼興が加はつて、そして、我知らず、何時もの通りに、露西亞語から佛蘭西語になつて了まつた。彼は、九萬の軍隊

が、普魯西亞を脅迫し、中立を擲うたせて戦闘に加はらせやうと爲て居ることや、その軍隊の一部がスツラアルスンドで瑞典軍と聯絡する筈のことや、二十二萬の塊地利軍が、伊太利とライン沿岸とで、十萬の露西亞軍と協働しやうと爲て居ることや、五萬の露西亞軍と五千の英吉利軍がネエブルスで合同する筈のことや、即ち、總計五十萬の軍隊が各方面から同時に佛蘭西人を攻撃する筈であることを話した。老公爵は、息子の談話を少しも氣に留めて居る態では無かつた。歩き廻りながら、少しも聞て居無いらしい態様で、衣服を着て居て、而も不意に息子の談話の腰を折つたことが三度あつた。一度は息子の談話を止めて、そして、叫んだ、『白いの。白いのだ』

これは、ティフオンが、自分の望み通りの直衣を渡さ無かつたのを云つたのだ。もう一度は、ピタリと止まつて、尋いた、『で、直きに産褥に入るかね』が、困まつたものだと言ふ態に頭を振つて、『や、そりやア不可。先を、先を』

三度目は、公爵アンドレーが最早まア説明を終はらうといふ所であつた。老人は、老年の假聲で、佛蘭西語の鼻歌を謡つた、――

『マルブルウが戦争に出る。何時歸ることやら』

息子は唯だ微笑んだ。

『この戦略は私も賛成だといふのではありません。唯だ今の實際の状態をお話したただけなんです。ナポレオンは今頃は最早われ〜に劣らん策を建て、居りませう』  
『うん、お前の談話も別に變つたことは無いな』で、老人は考へ込んだ態で、速語に獨語のやうに、繰り返した、『何時歸ることやら——さ、食堂へおいで』

(二十五)

装粉を掛け、顔を剃つた公爵は、判行で押したやうに極つて居る何時もの時間に、嫁と、公爵嬢マリイヤと、マドモアゼル・プウリアンヌと、抱への建築技師が待ち受けて居た食堂へ入つて行つた、技師は社會上の位置から云へば極く低い身分なので、さういふ待遇は常例ならば受られる筈のものでは無いのだが、老紳士の風變りの氣まぐれから、同じ卓子で食事を許さるゝことになつて居たのだ。常は階級の區別は嚴かましくつて、なか〜地方官などとは何んな重い位地の者でも、滅多には自分の食卓には就かせ無かつた公爵が、何したことか、フイと、人間は平等だといふ理論を説明する爲めに、隅で市松模様の手巾で鼻をかむ建築技師ミハイ

ル・イヴァーノヴィチを生捕つた、そして、度々、ミハイイル・イヴァーノヴィチも自分たちと寸毫も變はら無い人間なんだと、娘に云つて聞かした。食卓では、公爵は、主に無口な建築技師に談話を向けた。

この家の他の部室々々と同なじやうに、非常に天井の高い食堂では、公爵の入つて來るのが、家内一同と、椅子の背毎に立つて居る従僕たちに依つて待ち受けられた。腕に食卓手拭を掛けた給仕長は、食卓具合をズツと見渡して、従僕に合圖を爲、そして、絶えず心配さうに、壁の時計から、公爵が入つて來べき戸へと、一寸々々眼を移して居た。公爵アンドレーエーは、壁に懸つた今まで見無かつた圖抜た大きい金縁の額を見詰めた。それには、樹で示めたボルコンスキイ家の系圖が入つて居た、そして、それと向き合つて、又一つ懸つて居る同なじやうに圖抜けて大きい額は、確に抱への畫師の筆らしいルウリツクの後裔でボルコンスキイ家の始祖の積りの、王冠を頂いた王の拙い肖像であつた。公爵アンドレーエーは、この系圖を見て、頭を振つた、そして、好く似たボンチを見た人のやうに、笑つた。

『何處までも父上式だね』と、側へ來た公爵嬢マリイヤに云つた。  
公爵嬢マリイヤは、吃驚して兄を見た。マリイヤは何を兄が笑つて居るのか解ら無かつた。

父親が爲ることは何事でも、批評を許さぬやうに尊く思つて居たのであつた。

『誰だつて弱點はあるものだね』と、公爵アンドレーエは言葉を繼いで、『あの大きい智力で  
ありながら、此様な瑣然した下らんことを行なうなんて』

公爵嬢マリヤは、兄の思ひ切つた批評は感心能き無かつたので、抗辯しやうと爲た、が、  
その途端に、衆皆が待ち設けて居た足音が書齋の方から聞えて來だした。公爵は、宛然、家内  
の規定の動きの取れぬやうに嚴重なのに、故意、自分の立居の敏捷いことを對照させて居るか  
のやうに、何時もの通り、速い軽々とした歩調で入つて來た。その途端に、大時計が二時を打  
つた、そして、客室のも一つの時計が少し細い音でそれを反響した。公爵は止まつた、濃い被  
蓋さつた眉の下でギラ／＼する鋭い氣むづかしさうな眼が、一座をズツと見渡して、小さい公  
爵夫人の上に止まつた。小さい公爵夫人は、直ぐ、宮中官たちが皇帝の出御と見て覺えるやうな  
感を覺えた、この老人の周囲の人は誰でもさういふ畏怖と尊敬の念をこの老人に對しては覺え  
させられるのだ。公爵は小さい公爵夫人の頭を撫でた、それから、ブキツチョウな手付で、そ  
の頸を叩いた。

『善く、善く來てくださつたな』斯う云つて、公爵夫人の眼を凝乎と見て、歩いて行つて、

自分の席へ坐つた。『坐りなさい、坐りなさい、ミハイール・イヴァーノヴィチ、坐りなさい』  
彼は、自分の次の席を嫁に指した。従僕が公爵夫人の爲めに、椅子を引き出した。

『ほ、ほう』と、老人は嫁の圓くなつた體姿を見て、云つた。『最早やがてだ、氣の毒な』  
乾いた冷たい心持の悪い聲で笑つた、老人は、何時も、眼では無く、唯だ唇だけで笑ふので  
あつた。『運動せにやアいかん、能きるだけ運動せねば、能きるだけ』斯う云つた。

小さい公爵夫人は、その言辭を聞か無かつたし、又聞く氣も無かつた。唯だ默然で、オド／＼  
しながら、坐つて居た。公爵は夫人の父親のことを尋ねた、そして、夫人は話したし、微笑み  
だした。公爵は自分たちの知人のことを尋ねた、公爵夫人は、だん／＼勢付いて、どん／＼話  
しだして、いろ／＼な人からの傳言を公爵に傳へ、市の世間話を取り次いだ。

『伯爵夫人アブラクシンは氣の毒ですよ、御主人に亡くなられちまつて、彼の方は宛然眼  
を泣き潰す位でしたよ、可愛いさうに』と、だん／＼調子付いて來た。

公爵夫人が調子付くに従がつて、公爵はだん／＼氣むづかしさうに公爵夫人を見て居たが、  
不意に、最早十分相手の腹を見抜き、その氣質を測り知つたから最早用は無くなつたとしても云  
ふかのやうに、横を向いて、ミハイール・イヴァーノヴィチに聲を掛けた。

「おい、ミハール・イヴァーノヴィチ、ポナバルトの奴さん大閉口だらうせ。公爵アンドレエーが」自分の息子を何時も斯う呼んだのだ「豪い軍隊が彼に對して集められたことを話して呉れたのだ。貴下と私とは、何時もズブ下らん人間のやうに奴のことを話して居つたのだになア」

ミハール・イヴァーノヴィチは、何時「貴下と私」がポナバルトに就て左様なやうなことを云つたのか、全然推量し兼ねた、が、公爵がお得意の問題を持ち出す爲めに自分はダシに使はれたのだと氣取つたので、それから何うなるのだらうと、不思議さうに若公爵の方を見て居た。

「彼男はなかく、戰略家だよ」と、公爵は息子に、建築技師を指した、そして、談話が、戦争、ポナバルト、それから、當時の將軍たち、政治界の人物の上に移つた。老公爵は、當時の公人は何れも此れも残らず、軍事上及び政治上の事柄のABCをも全然心得て居無い唯の赤兒なのだと思つて居るらしかつた、それに、彼の考想では、ポナバルトは實際は下らぬ人間なのだ、唯だ彼に對するポティヨームブキンやスヴォーロフが一人も居無いので、成功したに過ぎぬといふのであつた。彼は、歐羅巴には國際間の葛藤が在るのでは無く、戦争もあるのでは無く、唯だその時代の人物たちが、實際の事を行つて居るやうな顔を爲て演じて居る人形芝居

のやうなものがあるばかりだとさへ、固く思ひ込んで居た。公爵アンドレエーは、近代人に對する父親の冷評を面白がつて受け取つた、そして、さも愉快さうに、父親の談話を誘致だして、聞き入つた。

「昔時のことは何物でも善く見えるんですかね」と、云つて、「もし、スヴォーロフその人がモロオが掛けた係蹄に掛つたし、又それから脱け出られ無かつたぢやアありませんか」

「誰がさうお前に話したな？ 誰がさう云つたんかい」と、公爵は叫んだ。「スヴォーロフ」で、

彼は自分の皿を擲つたが、ティフォンが巧く受けた。「スヴォーロフ……考へて見、公爵アンドレエー。豪い人物が二人有つた——フリードリッヒとスヴォーロフだ……。なに、モロオ。モロオはスヴォーロフの手が自由であつたら、彼の捕虜に爲るのであつた、けれども、スヴォーロフの手が宮中——戦争——勝話——火——酒——會議で縛られて居つたのだ、悪魔自身でさへ進退谷まらうといふ場合だ。あ、お前も今やがて、さういふ宮中——戦争——勝話——火——酒——會議が何んなものだから知らう。スヴォーロフはそれを押し付け得無かつた、で、ミハール・クツツゾフはそれを何うするのであらうな。い、や、駄目だ、なア、お前」と、言葉を繼いで、「では、お前も、お前の將軍たちもポナバルトをやつ付けることは能き無いかい、お前たち

は、佛蘭西人を呼んで来にやアならんね——盗人を捕へる爲めに盗人を雇ふのか。獨逸人の  
バアレンが、佛蘭西人のモロオを雇ふ爲めに亞米利加の紐育へ遣られた、斯う、その年露西  
亞の軍隊に入るやうにとモロオを招いたことに言ひ及んだ。「へんなことだ。……おい、ボティヨ  
ームブキンだの、スヴォーロフだの、オルロフなどといふ人間は、悉皆獨逸人なのかい。い、や、お  
前たちが全然本性を失つて了まつたか、それとも私が老碌したか、これは孰方かだ。まア巧  
くやらつしやい、私は見て居らう。ボナバルトが今の世の大名將に爲つたのだな。ふうん」

「彼様いふ軍略が悉皆良いと云つたんぢやア決して有りません」と、公爵アンドレーは云  
つた。「唯だ何うして乃父がボナバルトを左様見くびつておいでなのかそれが解らんのです。笑  
ふならばお笑ひなすつても宜いが、ボナバルトは右に左名將ですせ」

「ミハイイル・イヴァーノヴィチ」と、老公爵は、炙肉に氣を取られて、衆皆が自分のこと  
は忘れて了まつて呉れ、ば宜いがと希つて居た建築技師に叫んだ。「ボナバルトは大軍略家だと  
私は貴下に云は無かつたかね。おい、彼男も左様云つて居るよ」

「確に左様で、閣下」と、建築技師が答へた。公爵は再冷たい笑ひやうを爲した。

「ボナバルトは銀の食ヒを喰へて生まれて來たのだ(幸運に生れ付いたといふ事)。彼は非常

な良い兵を持つて居る。而も彼は最初獨逸人を攻めた。所で、何んな痴者でも獨逸人は破ぶれ  
るのだ。世界始まつて以來、誰も彼も獨逸人を破ぶつて居る。が、獨逸人は誰にも勝つて居ら  
ん。唯だ國內同士で勝ち合つて居つただけだ。ボナバルトはさういふ獨逸人と戦つて名を成し  
たのだ」

で、公爵は、自分の説では、ボナバルトが軍事及び政治の上で爲した失策だと思はれる事柄  
を一々解剖しだした。息子は反駁し無かつた、が、何んな議論を幾ら向けても、彼も老公爵同  
様自分の説を撤回しさうには無かつた。公爵アンドレーは聞いて居るのみで、返答を扣へた。  
彼は、最早長いこと何年も田舎へ引込んだ切りで世間と實際に暮して居るこの老人が、何う  
して、この二三年來の歐羅巴の軍事上、政治上の有らゆる事件を能く斯うまで詳しく且斯うま  
で正確に知つて、それに就いて自分の判断を下し得たものだらうかと驚か無譯には行か無か  
つた。

「お前たちは、私が老人で、現在の事態が解らんと思ふて居るかね」と、言辭を結び掛けた。  
「が、私はそれにはかり氣を取られて居るのだわな。夜も寝はせんのだ。おい、お前たちのこの  
所謂の名將が何處で名將たる所以を自ら證明したかね」

「その話は餘程長く掛ります」と、息子は答へた。

「うん、では、お前はボナバルトの方へ行け。マドモアゼル・プウリアンヌ、此所にも貴女の大盗賊の皇帝に感服して居る者がありますわい」と、老公爵は見事な佛蘭西語で叫んだ。

「私はボナバルト黨では無いぢやございませんか、公爵」

「何時歸へることやら……」と、公爵は假聲で語り、尙一層高い假聲で笑つて、そして、食卓から起つた。

小さい公爵夫人は、議論の間全然と、食事の其他の時間ちう、黙つて坐つて、心配さうに、最初は公爵嬢マリイヤ、次には舅と、一寸々双方の顔ばかり見て居た。衆皆が食卓を離れると、義妹の手を取つて、他の部屋へ伴れ込んだ。

「何んて賢い方なんでせうね、貴女の父上様は」と、公爵夫人は云つた。「だから、私恐く思ふのかも知れ無い」

「あら、それは〜親切な人よ」と、公爵嬢マリイヤは云つた。

## (二六六)

その次の晩、公爵アンドレエーは、立たうと爲て居た。老公爵は、何時もの規定を破らすに、食事後自分の部屋へ行つて了まつた。小さい公爵夫人は義妹の所に居た。公爵アンドレエーは、着換て、肩章の無い旅行服を着て、自分のに充てられた部屋で侍僕と二人で荷造りを爲て居た。自分で馬車とその上の荷の捆げ方を見分してから、馬を着けるやうに言ひ付けた。部屋には最早公爵アンドレエーが何時も携つて歩く物の外何物も残つて居無かつた、旅行函、大きい銀の酒入れ、二つの土耳其短銃、オチャアロフの配下での戦役から持つて歸つた、父親から譲られた軍刀などであつた。公爵アンドレエーの旅荷物は悉皆善く整つて居た、何れも此れも新しく、清潔で、布の蓋が掛かり、丁寧に平打紐で縛らつてあつた。

家を出て、違つた生活を始めやうとする時には、自分の行動を考へて見る習慣の人は大抵極く眞面目な心持に爲るものなのだ。さういふ利那には、人は自分の過去を顧み、そして、將來の策を建てるものなのだ。公爵アンドレエーの顔は甚く夢みるやうで、そして、優しかつた。背部で手を握り合せて、彼は、前の方を眞直に見、夢みるやうに頭を振りながら、部屋を隅から隅へと彼方此方速歩に歩いて居た。戦争に出るのを恐く思つたのか、或は、妻を捨てるのを悲しんで居たのか、或は又、兩方とも幾らかづゝあつたのか知れぬが——彼は、明白にさう

いふ心持で居るのを人に覺られ度く無かたのだ、と云ふのは、外の部屋で重い足音を聞くといふと、急いで手を解いて、函の被蓋を結び付けに掛かつて居るかのやうに、卓子の所に立つて、何時もの落着いた視ひ難い表情に爲つたからだ。それは、公爵嬢マリイアの重い足音であつた。

「貴下が馬を着けるとお言ひ付けなすつたつて云つてますんで」と、マリイアは、喘ぎながら、云つた（明白に駈けて來たのだ）、「で、私貴下と二人つ切りでもう少し話し度いもんですからね。また何れだけ長くお眼に掛れ無いか分から無いですもの。貴下私が來たのを怒りやア爲無くつて？ 貴下甚く變つたのねえ、アンヅルウーシャ」問題を説明するとも云ひさうに、斯う云ひ足した。

公爵嬢は「アンヅルウーシャ」と云ひながら微笑んだ。この氣嚴ぶかしさうな顔の、綺麗な男が、自分の小兒の自分の遊び友達であつた瘦せた悪戯好きの男の兒アンヅルウーシャと同なじ人だとは、考へて見れば公爵嬢には不思議な氣が爲るのらしかつた。

「で、リザは何處だね」妹の間には唯だ微笑だけで答へて、公爵は、斯う尋いた。

「甚く疲れて、私の部屋の長椅子で寝込んで了まつた位よ。ねえ、アンドレーエー、貴下は眞個に良い奥様を貰つたことねえ」と、長椅子に坐つて、兄に向いた。「眞個に小兒のやうに無

邪氣よ、眞個に可愛い賑やかな小兒よ。私彼の人が眞個に好きなの」公爵アンドレーエーは何とも云は無かつた、が、公爵嬢は、兄の顔に出て來た皮肉な侮蔑むやうな表情に氣が付いた。

「だけでも、誰だつて少許した弱點は許さ無ければ不可いことよ。さういふ所の無い人が何處にあつて、アンドレーエー？ 貴下は、彼の方が交際社會で生長し、其所で教育された女なのを忘れては不可くつてよ。それに、彼の方の位地は餘り心持の好いんぢやア無かつたの。人は誰でも位地へ自分を置いて見無きやアなら無いものよ。何物でもを理解するつてことは何物でもを宥るすことなんだわ。これまで彼様云つた暮じ方で來て、急に夫に別れ、而かも、今のやうな身體で、田舎へ獨り取り残されるのは、彼の方に取つて何んなだか、少しやア考へてあげてくださいよ。そりやア随分辛いわ」

公爵アンドレーエーは微笑んだ、われ／＼がその腹を見透したと思つて居る人々の談話を聞いて居る時のやうな顔で、妹を見た。

「お前は田舎で暮して居ながら、田舎の生活を其様に甚く厭に思ふのかい」

「私——それは全く別な話よ。何だつて私のことなんぞ持ち出すのよ？ 私はこれより外の生活を願は無いし、又實際今のと異つたことを願ふことも能き無いですよ、だつて、私これ

より外の生活は何んなのも知ら無いぢや有りませんか。だけでも、アンドレエー、華美な交際社会に慣れた若い女の人を取つて、唯つた一人田舎で若盛りを埋められて了まうんだつたら、何んな氣が爲るか、まあ一寸考へて見てあげてくださいよ、唯つた一人なのよ、父上様は一日中用に掛つて居るでせう、それから、私……貴下の知つてる通りよ……私は、上流の交際社会に慣れた女の人の面白い相手ぢやア無いぢやア有りませんか。マドモアゼル・ブウリアンヌが唯つた一人……」

「いや、私は何うも好か無いんだ、あのブウリアンヌは」

「あら、いゝえ、彼の女は極く氣質の優しい良い娘なのよ、それに、それは……氣の毒な身の上よ。近親といふものが誰も無いの、眞個に誰も無いのよ。實を云ひますとね、私最早彼の女は要ら無いの、唯だ邪魔になるばかりなのよ。私は、貴下も知つてる通り、昔つから、獨で居るのが好きな人間なんでせう、それに、この頃はだん／＼甚く左様なつて來たんですよ。私獨が好きなの。父上様は彼の女が大變好きなの。父上様が、親しく機嫌好く爲るのは、彼の女とミハイール・イヴァーノヴィチにだけなのよ、父上様は、彼の二人には恩人なんですもの、それは、ステルヌの謂つた通りよ、我等は我等に對して善を爲したる人々よりも、我等がそれに對して

善を爲したる人々を、多く愛するものなり。父上様は彼の女が孤兒だつたのを街路で拾ひ上げたのよ、彼の女は眞個に人の好い娘ですわ。父上様は、彼の女の書籍の読み方が氣に入つてるの。彼の女は、毎晩父上様に高い聲で書籍を讀んであげるのよ。眞個に讀み方が巧いんですよ。」「おい、打ち明けて話さない、マリイ、父上様の氣象の爲めに、時々は、随分苦勞するんだね?」、公爵アンドレエーは、不意に尋いた。公爵嬢マリイは、最初は吃驚したが、直ぐその間に對して蒼く爲つた。

「私? ……私? ……私が苦勞つて」

「父上様は昔つから殿しい人だ、けれども、この頃はだん／＼煩瑣なつて來たらしいね」と、公爵嬢マリイは、妹を困らせやうと爲るのか、試めさうと爲るのか、確に孰方かの積りらしく、父親のことを如何にも侮蔑したやうな風で、云つた。

「貴下は何から云つても善い人よ、けども、智力の誇と云つたやうなものがありますのね」、公爵嬢マリイは、確に、談話の絲筋よりは自分の方の考の道をたどつて居るらしく、斯う云つて、「で、それは大きい罪なんです。父上様を批評して善いものと貴下は思つて?。若し善いにしたつて、父上様のやうな方に對しては尊敬より外の感情は起りやうが無いぢやア有りま



せんか？。私は父上様と一緒に満足して、幸福に暮して居られるわ。私は貴下たち衆皆が私と同なじやうに幸福であることばかり望ましいんだわ』

兄は未だ合點せぬ態で頭を振った。

『私心配になる唯つた一つの事はね、——打ち明けて云ひますよ、アンドレー、——宗教上の事柄に就ての父上様の考案なのよ。彼様な優れた智力の方が、何うして、この晝のやうに明白なことを見ることが能き無いで、彼様な過失に陥つておいでなのか、私何うしても解りませんの。これだけが私の心配なのよ。だけれども、これさへ、何時かちうから善い方へ少許變つて來たらしいのよ。この頃は、冷嘲も往時ほど酷くは無く爲つて來て、それに、父上様が逢つて、長いこと話してることがある修道士が一人出來たんですよ』

『おい、お前、お前もその修道士も烟硝や彈丸を無駄に損してゐるんぢやア無いかね』と、公爵アンドレーは、皮肉に然し優しく云つた。

『あら、随分、私は私の願を聞いてくださるやうに、神様に祈つて、お凭りませすだけなんだけわ。アンドレー、ねえ』と、マリイアは少時黙まつて居てから、オズ／＼云つて、『貴下に後生一生の願があるんですがねえ』

『何ういふことだね、お前』

『いゝえ、何うしても厭だと云は無いと前に約束してください。貴下の寸毫も困まることぢやア無いの、貴下に取つて可笑しいことぢやア決して無いのよ。唯だそれは、私に取つて慰籍になることなのよ。約束してください、アンヅルウーシャ』と、手提袋に手を入れて、中で何物か持ったまゝで、未だ見せは爲ずに、その持つて居る物は、願ひの目的物なのだが、その願を聴くといふ約束を得無いうちは、手提袋からその何物かを出せ無いのだと云つて居るかのやうに爲て居た。

『太く困まることだつても……』と、その願は何なのか大凡察したらしく、公爵アンドレーが答へた。

『貴下はこれを何う思つても構は無いのよ。貴下は父上様と同じなんだもの。何う思つても宜いのよ、だけれども、私が爲るんだからと思つて、これを爲てください。何卒、爲てくださいよ。父上様の父上様、祖父様が何時も何の戦争の時もお掛けなすつた物なの……』未だ手提袋の中で握つて居るものを出さ無かつた。『貴下約束してくださいるのね、では』

『勿論さ、何物だね？』

「アンドレー、私聖像で貴下を祝福するのよ、何んなことがあつても脱ら無いと約束してくださいよ。……貴下約束する？」

「一噸も重量があつて、私の頸が折れるので無いといふのなら……。お前の氣の済むやうに」と、公爵アンドレーは云つた。と、直ぐ同時に、その冗談と共に妹の顔に出て来たさも悲しさうな表情に氣が付いて、氣の毒に爲つた。「有り難う、何うも有り難う」と、云ひ足した。

「貴下の知ら無い間に、神様は貴下を助け、貴下にお慈悲をお掛けなさすつて、御自分の方へ貴下をお引き寄せになるのですよ、神様にばかり眞理と平和は有るのですからね、公爵嬢は、感情の迫つた震へ聲で、恭やしい手付で、華奢な細工の小さい銀鎖の着いた、銀で縁取つた黒い顔の救世主の古風な小さい楕圓の聖像を、兩手で、兄の前に指し上げた。で、十字を切り、聖像に接吻し、そして、アンドレーにそれを指し出した。

「何卒、アンドレー、私の爲めに」

親切なオドくした光が、娘の大きい眼から射した。さういふ眼付が、瘦せた脆弱さうな顔を勢付けて、美しく見せた。兄は直ぐ聖像を取る所であつた、で、妹は止めた。アンドレーは氣が付いた、十字を切つて、そして、聖像を取つた。顔付は優しかつた（彼は感動したのだ）、と

同時に皮肉であつた

「有り難う、眞個に」と、妹は兄の額に接吻して、再長椅子に坐つた。兩方とも黙つて居た。

「では、先刻云つたやうに、アンドレー、往時からさうだつたやうに、親切に、情深くしてくださいよ。リザを左様酷く判断し無いでね」と、妹は始めた、「眞個に優しい、眞個に人の好い女よ、それで、今の所彼の女の位置は眞個に辛いですよ」

「私はお前に何にも云は無かつたと思ふんだが、マアシャ、我妻の爲ることを悪く云ふやうなことも、又、彼女に對して不満があるのだとも。何うして、お前はさう云ふのかい」

公爵嬢マリイアは、顔ぢう方々が赤く爲つた、そして、悪かつたと思つたかのやうに、黙まつて居た。

「私はお前に何にも云は無かつたんだ、けれども、お前は云はれたらう。私はそれを悲しく思ふんだ」

赤いポツくが、公爵嬢マリイアの額、頸、頬部で濃く爲つた。何か云ひ度かつた、が、言辭が出無かつた。兄の推量は的中つた、妻は、食事の後で、泣いた、難産だと蟲が知らすやうな氣が爲ると云ひ、それが恐くつて爲方が無いと云ひ、それから、自分の苦しい運命、舅のこ

と、夫のことを訴へたのだ。散々泣いてから、眠て了まつた。公爵アンドレーは妹に對して氣の毒に思つた。

『唯だ一つお前に云つて置くがね、マアシャ、寸毫も彼女は何一つ責めるべきことを爲たことは無いんだ、私は現に今まで一度も責めたことは無いんだ、又將來も矢張り左様だらうと思ふんだ、が、それと同時に、此れまで彼女に對して私自身惡い事を爲たといふ覺へは無いし、又、何様な境遇に私が爲るにしても、それは何時までも、左様だらうと思ふんだ。けれども、實際は何うだと云はれ、ば……私は幸福なのかと云はれ、ば、いやと云ふより外は無い。彼女は幸福なのか。いや、左様では無い。何故われ／＼二人がさうなのか。それは、私には解ら無い』

斯う云つて、彼は、妹の傍へ行つて、身體を屈めて、妹の額に接吻した。彼の美しい眼が、才智と親切の何時にも無い光で輝いた。が、彼は、妹を見て居たのでは無く、妹の頭を越えて、開いた戸の黒闇の方を見て居た。

『彼女の所へ行かう、私は暇乞を爲無ければなら無い。いや、お前一人で行つて、起して呉れ、私は後から行くから。ベツルウーシカ』と、侍僕を呼んで、『此所へ来て呉れ、此所等の物

を持つて行くんだ。これは、座の下だ、これは右側だ』

公爵嬢マリイヤは、起つて、戸の方へと動いた。が、止まつた。『アンドレー、貴下が信仰があつたら、貴下は、自分では感ずるこの能き無い愛を興へてくださるやうに、神様に訴へたでせう、そして、神様は、貴下の祈禱をお聴になつたでせうに』

『左様、或は左様かも知れんね』と、公爵アンドレーは云つた。『おいで、マアシャ、私は直ぐ行くから』

妹の部屋へ行く途中、一つの家を今一つの家に結び付けて居る廊下で、公爵アンドレーは、愛嬌を湛えて微笑んで居るマドモアゼル・ブウリアンヌに遭遇した。その日それで三度、その女は無邪氣な熱心な笑顔で、人氣の無い所で公爵の通り路へ出て來たのであつた。

『あら、お部屋に居らつしやるとばかし思つてましたよ』と、何故か顔を赤くし、眼を伏せて、云つた。公爵アンドレーは、女を睨み付けた。不意にグツと臍に觸つた様子が顔へ出て來た、彼は女に何とも云はずに、女の眼は見無いで、額や髪を非常な侮蔑した態で見詰て居たので、佛蘭西女は眞赤に爲つて、一言も云はずに行つて了まつた。妹の部屋まで行くと、小さい公爵夫人は起きて居て、言語を追つ掛け追つ掛け大急ぎで繰り出す陽氣な小さい聲が、開い

て居る戸から聞こえた。宛然、長く引き止められて居たので、後れたのを取り返さなければならぬ。無いとでも云ひさうに、話して居た、そして、例の通り、佛蘭西語を使つた。

「いゝえ、けども、それは、年を後へ取らうとも思つてゐるらしい、附け髪の、口ちう入齒の年老つた公爵夫人ズウボフなんぢやアありませんか。は、は、はア、マリイ」

公爵夫人ズウボフに就てのそれと寸分違は無い文句を、それと寸分違は無い笑を、公爵アン・ドレーエーは、他人の前で、妻から最早五度聞て居た、彼は部屋へそおつと入つて行つた。圓々とした血色の好い小さい公爵夫人は、手に仕事を持つて低い椅子に坐つて、彼得堡の追憶や流行言詞をトットと注ぎ出して居た。公爵アン・ドレーエーは、傍へ行つて、その頭を撫でた、そして、行旅の疲労が抜け切つたか尋いた。公爵夫人はそれに答へて、そして、依然饒舌り續けた。

六頭立の馬車が昇降段の所に立つて居た。秋の暗の夜であつた。馭者は馬車の棒を見ることゝ能き無かつた。提燈を持つた家僕が、昇降段の上を彼方此方と駆け廻はつて居た。大きい家は、燈火の點いた大きい窓々の爲めにキラ／＼光つて居た。家付奴隷は、自分たちの若主人に暇乞を是非爲度いと思つて、外側の廣室に群れて居た。裡の大廣室には、家族一同が立つて居

た、ミハイイル・イヴァーノヴィチ、マドモアゼル・ブウリアンス、公爵嬢マリイヤ、それに、小さい公爵夫人。公爵アン・ドレーエーは、二人限で別を告げやうと云つた父親の書齋へ呼ばれて居た。衆皆は、彼が出て来るのを待つて居た。公爵アン・ドレーエーが書齋へ行くと、老公爵は、老眼鏡を掛け、白い室内着——その服装では息子の外誰にも逢は無かつた——を着て、卓子に向かつて、書き物を爲て居た。彼は、見返つた。

「行くかい」で、再書き物を續けた。

「お暇乞に來ました」

「此所に接吻しなさい」と、自分の頬部に觸つて、「有り難う、有り難う」

「何で私に禮をおつしやるんです」

「規定の時日以上にぐすついて居らんで、女の裾にかちり付いて居らんで。勤務は何よりも第一だ。有り難う、有り難う」で、走る鐵筆から墨汁が溢ね散るまで、非常に力を入れて書きだした。

「何か云ふことがあれば、云へよ。私は一遍に兩方の用を辨じられるのだから」と、云ひ足した。

「荆妻のことで……私は乃父のお手へ彼女をお頼み申して行くのは、眞に耻ぢ入居ります……」

「痴愚なことを。思ふことを云へよ」

「産期が来りましたら、莫斯科へ産科醫を呼び遣つて……此所に居させてください」  
老人は手を止めて、解らぬかのやうに、息子を恐い顔で見詰めた。

「天然が助けて呉れ無ければ、誰が居たつて役に立たんとは知つて居ますが」と、公爵アンドレーは、明白にドギマギしたらしい様子で、云つた。「百萬のうち唯つた一つ爲り損ないがあるといふことも認めて居ります、けれども、これは彼女の心持、又私の心持だけで唯ださう爲度いんですからね。種々なことを他人が云つて聞かすんです、又夢を見たとか云つて、恐がつて居るんです」

「ふん……ふん……」と、老公爵は呟やいて、書き物を續けた。「左様爲やう」彼は署名を擲り付けた、で、不意に息子に振り向いて笑つた。

「駄目だな、え、？」

「何が駄目なんですか」

「女房」と、老公爵は、簡單に、意味強く云つた。

「解りませんが」と、公爵アンドレーは云つた。

「だが、何うも爲方が無い、なア」と、老公爵は、云つた。「奴等は残らず左様なので、再び一人に爲りやうは無いので。心配するな、私は誰にも一言も云ひは爲んから、が、お前自身それを知つて居るだらう」

瘦せた小さい骨立つた指で、息子の手を攫んで、それを振つた、そして、何んな人の腹でも底まで見透して了まひさうな鋭い眼で、顔を凝乎と見て、再冷たい笑ひやうを爲た。

息子は溜息したが、その溜息で父親が自分を解したことを承認した。老人は矢張り何時もの迅速で幾本かの手紙を忙がしさに疊み、封じて居て、封蠟、絨印、紙を攫んだり、再投げ落したり爲た。

「爲方が無い。彼女は好い器量だ。私は萬事行る。安心しなさい」と、手紙を封じながら、ポツ切れに云つた。

アンドレーは何とも云は無かつた、父親が自分のことをさうまで解して呉れたのが、心持が好くもあり、又苦しくもあつたのだ。老人は起つて、息子に手紙を渡した。

「さア」と、彼は云つた。「女房のことは心配するな、能きだけのことは、残らず行るからな。さア、其所で、この手紙をミハイール・イタリオ・オノヴィーチに渡せよ。お前を善い仕事に使つて呉れ、副官のやうな厭な勤務は長く爲せて置いて呉れるなど書いてある。私は彼の男を覚えて居り、好いて居ることを、彼の男に話して呉れ。で、彼の男が何うお前を扱かうか知らせて呉れよ。彼の男の所で都合の悪い事が無くば、その下で勤めて居るが宜い。ニコライ・アンドレーチ・ボルコンスキイの息子は私縁で誰にも使はれるには及ばん。さア、此方へ来て呉れ」

老人は、何の言語も半分まで言ひ切らぬ位に、甚く速語に云つた、が、息子は父親の言語を解し慣れて居た。彼は、息子を、書類筆筒の所へ伴れて行つて、開けて、引出を出した、そして、その裡から、彼の勢の好い、大きい、壓付けたやうな筆蹟の滿ちた寫本を出した。

「私は確にお前より先へ死ぬる。それ、この書類は、私の死後に陛下に上げる分だ。それから、此所に、それ、銀行の手形と手紙がある、これは、誰でも、スヴォーロフの戦争の歴史を書いた者に遺る褒美なのだ。學士院へ遣つて呉れ。これが私の感想録だ、私が死んだ後では、お前だけで讀んで呉れ、利益になることもあらうからな」

アンドレーエーは、父親はまだ前途に多くの年を持つて居るに違ひ無いことを父親に云は無かつた。さう云ふには決して及ば無いことを知つて居たのだ。

「悉皆承知しました、父上様」

「うん、では、左様なら、息子に手を與へて接吻させ、息子を抱擁した。『覺へて居れよ、公爵アンドレーエー、若しお前が殺ろされ、ば、この年齢の私には非常な悲痛だぞ……』。急に言辭を切つた、が、不意に、甲走つた聲で續けた、『だが、お前がニコライ・ボルコンスキイの息子らしく無い行爲を爲たら、私は……面目を失ふぞ、斯う叫んだ。』

「そのお言辭には及びませんでせう、父上様」と、息子は微笑んだ。

老人は何とも云は無かつた。

「今一つ願つて置き度いことがあります」と、公爵アンドレーエーは言辭を繼いだ、『若し、私が殺されましたら、そして、若し小兒が生まれましたら、昨日申しました通り、乃父の手から放さんで居てください、乃父の所で育て、ください……何卒』

「お前の女房に渡さずには？」と、老人は云つて、笑つた。

二人互に顔を見合はせて立つた。老人の鋭い眼は息子の眼を見据えた。戦慄が老公爵の顔の

下部を通つた。

「もう暇乞は済んだ……さア、行け」と、不意に云つた。「さア、行け」と、書齋の戸を開けて、高い腹立ち聲で叫んだ。

「何でしたの？。何う爲たんです？」「公爵アンドレーエを見、眼鏡を掛けて、鬘を着ずに、怒つた聲で叫んで居る白い室内着の老人の姿を瞥然と見たので、二人の貴婦人は斯う尋いた。公爵アンドレーエは溜息して、何とも返答し無かつた。

「さア、それでは」と、彼は妻に振り向いて、云つた、その「さア、それでは」が、「さア、お前の一寸とした狂言をお演り」とでも云ふかのやうに、冷たい嘲笑のやうに響いた。

「アンドレーエ？。最早なの、小さい公爵夫人は、蒼く爲つて、ギョツとした態で夫を見た。彼は妻を抱擁した。妻は叫んで、彼の肩の上へ氣を失なつた。

彼は、徐に、妻が凭れて居た肩を外し、顔を覗いて、徐に低い椅子に臥かせた。

「左様なら、マアシヤ」と、妹に優しく云つて、互に手を接吻し合ひ、それから、急歩で、彼は、部室を出た。

小さい公爵夫人は、肘掛椅子に臥て居た、マドモアゼル・プウリアンヌがその額を擦つて居

た。公爵嬢マリイアは、兄嫁を支えて居無ながら、涙を湛えた美しくい眼で、公爵アンドレーエが出て行つた戸を依然見詰めて居た、そして、それに向けて、十字を切つた。書齋からは、老人の鼻をかむ繰り返へした怒つた音が、短銃の音のやうに、公爵嬢に聞こえて來た。アンドレーエが今出發したばかりといふ所で、書齋の戸が投げ開けられ、白い室内着の老人の嚴ぶかしげな姿が、覗き出た。

「行つたか？。うん、善い事だ、これも」と、云つて、恐ろしい権幕で、氣を失つて居る公爵夫人を見た。困つたものだといふ態に頭を振つて、戸を叩き着けて閉めた。

## 第二章

## (一)

千八百〇五年の十月、露西亞軍は、埃地利大公國の市々、村々を占領して居て、聯隊が露西亞から到着し續け、宿割の當つた住民を迷惑がらせながら、ブラウナウの城壘附近に宿營し續けた。ブラウナウは總司令官クツウヅの本營であつた。

千八百〇五年の十月十一日に、ブラウナウに到着したばかりの歩兵聯隊の一つが、市から半哩の所に止まつて、總司令官の檢閲を待つて居た。その田舎の非露西亞的な特質と周圍（菓樹園、石垣、瓦葺の屋根、遠くの山、露西亞兵を珍しさうに見て居る外國の農夫）に拘はらず、聯隊は、何の露西亞の聯隊でもが、露西亞の中央の何處でもで檢閲を受けやうと爲て居る時の、何時でもの状態と寸分違は無いものであつた。暮れ方、行進の最後の行程で、總司令官が行軍中の聯隊を檢閲するといふ命令が受け取られた。命令の語句が、聯隊を率ゐて居た將官には十分に瞭然とは解ら無いで、行軍状態と解すべきや否やに就て疑義は起つたけれども、少佐間の交

渉で、下世話にいふ通り、點頭が足り無いよりは、點頭を低く爲過ぎた方が宜いからといふので、その地點で觀兵状態で聯隊を展開することに決した。で、兵卒は、二十五哩行進の後で、一目も閉らずに、繕つたり磨いたりして、夜を明かし、副官や將校たちは計算し、測定して居た。朝になると聯隊は、前の夕方、最後の行進の時の、落伍の多い不秩序な群集とは打つて代つて、隊中の各人が自分の役割と、勤務を知り、扣鈕一つ、革紐一つ、狂つた所も無く、残らず清潔に輝つて居る二千人の組織された集團を表なして居た。善く整頓して居たのは外側だけでは無かつた、若し、總司令官にして軍服の下を見る氣に爲つたのであつたら、彼は、誰も彼も残らず清潔な襯衣を着て居るのを見、何の背囊の裡でも、物品の規定の數、兵卒間に所謂「シイルツエ・イ・ミイルツエ」——突錐と石鹼——を見出したに違ひ無いのだ。誰もが心持好く感ずることの能き無かつた状態が唯つた一つあつた。それは、彼等の足部の裝具であつた。兵卒の半數以上は靴に穴が出来て居た。が、この缺陷は司令官の方の過失では寸毫も無かつた、これは、幾度もの要求に拘はらず、靴はまだ埃地利の官憲から渡らずに居て、兵卒はと云ふと、殆ど千哩行軍して來たのであつたからだ。

聯隊長は、中年を超した、斑白の頬鬚と眉の、横幅のある、ガツシリした、肩から肩の間よ



りも、胸から背部の間の方が厚い、短気さうな顔貌の將官であつた。彼は、疊んだ所には未だその儘折り目の付いて居る卸し立ての制服を着、肉置の好い肩の上に、横たはらずに突つ立つて居た立派な金の肩章を着けて居た。將官は自分の生活の最も大切な勤務を立派に成し終へた人の態であつた。隊列の前面を歩き廻つたが、歩くといふと、一步毎に、背部が微弱にギクシヤクシヤして、ぐらぐらするのであつた、將官は確に自分の聯隊を賞めて居て、それを嬉しがつて居た、そして、頭腦全體が聯隊の事で一杯になつて居たことは明白であつた。が、それはそれにして置て、將官のぐらぐらした歩き方は、彼が、軍事の興味以外に、交際社會の生活と、女性との誘惑に對し、心に可なり多量な温な情熱を持つて居たことを示めて居るのであつた。

『おい、ミハイール・ミツリーチ』と、彼は、大隊長に聲を掛けた（大隊長は微笑みながら進み出た、彼等は悉皆明白に非常な好い機嫌であつた）。

『われ／＼は昨夜忙がしかつた……。が、これで可からう、と思ふんぢやがね、聯隊はそれほど悪くは無い、或る……。え、？』

大隊長は、この嫌機の好い皮肉を解して、笑つた。

『ツアリツインの觀兵式場でも、奴等ア追ひ出さるゝ氣遣ひは無いです』

『え、？』と、聯隊長は云つた

その刹那に、騎馬の二人の姿が、信號を爲る爲めに歩哨を置いてあつた市への道から、見えて來た。それは副官と、後から隨いて來る哥薩克兵であつた。

副官は、前の命令のなかで明瞭で無かつたこと、即ち、總司令官は、聯隊が到着した状態

——外套を着、背囊を負ひ、何の準備も爲無い——その儘の所を檢閲しやうと思ふのだといふ

ことを、聯隊長に確める爲めに、總司令官から差遣されたのであつた。

維也納から來た、軍事會議の一員が、前の晩、クツウヅフと會見して、大公フェルディナンド及びマツクの軍と聯絡する爲めに、能きるだけ早く前進して呉れと提言し且要求した所が、クツウヅフはその聯絡を得策と思は無かつたので、自分の主張を徹す爲めに持ち出した種々の理由のなかで、露西亞から着したばかりの軍隊は甚い情け無い状態であることを、相手の境地の將官に示めさうと爲たのであつた。クツウヅフが、聯隊に出逢はうと爲たのは、實はさういふ目的を持つてのことであつた、だから、聯隊の状態が悪ければ悪くだけ、總司令官の意には協ふといふ譯であつた。副官は、さういふ詳しいことは知ら無かつたけれども、總司令官は飽くまで、兵士が外套を着て行軍状態にあるやうにと命ぜられること、若し、聯隊がその通り

で無かつたとする、總司令官が機嫌が悪るからうといふことを、聯隊を率ゐて居る將官に傳へた。

これを聞くと、將官は投げ首をした、肩を揺すつて、両手を腹立ちまぎれの態で突きあげた。「失敗つた」と、彼は云つた。「おい、ミハーイル・ミツリーチ、行軍中といふのは外套を着て居ることぢやと、我輩は君に云はんかつたかい」と、大隊長に叱り付けるやうに云つた。「うん、實に」と、云ひ足して、そして、勢ひ込んで歩み出た。「中隊長たち」と、號令し慣れた聲で叫んだ。「曹長たち。……閣下は直きにお見えになるかね」と、今口にした人へのみ對してのこと、瞭乎に知れた恭々しい尊敬の顔容で、副官に振り向いた。

「一時間以内に、と思ひます」

「服装を變へる間があるぢやらうか」

「分りません、將官……」

將官は自身隊列の裡へ行つて、外套の儘に直れといふ命令を與へた。中隊長たちは中隊の裡を駆け廻り、曹長たちは彼方此方と奔走した（外套はチャンとして無かつたのだ）、で、見る見る、今の先刻まで整然として靜に立つて居た各隊は、彼方此方と浪立ち、列が崩れ、ワアワ

ア云ひだした。兵卒は、八方で前後に駆け、肩を退反して身體を屈め、頭を越さして背囊を下し、外套を取り出して、袖を通す爲めに腕を突き上げた。

半時間経つと、萬事再元の通り秩序の整つた状態になつた、唯だ各隊は黒の代りに今は鼠色になつて居た。將官は再震へる闊歩で聯隊の前面を歩き、少し隔たつた所から、全隊を見渡した。

「彼りやア何うしたんぢや？。彼りやア何ぢや」と、ビタリと止まつて叫んだ。「三中隊長」。

「三中隊長、將官へ。中隊長、三中隊の將官へ、隊長へ」……聲々が隊伍を涉つて聞えた、そして、副官が、なか／＼來無い將校を探しにと駆けつけた。命令を種々に變へる攪亂の聲——最早今は、「將官、三中隊へ」とさへ叫んで居た——が、その目的地に達すると、呼ばれた將校は、自分の隊の影から出て來た、そして、もう善い年齢の男で、駆けるのには慣れて居無かつたけれども、靴の爪先で拙態に躓つきながら、將官の方へ駆け足で動いた。大尉の顔は、覺えられ無い日課を暗誦しに呼び出された小學生のやうな心配さを表はして居た。ポツ／＼が赤い鼻（確に酒を控へ無い爲めの）の上に出て來た、そして、口が何うしてもチャンと結べ無かつた。將官は、喘いで駆けながら近づくに従がつて速度を緩めて來る大尉の頭から爪先まで見下

した。

「君はやがて兵に女服を着せて了まうぢやらうな。彼りや何したんぢやい」と、将官は、下顎を突き出して、三分隊の隊列に居る、外の者とは違つた色の外套の兵卒を指して、叫んだ。「君自身は何處に居たんか。總司令官が見えるのぢや、それに、君は君の場所に居らんのかい?。え、?。…… 検閲に兵に寝衣を着せて出すなどと我輩唯は置かんぞ……え、?。」

中隊長は、二本指で軍帽の底をだん／＼強く押し付けた、宛然、自分の安全の唯一の望は唯だその押し付けることにあつたとしても云ひさうに。

「おい、何とか云はんかい?。洪牙利人のやうな服装で居る彼りやア何者ぢや?」と、将官は、酷しく皮肉に云つた。

「閣下……」

「なに、何が閣下なんぢや。閣下。閣下。一體何のことぢや、唯閣下で、誰に解るかい」

「閣下、彼男は、將校から貶されたドロオホフなので」と、中隊長は低い聲で云つた。

「なに、元帥に貶されたと云ふんかい、それとも兵にかい。兵なりや、軍則通り、他の者と同様の服装で無けにやア不可」

「閣下、行軍中閣下御自身で許可をお與へになりました」

「許可を與へた? さア、君等は何時でも左様ぢや、君等若い者は」と、將官は少し折れて、云つた。「許可を與へた? 何か一言云へば、君等は直ぐ……」。將官は止まつた。「人が君等に一言云へば、君等は直ぐ……。え、?。」と、ます／＼もどかしさうに云つた。「何卒兵に服装をチャンと爲せて呉れ給へ……」

で、將官は、副官の方へグルリと振り返つて、ぐら／＼した歩き方で、聯隊の方へ歩いた。彼は、憤怒を外へ左様出すので心持が好かつた、で、聯隊の前を通りながら、怒號り出す機会を探がして居たことは瞭乎であつた。手入れの悪るい隊旗に就て一人の將校を、列の不齊なことに就て今一人を叱り付けた、彼は、三中隊に近寄つた。

「何といふ立ち方ぢやい?、脚は何處にある?。貴様の脚は何處にあるんぢや?」と、將官は、青い外套を着て居たドロオホフから手前へ五人目の所で止まつて、聲に心痛の調子を持たせて、叫んだ。ドロオホフは徐に曲がつて居た脚を真直にし、涼しい倨傲な眼で、將官の顔を凝乎と見詰めた。

「何故貴様は青い外套を着て居るんぢやい?。脱げ。……曹長の此奴の外套を更ろ……」

畜……」。言辭を終はる間も有らせず——

「將軍、私は命令に従ふ義務はありますが、然し……」と、ドロオホフが急いで云つた。

「整列中に物を云つてはならん。……物を云つてはならん、物を云つてはならん」

「悪口を堪へる義務はありません」と、ドロオホフは、聲高く瞭乎と、言辭を繼いだ。將官と兵卒の眼がビタリと見合つた。將官は止まつて、自分の硬い衿を腹立まされに、強く引き下げた。

「外套を更へて呉れ給へ、何卒」と、歩み去りながら、云つた。

(二)

「見えた」と、途端に、哨兵が叫んだ。將官は、眞赤になり、馬の所へ駈け付け、震へる手で鎧を捉まへ、身體を跳ね上げ、鞍に落着き、軍刀を抜き、そして、得意な勢込んだ顔で、叫ぶ構で、口の一方の側を開けた。聯隊は、羽繕ひする鳥のやうに、全體はためいた、そして、バタリと静まつた。

「氣を付けえ」と、將官は、膽を冷やさすやうな聲で叫んだ、これで、自分自身の方の嬉し

さと、聯隊に對する嚴格と、それから、近付いて來る總司令官に對する歡迎と、斯う三つを一逼りに言ひ表はしたので。

三四頭立の高い青い維也納馬車が、兩側に樹の植つた、敷石無し、廣い往還を、彈機の上で轉がりながら、輕快な速度で、駈けて居た。將官たちの隨員とクロオト人の護衛兵が馬車に隨て駈けて居た。クツウゾフの側に埃地利の將官が坐つて居たが、その人の白い制服が、黒い露西亞の制服のなかではヘンに見えた。馬車は聯隊の所へ來て、止まつた。クツウゾフと埃地利の將官とは低聲で何か話して居た、クツウゾフは、重い足音で、馬車の踏段に足を下した時に、宛然、自分と埃地利の將官を息を凝して見詰て居るそれ等の二千人の人間は全然存在して居無かつたかのやうに、微弱に微笑んだ。

號令の言辭が響き渡つた、再聯隊は、武器を捧げた時に、カチャ／＼いふ音で震へた。死んだやうな沈靜の裡で、總司令官の弱い聲が聞えた。聯隊は叫んだ「萬歲、閣……下……下……下……下」で、再、全く閑然とした。最初は、クツウゾフは、聯隊が動いて居た間一つ場所に立つて居た、それから、埃地利の將官と一緒に、幕僚を後に從へて、徒歩で隊伍の間を歩き初めた。聯隊長の將官が、凝乎と眼を注いで、總司令官に敬禮した、窮屈さうな恭やしい追従染み

態度で見ると、彼が、前へ頭を延ばして、ぐらぐらする歩き方を抑へやうと骨折りながら、將官たちの後に隨いて隊伍の間を通つて、總司令官の一言、一舉動に傍へ飛んで行く態度から見ると——この將官は、命令を下す長官としての任務を盡す時より尙一層強い熱心を以て下僚としての任務を盡すのだといふことが瞭然であつた。司令官の嚴重なこと、精勤のお陰で、聯隊は、同時にブラウナウに到着して居た他の諸聯隊に比べて、非常に良好な状態に在つた。後へ残された病人や落伍者は合せて唯つた二百十七人で、兵卒の靴を除けば、萬事善く整頓して居た。

クツウゾフは、隊伍の間を歩きながら、時々止まつて、土耳其戰爭の時分に知つた將校たち——時には兵卒にも——一言二言親し氣な言辭を掛けた。兵卒の靴を見ると、幾度も元氣が無さうに頭を振つて、それを誰の咎だとも云ひはし無いのだが、随分劣い状態であることを認め無い譯には行かぬと云つたやうな表情で、塊地利の將官にそれを指して見せた。聯隊長の將官は、さういふことのある度毎に、總司令官が聯隊のことに就いて云ふ一言をも聞き洩しては大變だと云つたやうな風で、傍へ駈け付けた。クツウゾフの後から、何んな低い聲で云つた言辭でも聞けるやうな距離で、まづ二十人位から成つて居た幕僚が隨いて行つた。さういふ紳士た

ちは、互に話を爲、時には笑つた。誰よりもクツウゾフに一番近く一人の奇麗な副官が歩いて居た。公爵ボルコンスキイであつた。彼の側に、同僚で、甚く肥つた、人の好い、莞爾な奇麗な顔の、そして、濕つた眼の、背の高い參謀官ネスヴィイツスキイが居た。ネスヴィイツスキイは、傍を歩いて居た顔の赤黒い驃騎兵の將校の爲めに起こされた笑を堪へ兼ね居た。この將校は、莞爾ともせず、見据えた眼の表情を寸毫も變へずに、聯隊長の背部を眞面目くさつた顔で見詰めて居て、その人の舉動を一つ一つ眞似を爲た。聯隊長がぐらぐらとして、前へ跳び出せば、その度毎に、驃騎兵の將校が、寸分違は無い身振りで、ぐらぐらとして、前へ跳び出した。ネスヴィイツスキイは、笑つて、その眞似を見させやうと傍の者をつつ突いた。

クツウゾフは、自分を見守うらとする骨折で今にも眼窠から跳び抜けてしまひさうに動く數千の眼の傍を徐々と無頓着に歩いた。三中隊に達すると、不意に止まつた。幕僚は、その佇立を豫期して居無かつたので、傍へぞろぞろと押し掛け無い譯には行か無かつた。

「やア、ティモオフィン、總司令官は、先刻青外套のことで弱つた鼻赤の大尉が自分の知つた顔なのに氣が付いて、斯う云つた。

聯隊長の將官がティモオフィンに注意を與へた時のティモオフィンよりもつとツンと眞直に

立つことは何うしても能きること無いと、誰も思つたであらう、が、總司令官が彼に言語を掛けた刹那に、大尉がツンと真直に立つた姿勢は實に非常なもので、若し、總司令官がもう少時彼を見て居やうものなら、大尉にはその苦しさは到底堪え切れ無であらうといふ程のものであつた、で、その理由で、クツウゾフは、大尉の位地を明白に見て取り、大尉を苦めるやうでは反つて氣の毒だと思つて、急いで、他所へ振り向いて了まつた。殆ど眼に入らぬやうな微笑が、クツウゾフの瘡痕で醜くされた圓々とした顔の面を過ぎた。

『イスマイルの古い戦友が又一人居つた』と、彼は云つた。『勇敢な將校だ。君は彼の男に不満は無いかね』と、クツウゾフは司令の將官に尋いた。

と、將官は、自分の後の驃騎兵の將校に鏡の裡でのやうに寫つされて居るとは、夢にも知らず、ぐらぐらとして、前へ急いで出て、答へた、『十分に満足致して居ります、至高なる閣下』

『われ／＼は誰しも弱點のあるものだ』クツウゾフは、微笑んで、歩み去りながら、斯う云つた。『彼の男は酒神が甚く信心でなア』

司令の將官は、大尉のさういふ行爲を自分の咎にされては事だと思つて、何とも返答し無か

つた。驃騎兵の將校は、その刹那に、鼻赤の大尉の顔と、ギユウと引込んで居る腹を見た、で、直ぐその顔と姿勢を真似したが、その真似方が如何にも生の者その儘であつたので、ネズヰイツスキイは堪え切れずに噴飯した程であつた。クツウゾフは振り返つた。將校は自分の顔を好自由に何様にも變へることが能きものらしくあつた、クツウゾフが振り返る途端に、敏速く假顔を引込めて、極く真面目くさつた、何喰はん、恭やしい表情になつて了まつた。

三中隊が最後であつた、クツウゾフは、何事か憶ひ出さうと骨折つて居るとでも云ひさうに、考へ込んで居るやうに見えた。公爵アンドレーが、歩み出て、佛蘭西語の低い聲で、『この聯隊に編入されて居る貶された將校のドロオホフを知らせろといふお言ひ付けでしたすが』

『ドロオホフは何處に居るかね?』と、クツウゾフが尋いた。

最早その時は兵卒の鼠色の外套を着て居たドロオホフは、呼び出されるのを待た無かつた。涼しい青い眼の赤髪の兵卒のスラリとした形が、隊列から歩み出た。彼は、總司令官の前へ行つて、武器を捧げた。

『訴告を爲るのか』と、クツウゾフは微弱に顔を擧めて、云つた。

『これがドロオホフです』

『あゝ』と、クツウヅフは云つた。『これが君の藥になるやうであり度いもんだな、任務を飽まで盡しなさい。陛下は御慈心に富ませられる。それに、功績が擧がれば、私も捨て、は置かん』

碧い眼は、聯隊の將官に向いた時と寸分違は無い倨傲な態で、總司令官を見た、その表情で、總司令官と兵卒の距離を非常なものに爲て居る習俗の帳帷を、引き破らうとするかのやうに。

『至高なる閣下にお願ひする唯だ一つの御眷顧は』と、確乎した、凜とした、落着いた言語で、『私の咎を償ひ、わが皇帝陛下及び露西亞國に對する私の忠心を表證し得る機會を與へ給はらん』とごさりまする』

クツウヅフはブイと背部を向けた。大尉ティモオフィンの所を去つたのと同なじやうな微笑が彼眼の裡でキラ／＼した。彼は、ドロオホフが云つた總て、又ドロオホフが云ふことができた總ては、自分の方では最早長い、長い前から知つて居たことで、それには最早死ぬほど飽き飽きして居て、そんなものは最早眞平だとも云ひさうに、グルリと背部を向けて、顔を擧げたのだ。彼は、歩きだして、馬車の方へ行つた。

聯隊は幾つもの分隊に分れた、そして、ブラウナウから遠からの所で彼等に充てられた宿營

の方へ行つた、其所へ行つたら、靴も衣服も得られて、強行的進軍の後の休息も得られるやうに爲度いものだと思ひながら。

『我輩を何時までも怒むやうなことは無からうねえ？、プロフォル・イグナアティイチ』と、司令の將官は、三分隊に追ひ付き、その先頭を歩いて居た大尉ティモオフィンの所へ乗り付けて、云つた。將官の顔は、檢閲が見事に濟んだ爲めの抑制へ切れ無い嬉しさを輝いて居た。『皇帝陛下に盡す爲めちや……已むを得ん……時には、檢閲の場合には少し氣張らんとならんからなア。我輩が一番先きに君に詫びる、我輩知つての通りの人間ちや……。閣下は大いに機嫌が好かつた』で、大尉に手を指しだした。

『いや、これは、將官、餘まり恐縮で』と、大尉は、鼻をすす／＼赤くして、答へた。彼は、微笑んだ、そして、その微笑が、前齒の二本無いのを見せた、それは、イスマイルで敵の爲めに銃の臺尻で叩き折られたのだ。

『それで、ドロオホフに我輩も捨て、置きはせんと云ふて呉れ給へ、そしたら、安心するぢやらう。それから、ねえ、彼男は何うなんぢやね、行爲は何うかね……兼て問はうと思ふとつたのぢやが……』

「任務の盡し振りは極く正確でございます、閣下……けれども、或る性格で……」と、ティモフィンが云つた。

「なに、何様な性格ぢやね？」と、將官は尋いた。

「日に依つて種々違ひます、閣下」と、大尉は云つて、「或る時は、物の解つた、善い教育を受けた、人の好い態であります。と、次には、猛獸のやうに爲ります。波蘭では、猶太人を半殺に爲ました、申すも如何ですが……」

「成る、成る」と、將官は云つて、「ともあれ、逆境にある若い者には同情せんけりやア爲らんものぢや。彼男は豪い援引のある男ぢや、なア。……君も……」

「え、左様、閣下」と、さういふ事柄に就てその長官の意のある所を解したことを見せる微笑で、ティモオフィンが云つた。

「結構ぢや、うん、結構ぢや」

將官は、隊伍の裡でドロオホフを探がし當て、馬を控へた。

「一戦有り次第、肩章が付くから」と、彼に云つた。

ドロオホフは振返つたが、何にも云は無かつた。彼の皮肉に笑む口の筋には何の變化も表は

れ無かつた。

「うん、それで宜しい」と、將官は言辭を繼いだ。「我輩から衆皆に露西亞酒を一杯宛」と、兵卒に聞えるやうに、云ひ足した。「衆皆で苦勞ぢやつた。神のお蔭で。で、その分隊を乗り越して、他の、方へと馬を飛ばした。

「おい、實際好人物だな、彼の男の下ぢやア愉快に勤められるせ」と、ティモオフは側を歩いて居た部下の將校に云つた。

「心臓形の王、彼の男に好適の文句だ」と、その將校は笑つた。(將官は心臓形の王といふ綽名であつた)。

將校連中の檢閲後の上機嫌は、兵卒にも影響した。各分隊は、賑やかに行進した。八方で饒舌りまくつて居る兵卒の聲々が聞えた。

「おい、クツウゾフは隻眼だてえぢや無いか？」

「うん、左様だよ。片方は全く見え無いんだ」

「い、や。……兄弟、お前たちよか自然眼が見えらア。われ／＼の靴だの物品まで善く見て行つたぢやア無えか」



「なア、朋輩、俺は脚を見られた時にやア……うん、思つたね、俺……」

「一緒に来たなア塊地利人だつたね、彼の宛然身體ちう白墨で塗りこくつたやうなのは。粉のやうに眞白だ、奴等ア必定、われ〜が銃を磨くやうに、身體を磨くんだぜ」

「おい、フェデシユウ……戦闘が何時始まるてえ話か何か有つたかい？ お前の方が近かつたぢや無えか。ボナバルトが、ブルノオヴァに來てるつてなア」

「なに、ボナバルトだ。其奴ア何オ痴愚なことを云つてるんだらうな。黙まつてりやア何を云ひ出すか知れ無えせ。今謀反してゐるア普魯西人なんだ。塊地利人はな、宜いか、それを鎮定してゐるんだぜ、で、それが静まつちやへば、それから、ボナバルトと戦争が始まるんだ。それなのに、ボナバルトがブルノオヴァに居るなんて。左様なことを云ふ奴ア何うしても大痴者だい。耳をおつ開いて善く眞實のことを聞くやうに爲るよ」

「給養係の畜生奴らア。……五分隊は、最早彼の村へ入つちめえやがつた、奴等ア直きに雑炊を拵へやがるぜ。此方アまだ此様な所だ」

「ビスケットを呉れ、兄貴」

「でも、昨日お前は俺に烟草を呉れたかい？ 宜しい、若い衆。宜し、宜し、其方へ行けよ」

「休憩は無いかなア、で無きやア、何にも口に入れずに未だ五露里行かなきアなら無いんだぜ」

「おい、彼の獨逸人たちが馬車を貸して呉れ、ば、宜いになア、ガラ〜と行つちまふなア、一寸と宜いぢやア無えか」

「けども、おい、此所邊ぢやア、人民が悉皆宛然乞食に爲れちやつたんだい。これ迄の所にやア悉皆露西亞領の波蘭人が居たんだが、此所ぢやア、兄弟、出て來る奴も、出て來る奴も、悉皆獨逸人ばかりだなア」

「樂隊は先頭へ」と、大尉が呼んだ。と、諸方の隊伍から二十人ばかりが先頭へ進んだ。その指揮者であつた鼓手が振り向き、合唱者に正面を向け、手を振つて、「朝は今の〜」とに始まつて、「いざや、若者、われ等今父カアメンスキイと榮譽の道を進まん」に終はる軍歌を始めた。この歌は、土耳其で作られたのだが、塊地利でもこれを謠つた、異つた所は「父カアメンスキイ」を「父クツウゾフ」と更へたばかりであつた。

軍人風に終りの文句をギクシヤクと歌ひ、地面へ何物か叩き付けるとでも云ひさうに腕を振つて、四十歳恰好の瘠ぎすな奇麗な兵卒の鼓手は、兵卒合唱隊を嚴づかしい顔で睨み付けた。

其所で、眼が悉皆自分の身體に注がれて居るのを確めて置いて、彼は、何か眼には見え無い貴い物をさも大切に持ちあげるとでも云ひさうに両手を頭の上へそろ／＼と舉げて、少時その儘でその物を捧げて居た、が、不意に絶望のやうな手付でそれを投げ飛ばした。

『あゝ、わが田舎家の閨口、』

わが新しき田舎家』

此所で、二十の聲が覆唱を取りあげた、そして、四竹手が、自分の武器と背囊の重量を物とも爲す、軽々と前へ跳び出し、分隊に顔を向けたまゝで、肩を振り、四竹で誰かを脅すやうな手付で、後退に歩いた。兵卒は、歌謠に合して歩いた、腕を振り、知らず／＼調子に歩を合した。分隊の後から、車輪の音、弾機の響、それと、馬の足音が聞えて来た。クツウゾフ一行が市へ歸へる所なのだ。總司令官は兵士にその儘自由に行進させるやうにと手真似を爲た、そして彼も幕僚一同も、歌の聲と、踊つて居る兵卒と、陽氣に勢よく行進して居る分隊の光景を、面白がつて居るかのやうに見えた。馬車は右翼の側を通つたので、一行の人々は、二列目に歌謠に合せて特異な浮き立つた風と、如何にも態様の好い姿で進みながら、側を駆け通る人の顔を、さういふ時に列伍に入つて行進して居無い者は誰でも可哀さうなものだと云ふやう

な表情で見た碧眼の兵卒ドロオホフを見無い譯には行か無かつた。將官の真似を爲た、クツウゾフ幕下の將校、驃騎兵の旗士が、馬車から後へ戻つて、ドロオホフの所へ乗り付けた。

驃騎兵の旗士、ジェルコフは前に、ドロオホフが率ゐて居た彼得堡の暴れ者仲間に加はつて居た。ジェルコフは、此所外國で一兵卒に爲つて居るドロオホフに邂逅つた、けれども、聲を掛けるのは面白く無いことだと思つたのだ。が、今はクツウゾフがその貶された將校と言辭を交へてからなので、彼は、古くからの朋友の有らゆる親しさで話し掛けた。

『信友、何うだい』と、行進して居る隊兵と馬の足掻を合せながら、歌聲の裡で、彼は云つた。

『俺が何うしてるかと云ふのか？』と、ドロオホフは冷然と答へた。『ご覧の通りさ』陽氣な歌謠が、ジェルコフの言語の閑氣な賑やかな調子と、ドロオホフの返答の何處までも落着いた冷却とにへんな味ひを與へた。

『ねえ、將校との折合は何様な案配だい？』

『結構なんだ、衆皆好人物なんだ。君は何うして參謀部へ滑り込んだんだ？』

『僕は總司令官附だ——任務中さ』  
雙方黙つて居た。

「勢の好い蒼鷹を伴れて行き、

右の袖から出して遣つた」

と、歌謡が云つて、勇氣と快活の感を我れ知らず人々の胸に起こさせた。二人の談話は、歌謡が謡はれて居無い間であつたら、確にこれとは異つたものであつたらう。

「實際かい、塊地利人が敗ぶられたといふのは」と、ドロオホフが尋いた。

「寸毫も分たらん、さういふ話だけなんだ」

「愉快だ」と、ドロオホフは、歌謡の調子に合せるやうに求められたとでも云ひさうな簡潔な

勁い返答を爲た。

「おい、そのうち晩に來無いか、ファロオを一番行かうや」と、ジェルコフが云つた。

「君等の方には其様に錢が多量かね」

「是非、來給へ」

「駄目だ、爲らんと誓を立てたんだ。昇級するまで、飲みもせず、賭けも爲無いんだ」

「おい、けれども、第一戦で……」

「その時ア、又」。再雙方止めた。

「何か欲しい物が有つたら、來給へ、參謀部の方ぢやア何時でも何うにか爲るんだ……」

ドロオホフは莞爾とした。「心配ご無用だ。欲しい物があつたつて、貰ひになんぞ行くんぢや

ア無い、唯だ此方で取つちまうんだ」

「うん、成る程、僕は唯だ……」

「うん、俺も唯ださ」

「左様なら」

「左様なら」

「遙に自由に、

わが國へ」

ジェルコフは馬に拍車を加へた、馬は何の脚から出て宜いか分からずに、烈しく三遍脚を擧げた、で、それから、分隊を廻はつて駆け去つて、依然歌謡に合せるやうな歩調で、馬車に追ひ付いた。

(三)

閱兵から歸つて、クツツゾフは、埃地利の將官と一緒に、自分の居間へ行つた、そして、副官を呼んで、新しく到着した軍隊の状況に關する或る書類と、前衛軍を率ゐて居る大公フェルディナンドから來た書状を持つて來るやうに言ひ付けた。公爵アンドレー・ボルコンスキイは、言ひ付けられた書類を持つて總司令官の部室へ入つて來た。クツツゾフと軍事會議の議員とは、卓子の上に廣げてある地圖を研究して居た。

「あゝ」と、ボルコンスキイを見返つて、クツツゾフは云つた、そして、その言語で副官に待てといふ意味を知らせて置いて、爲掛けて居た佛蘭西語での對談を續けた。

「唯だ一つ申して置き度いことがあります。將軍」クツツゾフは、誰をも徐々と出す一語一語を聞かすには居られ無いやうに爲る心持好く上品な文句と調子で、斯う云つた。明白に、クツツゾフ自身も心持好く我と我が聲に聞き入つて居るのであつた。「私の云へるのは唯だこれだけですわい、若し、これが私一個の望むまゝになるのでしたら、皇帝フランツ陛下の御意のまゝに、餘程前に致して居つたのであります、私は餘程前に大公と聯絡して居つたのであります。それで、確に、私一個の都合から云へば、私などより眞に經驗の多い老巧な將軍諸君——埃地利はさういふ方々に富んで居るのだから——さういふ將軍諸君へ軍の總司令權をお渡しして、この重

大な責任を悉皆く投げ捨て、了まうといふことは、私一個の問題としては、甚だ安心なことであります。が、實際の事態はさういふ安逸を私に許るさんのでありましてな、將軍」で、クツツゾフは微笑んだが、その表情は、「私の言辭を信じまいと思へば、貴下は全く勝手に信じずに居られるのだが、そして、實際貴下が私の言辭を信じやうと信じまいと、私には一向掛け構ひの無いことなのだ、然し、貴下が私の言辭を信じ無いことを口外するに足る論據は貴下には無い。要點は唯其所なんだ」と、云つて居るやうに見えた。埃地利の將官は不満な顔を爲た、が、同なじやうな調子でクツツゾフに答へるより外に爲方が無かつた。

「飛んだことで」と、彼は、突つかゝるやうな燥然した聲で云つたが、その調子は、彼が云つた言辭の機嫌を取るやうな意味と可笑しな對照を表はした、「それは飛んだことで、至高なる閣下の共同行動にご参加になる價値は陛下の非常に重んぜらるゝことなのであります。而るに、今のやうにご躊躇に爲つて居りましては、勇敢なる露西亞軍もその總司令官もこれまで戦へば必らずお得になつた月桂冠を此度はお得に爲る機會をお失ひになりはしますまいか」と、前以て用意して來たらしい言辭を結んだ。

クツツゾフは、矢張り前と同じ笑顔で、點頭を爲た。

「けれども私は斯う確信して居ります、大公フェルディナンド殿下から賜はりましたご書面に依りますと、將軍マツクのやうな名將の命令の下にある奥地利軍は最早大勝せられて、われ々の助力は既に無用になりましたらうかと思はれますが」と、クツウヅフは云つた。

將軍は顔を擧げた。奥地利軍の敗戦に就ては、何の確報も無かつたが、不利な報告を確めるやうな事情は非常に多かつたのだ、で、奥太利の勝利に關するクツウヅフの想像は全く嘲弄のやうに響いた。が、クツウヅフは、何とでも想像するのは此方の勝手だと云はぬばかりの同なじ表情で、無邪氣にホヤ／＼微笑んで居た。それに、實際、將軍マツクの軍から來た手紙はマツクの軍の勝利の見込みと、その軍が、戰略上最も有利な位地に在ることを彼に知らせて居たのだ。

「彼の手紙を持つて來て呉れ給へ」と、クツウヅフは公爵アンドレエーに聲を掛けた。「さア、一寸ご覧下さい」——で、クツウヅフは、口の隅に皮肉な微笑を持たせて、大公フェルディナンドの獨逸語の手紙の中の次の條下を讀んだ——

「予は、敵軍若しレック河を渡らば直ちに攻撃して撃破せんと欲して、約七萬の兵を此所に集中した、我軍がウルムを支配し居る限り、われ／＼は又ダニウブの兩岸をも支配して居るのみならず、敵軍若しレックを渡らざれば、我軍は、何時にても、ダニウブを亂りて、彼等の聯絡線に達し、尙下流に於て同河を亂り戻り、而して、敵軍若しその全力をわれ／＼の同盟者に向けんと試むる場合に有つては、全く敵軍の企畫を阻止することが能き。此の如き状態に於て、われ／＼は、露西亞の皇軍の準備整うの瞬時を、勇敢に待ち居り、而して、之と協働して、敵軍の當然擔うべき運命を彼に供するの方を容易に講ずるであらう」

クツウヅフは、その條下を重い溜息で讀み終つた、そして、軍事會議の議員を凝乎と優しい眼付で見た。「けれども、閣下、賢人は最凶事に備へよし戒めて居るではござりませんか」、冗談は最早これ限りにして、用務に掛らうと思ふらしい態で、奥地利の將官が云つた。彼は、副官をチラリと顧みざるを得無かつた。

「一寸失禮、將軍」、クツウヅフも、將軍の言辭を止めて置いて、又、公爵アンドレエーに振り向いた。「おい、君、コズロオフスキイから、斥候の報告を悉皆貰うのだ。此所に伯爵ノステイツからの手紙が二本、これは、大公フェルディナンド殿下からのお手紙、此所に今一つ」と、

数枚の書類を渡した。『で、かういふもの悉皆から、埃地利軍の行動に關してわれ／＼が持つて居る情報（こまごま）が悉く解るやうな覺書を佛蘭西語で明瞭に造りつて呉れ給へ。宜いかね、で、さう爲て、それから、閣下にご覽に入れるやうに』

公爵アンドレエーは、總司令官の最初の言辭から、云はれたことばかりで無く、クツツゾフが自分に向かつて云ひ度かつたことまで、承知したといふ表示に點頭を爲した。で、書類を掻き集め、二人へ宛てた點頭を爲て、敷物の上を靜に歩いて、應接室へ出て行つた。

公爵アンドレエーが露西亞を出てからはホンの僅でありながら、彼はその間に非常に變つた。顔の表情にも、身振りにも、態様にも、今は前の氣取り、倦怠、懶惰の痕は殆ど影も見え無かつた。他人に自分が與へる印象のことなどを考へて居る隙は無く、心持ちが好つて而かも有益な仕事に身を入れ切つて居る人のやうな態であつた。顔は自分及び周囲の人々に對する前より多くの満足を表はして居た。微笑と眼使は前より快活で、そして懐かしげであつた。

彼が波蘭で追付いたクツツゾフは、彼を極く心掛き無く迎へた、捨て、は置かぬと約束し、副官の中でも一番彼に眼を掛け、維也納へ伴れて行き、そして、なか／＼大切な任務を言ひ付けた。維也納から、クツツゾフは往時の戦友の、公爵アンドレエーの父親に、手紙を出した。

『ご子息は』と、クツツゾフは書いた、『勤勉と、不拔と、綿密とにて名を爲すべき將校と必らず爲らるべき望み十分である。我輩は、斯様な良補助者を身邊に有するのは、仕合の至りと思ふて居る』

クツツゾフの幕僚間朋輩將校間及び軍全體で、公爵アンドレエーは、彼得堡でのやうに二つの全然反對した評判を持つて居た。或る者——少數——は、公爵アンドレエーを自分たちや他の人々とは全く違つた人間だと見、彼の前途に大きい望を屬し、彼に聴き、熱心に彼を賞め、彼を眞似した。そして、さういふ人々に對しては、公爵アンドレエーは率直であり、愛嬌があつた。他の連中——多數——は、公爵アンドレエーを好か無かつた、そして、意地の悪い、冷淡な、厭な人間だと思つて居た。が、後の連中に對しては、公爵アンドレエーは、又、それ等の人々から尊敬され、又恐れられさへするやうになるには何う行動ば宜いかといふことを知つて居た。

クツツゾフの居室から、應接室へと出て来て、公爵アンドレエーは、引受けた書類を持つて、彼の同僚の、當番の副官、コズロオフスキイが書籍を携つて窓に居る所へと行つた。

『何です、公爵』と、コズロオフスキイが尋ねた。

「吾々が何故前進せんかといふ理由書を作ること言ひ付かつたんです」

「で、何故前進せんのです？」

公爵アンドレーは肩を揺すつた。

「マックからは報告無し？」

「無し」

「若し破られたといふのが眞實なら、情報が来る筈だがねえ」

「まあ左様だ」と、公爵アンドレーは云つて、出やうと戸の方へと動いた。が、その途端に彼方から、戸を叩き付けて閉めて、背の高い男が應接室へ入つて来た。今来たばかりらしくつたその見知らぬ人は、大外套を着、マリア・テレサ勳章を頸に掛け、黒い頭巾を頭へ巻き付けた塊地利の將官であつた。公爵アンドレーは、ビタリと止まつた。

「總司令官クツヅフは？」と、將官は、濁聲の獨逸訛で、速語に尋いた。彼は、兩側を見廻し、足を止めずに、居室の戸へと歩いた。

「總司令官は用務中で」と、コズロオフスキイは急いで誰だか分からぬ將官の傍へ行つて、戸口に立ち塞がつた。「誰方だとお取り次ぎを爲ませう？」

誰だか分らぬ將官は、俺を知らぬ奴があるのかと云はぬばかりに、傲然と、コズロオフスキイの脊の低い姿を見下した。

「總司令官は用務中で」と、コズロオフスキイは、落着き拂つて繰り返した。

將官の顔が曇んだ、唇がビクリ／＼震へた。手帳を取り出し、鉛筆で何か擲り付けて、その紙を裂き取り、コズロオフスキイに渡した、そして、ヅカ／＼と窓の所へ行つて、椅子に腰を落とし、何の爲めにさう俺を見るのだと尋きさうな顔容で部屋に居る人々を見返つた。それから、頭を高くし何か云はうと思ふかのやうに、頸を前へ延ばしたが、直ぐ、無頓着に鼻歌でも歌ひだすかのやうに、ヘンな聲を出した、けれども、それは直ぐ途中で切れた。居室の戸が開いた、そして、クツヅフが戸口に現はれた。

頭を纏帯した將官は、危険から遁れるとでも云ひさうに、身體を前へ曲げて、クツヅフの方へと大跨で行つた、その瘦た脚は速く動いて。

「不運なマックが此所に居ます」と、苦しきやうな聲で、佛蘭西語で、分明り云つた。

戸口に立つたクツヅフの顔は、少時の間全然變らずに居た。やがて、皺縮が、彼のやうに顔の面を走るやうに見えて、直ぐ、額を元のやうに滑かに戻した、恭やしく頭を下げ、眼を閉り、

一言も云はずに、マックを居室へ送り込んで、後の戸を内部から閉めた。

この前から廣がつて居た、塊地利人が破れてウルムの全軍が降服したといふ噂が、事實であつたことが知れた。半時間経たぬうちに、命令を携つた副官が八方へ派遣された、これまでも爲すに居た露西亞軍が間もなく敵軍に遭會ふ筈であつたことは明瞭であつた。

公爵アンドレーエは、眼が戦役の全體の進行に集中する優れた參謀部將校の一人であつた。マックを見、その敗軍の詳報を知つて、この戦役は最早半分輸たのだと覺つた、露西亞軍の地位の非常に不利なことを認め、軍のその後の運命、及び軍がその後に爲すべき行動に於ての自分自身の仕事を、眼で見るやうに想像した。常に自負して居た塊地利の屈辱と、或ひは一週間もすれば、スヴォーロフの日以來始めての露西亞軍と佛蘭西軍との會戦を見得ると、又それ自分に参加することが能きことを思ふと、嬉しさが胸で湧きあがるのを禁じ得無かつたけれども、彼は、ナポレオンの天才は露西亞軍の勇氣の全力を以てしても何うにも爲らぬことになりはしまいかと恐れたと、同時に、自分の最負なその大人物が露西亞軍に負けて屈辱に陥るのは、考へても厭で堪まら無かつた。

さういふ種々な考想の爲めに、昂奮し、燥れ込んで、公爵アンドレーエは、毎日手紙を出し

て居た父親の所へ、又手紙を出さうと、自分の部室の方へ行つた。廊下で、自分と同室で暮し居る戦友のネスヴィイツスキイと、滑稽家のジェルコフに行き遭つた。二人は、例の通り、何か冗談を云つて笑つて居た。

「何うして左様な心配さうな顔を爲て居るんだい？」と、公爵アンドレーエの蒼い顔と険しい眼とを見てネスヴィイツスキイは尋いた。

「笑ひどころぢア無いからだ」と、ボルコンスキイは答へた。

公爵アンドレーエがネスヴィイツスキイとジェルコフに逢遭つた丁度その途端に、廊下の彼方の隅から、露西亞軍の兵站部の仕事を爲る爲めにクツツゾフの幕僚に加はつて居た將軍スツラウホと、前の晩に着いた軍事會議の議員が、三人の方へとやつて來た、將軍たちは三人の傍を緩裕通れる位廣い廊下には餘地があつた。が、ジェルコフは、ネスヴィイツスキイの腕を捉まへて引き戻して、極く速語に叫んだ――

「やつて來たぞ。……やつて來たぞ。……傍へ寄れよ、路をお開けください、何卒、路をお開けください」

將軍たちは、小五月蠅い敬禮などは避け度がつて居るやうな態様で進んで來た。滑稽家のジ



エルコフの顔は、倏忽、堪らへ兼ねたやうな飄蕩た間の抜けた微笑を含んだ。

「閣下」と、彼は、前へ歩み出て、埃地利の將官に言語を掛けて、「真にお目出度うございます。點頭を爲て、拙態に、舞踏の稽古を爲る兒童のやうに、兩脚で交互に床を掻き初めた。軍事會議の議員は彼を睨み付けた、が、彼の間の抜けた笑顔の眞面目さを見ては、寸時の注意を拒むことは能き無かつた。將官は眼を圓くして、後を聞かうと爲て居ることを示めた。

「真にお目出度うございます。將軍マックがお歸りになりました、何のお變りも無く、唯だ此所に少々ご負傷なすつたばかりで」と、さも嬉しさうな笑顔で、自分の頭を指して、云ひ足した。

將官は、顔を擧め、ブイと傍を向いて、歩きだした。

「痴愚な、餘まりな飄蕩方ぢや」と、五六歩離れてから、腹立しさうに云つた。

ネスヴィイツスキイは噴飲しながら、公爵アンドレーエの周圍に腕を掛けた、が、ボルコンスキイは、一層蒼くなつて、恐ろしい權幕で、相手突き飛ばし、そして、ジェルコフに振り向いた。マックを見、その敗報を聞き、露西亞軍の今後を考へたことなどで、起された燥然した胸の鬱結が、ジェルコフの場合を辨まへ無い飄蕩方に對する憤怒と爲つて爆發した。

「君が」と、下顎に少し戰慄を持つて、酷しく始めて、「封問にならうといふのなら、それは、君の隨意なんだが、若し、二度と僕の前で飄蕩でも爲やうもんなら、僕は君に行儀の仕付けを爲て遣るぞ」

ネスヴィイツスキイとジェルコフは、この怒號だしに唯だ呆れ返つて、眼を眞圓くしてボルコンスキイを見詰めた。

「なに、僕は唯だ祝詞を述べたばかりなんだ」

「僕は飄蕩けて居るんぢやア無い、黙り給へ」と、ボルコンスキイは叫んで、ネスヴィイツスキイの手を撃つて、何とも返答の言語を見出し得無かつたジェルコフを捨て、置いて、歩きだした。

「おい、何う爲たんだ、君」と、宥める積りで、ネスヴィイツスキイが云つた。

「何うしたも斯うしたもあるもんかい」と、未だ激昂が治まらぬ爲めに立ち止まつて、公爵アンドレーエは、云つた。「おい君は、われは皇帝陛下と露西亞の國とに盡し、その成功を喜ぶべき筈の將校なのか、それとも、われは雇主の事業には何の痛痒も感じ無い唯だの雇人なのか、その差別を善く心得て居るべき筈ぢや無いか、四萬の兵が殺戮され、われの同盟國の一軍が全滅したんだ、而るに、君等はそれを笑ひことに爲て居る」と、終尾の方の佛蘭西語が自

分の意見を一層強めるかのやうに云つた。「君が親しく爲て居る彼の男のやうな下ら無い人間はそれで結構だ、が、君は不可、君は不可。街路をゴロ付く不良少年で、何も無きやア、彼様いふ冗談を云つて喜ぶものぢやア無い」公爵アンドレーは、急に露西亞語になり、不良少年といふ露西亞語を佛蘭西語の音勢で發音して、斯う云ひ足した。彼は、自分の言語が未だジェルコフには聞えるのだと認め、で、旗士が答へ無いか何うか見やうと待つた。が、旗士は彼方へ振り向いて、廊下を出て行つた。

## (四)

驃騎兵のバアヴログラツスキイ聯隊は、ブラウナツから二哩の所に駐屯して居た。ニコラアイ・ロストオフが少尉として勤めて居た中隊はサルツエネツクといふ獨逸の村を宿舎に充てられた。その中隊の司令將校、その騎兵團全體にヴァアスカ・デニソフの名で知られて居た大尉デニソフが村の内の一番好い宿舎に當つた。少尉ロストオフは、波蘭で聯隊に追ひ付いてから以來、何時もデニソフと同宿した。

十月の八日——總司令部では、マツクの敗報の爲めに大騒動に爲つて居た丁度その日に——

何時も通りの平凡な生活が、その隊の將校間には行なはれて居た。

ロストオフが、或る朝早く微發任務から歸つて來た時に、一晩ちう骨牌に負け續づけたデニソフは未だ歸つて居無かつた。少尉の制服を着たロストオフは、馬を一シャクリして、昇降段まで乗り付けて、撓やかな若い舉動で片脚を揺り越さして、馬から離れるのがさも厭であるかのやうに、錠を踏んで少時立つて居たが、到頭跳び下りて、從卒を呼んだ。

『おい、ボンダレエンカ、信友』と、馬へと驀地に駈けて來た驃騎兵に云つた。「彼方此方引いて歩いて呉れ、なア」と、心嬉しい時に人の好い若い人々が誰に對してでも行爲ふやうな快活な兄弟のやうな親しさで云つた。

『はい、閣下』と、頭を機嫌好ささうに振つて、小露西亞人が答へた。

『宜いか、善く引いて歩くんだぞ』

今一人驃騎兵が又馬へと駈け付けたが、ボンダレエンカが最早手綱を捉へて居た。

少尉が、心付を多量にするので、彼の用を足するのはなかく儲けになるのであつたことは明瞭であつた。ロストオフは、馬の頭を撫で、次には後部を撫で、昇降段で依違つて居た。

『見事だ。實に良い馬に爲るな』と、獨りで云つて、微笑みながら、軍刀を捉へて、拍車を鳴らし

ながら、昇降段を駆け上つた。宿舎の家主の獨逸人は、牛舎から覗いた、短上衣を着て、頂の尖つた帽子を冠り、今まで糞を掃除して居た熊手を持つて居た。獨逸人の顔はロストオフを見るとき、直ぐ晴やかに爲つた。機嫌好さうに微笑んで、眼胸を爲た。「お早う、お早う」と、若者に挨拶するのが嬉しいらしい態で、繰り返した。

「最早仕事ですか」と、ロストオフは、彼の熱心な顔には何時も出て居た同なじ嬉しさうな隔ての無い微笑で云つた。「奥利地人萬歳。露西亞人萬歳。皇帝アレクサンドル陛下萬歳」。ロストオフは、その獨逸人が屢云ふ文句を繰り返した。獨逸人は笑つて、全然牛舎を出て来て、帽子を脱つて、頭の上で振つて、叫んだ――

「尙、世間ぢう萬歳」

ロストオフも獨逸人のやうに、頭の上で帽子を振つて、笑ひながら叫んだ。「世間ぢう萬歳」。牛舎を掃除して居た獨逸人に取つても、秣料の徴發から歸つたロストオフに取つても、別段嬉しいことがあるのでは無かつたが、二人とも、如何にも嬉しい、隔ての無い、懐かしい心持で相互に顔を見まもり合ひ、相互の愛情の表徴に頭を振り合ひ、笑顔で別れた、獨逸人は牛舎へロストオフは、デニツフと一緒に居る田舎家へと。

「旦那は何處だ？」と、ロストオフは、デニツフの侍僕で、聯隊中で誰知らぬ者の無い食へ無い漢のラヴルウシカに尋いた。

「旦那は昨宵からお歸りになりません。輸けてお居ですな、何うしても」と、ラヴルウシカが答へた。「最早この頃ぢやア全然解りましたが、お羸らならば、手柄話を爲さりに何時も朝早く歸つておいでです、けれども、朝に爲つてお歸りなさらずば、輸けたに違ひ無いです――憤然となつてお歸りですな。琲珈をさし上げませうか」

「左様、持つて来て呉れ」

十分経つて、ラヴルウシカが琲珈を持つて来た。

「お歸りです」と、云つて、「さア、事だぞ」

ロストオフは、窓の外をチラと見た、するとデニツフが歸つて来るのが見えた。デニツフは赤ら顔の、ピカピカする黒い眼の、頬髯や髪がクシャクシャに紆れた小男であつた。扣釦の掛から無い騎兵服を着、方々皺になつてダラリとして居る太い下袴を穿き、頭の後部の方へ、潰ぶれた騎兵帽を載けて居た。沈み切つた態で、投げ頭で、昇降段へと近づいた。

「ラヴウシカ」と、ラ行の音を流して、高聲で、腹立しさうに、叫んで、「おい、これを脱れ

痴者』

「へい、今脱つて居ります」と、ラヴルウシカの聲が答へた。

「やア、最早起きてるのか」と、部室へ入りながら、デニエツフが云つた。

「ズット前から」と、ロストオフは云つた。「僕は、最早乾草を取りに行つて来たんだ、そして、フラウライン・マテルデに逢つた」

「真個かい？。我輩は、徹宵、篋棒に負け通しちゃつた」と、ラ行の音を發音し無いで、デニエツフが叫んだ。「運の向か無かつことつたら非常だつた。烈い不運よ……君が歸つてから、全然かた無しだ。お、い、茶は？」

デニエツフは、微笑んで居るかのやうに、顔に皺を寄せ、短い強い齒を見せ、指の短い手で、森のやうに紆れて居た濃い黒髪を掻き雜せだした。

「彼の鼠に向かつたのが運の果よ」(鼠といふのは相手の將校の綽名であつた)と、兩手で額から顔ちうを擦つて、「何うだい、一枚もよこさ無かつたな、真個に一枚も」と、渡された火を点けた烟管を取つて、拳でギョツと握り、火花を潑ね散し、床を叩き、尙且叫んだ。

「奴ア唯賭をよこして置いちやア、二重賭を贏ち、唯賭をよこして置いちやア二重賭を贏ち

よ』

デニエツフは、火花を潑ね散し、烟管を折つた、そして、それを投げ飛ばした。で、黙まつた、が、不意に、ピカ／＼する黒い眼で、勢好くロストオフを見て、――

「女が居さへすればなア。だが、此所ちやア飲むより外何う爲ることも能きんだ。早く戰鬥に加はれ、ばなア……お、い、誰だい？」と、皮の厚い靴と、チャカ／＼いふ拍車の音が止まつて、恭やしい咳嗽拂が爲たのを聞き付けて、戸の方へ向いて呼ばはつた。

「曹長で」と、ラヴルウシカが云つた。デニエツフは尙一層顔へ皺を寄せた。

「面倒臭いな」と、金貨の幾個か入つて居た錢入を投げ出して、云つた。「ロストオフ、濟ま無いが、何れだけ残つてるか勘定して、後で枕の下へ入て置いて呉れ給へ」と、云つて、曹長に逢ひに出て行つた。ロストオフは、錢を取つて、機械的に、古い金貨と新しいのとを擇つて積み分け、勘定しだした。

「やア、テリヤアニン、お早う。昨夜全然巻きあげられちまつた」と、次の部室で云つて居るデニエツフの聲が聞えた。

「何處だつたい？。ビエコフの所かい？鼠の所かい？……あ、聞いたよ」と、細い聲が云

つた、と思ふと、直ぐ、部室へ、同なじ隊の小さい將校の中尉テリヤニンが入つて来た。ロストオフは錢入を枕の下へ入れ、差し出された濕潤した手を握つた。テリヤニンは、何かの理由で、聯隊が出發するホンの間に、近衛から移されて来たのであつた。聯隊での舉動は極く好かつた、けれども、誰にも好かれ無かつた、ロストオフは、殊に、厭で堪まら無かつた、そして、その將校に對する根據の無い厭惡を隠し得無かつた。

「おい、若い騎兵さん、僕のグラチイクは君にやア何んな案配ですな？」(グラチイク——若い白嘴鴉——はテリヤニンがロストオフに賣つた乗用馬であつた)中尉は話をする時に先方の相手の顔を決して見ない男であつた。彼の眼は一つの物から他の物へと始終飛び移つて居た。「今日君が乗つて居たのを見たですが……」

「あゝ、彼りやア結構です、善い馬ですな」と、ロストオフが答へた、けれども、七百留出したその馬は、實際はその半分の價值も無かつた。「左の前脚で少し跛歩を引きだした……」と、云ひ足した。

「蹄が破れたんだ。そりやア何でも無いです、教へてあげませう、付け方を教へませう」  
「えゝ、何卒」と、ロストオフが云つた。

「教へませう、教へませう、祕傳ぢやア無いから。けれども、彼の馬では僕に禮を云ふやうになります」

「馬を引いて來させませう」と、成るべく早くテリヤニンを逃げ度く思つて、ロストオフは云つた。で、馬を引いて來させるやうに言ひ付けにと出て行つた。

外の部室では、デニソフが、何か報告を爲て居る曹長と向かひ合つて、烟管を陰へて、敷居の所に跣んで居た。ロストオフを見ると、デニソフは、眼を圓くし、肩越しに、テリヤニンが坐つて居た部室の方へ母指を指し、顔を擧げて、さも厭だといふ態に頭を振つた。

「うむう、彼奴は嫌ひだ」と、曹長の居るのに構はず、云つた。

ロストオフは、「僕もさ、けれども、何するもんで」とでも云ひさうに、肩を揺すつた。それから、馬のことを言ひ付けて置いて、テリヤニンの所へ戻つた。

テリヤニンは依然、ロストオフが置いて出た時と同じ懶惰さうな姿勢で坐つて、小さい白い手を擦り合せて居た。

「厭な顔が世の中にやア有るものだなア」と、ロストオフは部室に入りながら、腹の裡で云つた。

「もし、君は馬を伴れて来ることを言ひ付けたですか」と、テリヤアニンは起ち上がつて、無頼着に四邊を見廻した。

「え、」

「では、來給へ、僕は唯だ昨日の命令のことをデニイソフに尋きに來ただけなんだ。あれが有つたかね、デニイソフ」

「未だ分からん。けれども、君は何處へ行くんだ？」

「この若い人に馬蹄の打ち方を教へるんだ」と、テリヤアニンが云つた。

二人は昇降段を下り、廐へ行つた。中尉は、療治法の施し方を教へ、そして、自分の宿舎へと去つて了まつた。

ロストオフが歸つて行くと、卓子の上に、露西亞酒の壘と、幾らかの鷹詰が在つた。デニイソフは、卓子に坐つて、彼のペンが紙の面をキイ〜云つて動いて居た。彼は、ロストオフの顔をさも悲しきうに見た。

「彼女の所へ遣るんだ」と、云つた。手に鐵筆を持つたまへで、腕を卓子に凭せて、書く積りで居ることを口で云ふことの能ざるのを嬉しく思ふらしい態様で、手紙の内容をロストオフ

に話した。「なア、君」と、云つて「われ〜は、戀愛を爲るまでは、眠入つて居るも同然で、塵と灰の兒に過ぎ無いんだ……けれども、戀愛を爲れば、人は神だ、天地創造の第一日に於けるやうに、潔いのだ。……今度は誰だ？ 畜生斷はつちまへ。忙がしくつて誰にも逢んぞ」ラヴルウシカは、斯う怒號られながら、一向臆せず、デニイソフの傍へ進んで來た。

「なに、誰が來るものですか。貴下ご自身で來いと仰しやつたでせう。曹長が金錢を頂きに參りましたんで」

デニイソフは顔を擧め、何か返答を怒號りさうであつた、が、何にも云は無かつた。

「五月蠅いなア」と、彼は獨で云つた。「錢入に何程残つてゐたね」と、ロストオフに尋いた。

「新しい金貨が七つ、古いのが三つ」

「あ、五月蠅いなア。おい、何だつて其所に立つてるんだ、木乃伊奴。曹長をよこさんかい」と、デニイソフはラヴルウシカに怒號つた。

「ねえ、デニイソフ、僕のを使つとき給へ、僕は十分持つてるから」と、顔を赤く爲て、ロストオフが云つた。

「我輩は友人から金錢を借りるのを好まん、それが嫌ひなんだ」と、デニイソフはブツ〜

云つた。

「戦友として僕から金銭を借りて呉れ無いとすれば、僕は心持が悪いね。實際持つて居るんだからさ」と、ロストオフは繰り返した。

「うゝん、いや」で、デニイソフは、枕の下から錢入を出しにと寢臺へ行つた。

「何處へ入れといたね、ロストオフ」

「底の方の枕の下だ」

「でも、其所にやア無いせ」。デニイソフは枕を兩方共床へ擲り出した。錢入は影も見え無かつた「はて、奇異だな」

「少時待ち給へ、君やア一緒に落したんぢやア無いか」と、ロストオフは、枕を一つ宛拾ひあげて、振つた、彼は臥褥を取り下して、振つた。錢入は尙且無かつた。

「忘れる譯は無いんだが？ いや、僕は君が祕密な寶のやうに頭の下へ入れるんだなと思つた位なんだもの」と、ロストオフは云つた。「僕は此所へ置いたんだ。何處へ行つたらう」と、ラヴルウシカに振り向いた。

「此の部屋へは一度も参りません。お置きなすつた所に、無きやアならんですが」

「でも、無いんだ」

「貴下は何時も左様でおいでなさる、物を何處へでも抛り出しといて、忘れてお了まいなさるんだ。衣囊をご覽なさい」

ラヴルウシカは、寢床を引つくら返して探した、その下を覗き、卓子の下を見、部屋ぢうを引つくら返し、そして、部屋の中央に佇立つた。デニイソフは、黙まり込んで、ラヴルウシカの舉動を見まもつて居た、そして、ラヴルウシカが呆れて手を投げ擧げて、何處にも無いことを見せると、デニイソフは、ロストオフに振り向いた。

「ロストオフ、兒童らしい調戲は止して呉れ」

ロストオフは、自分に向けられたデニイソフの眼を感じて自分の眼を擧たが、直ぐそれを再落した。咽喉の下の何處かに閉ぢ込められて居るかのやうに思はれた血が、顔と眼へ一遍に突つ掛けた。殆ど呼吸が吐け無かつた。

「で、部屋には中尉と貴下がたつ限りで誰も居無かつたんだ。何處かこの部屋ぢうに無ければ無いんです」と、ラヴルウシカが云つた。

「では、これ、おのれ、悪魔の廻者、駈け廻つて、探せ」と、デニイソフは、不意に、眞

赤になり、惨ましい権幕で侍僕に跳び掛りながら、怒號つた。「錢入を何うしても探し當てろ、で無きやア、貴様を笞打るぞ、貴様たちを皆笞打るぞ」

ロストオフは、眼はデニイソフを避け、制服の扣釦を掛けたして、軍刀を佩き、略帽を冠ぶつた。

「さア、何うあつても、錢入を探がし出せ」と、デニイソフは、侍僕の肩を捉へて拳突きながら、壁へ押し付けて、哮つた。

「デニイソフ、その男は放し給へ、僕は盗つた者を知つてるから」と、ロストオフは、眼を擧げずに、戸の方へ行つた。

デニイソフは、止めて、少時考へたが、ロストオフの口振で解つた態様で、ロストオフの腕を強く捉へた。

「痴愚な」と、デニイソフは、頸や額に血管が幾本もの繩のやうに現て來た位、眞赤になつて怒號つた。「おい、君やア正氣かい、いや、それは何うあつても不可、錢入はこの部屋にあるんだ、我輩はこの悪黨を生ながら皮を剥いで呉れる、錢入は何うしても此所にある」

「盗つた者を知つてる」と、ロストオフは、震へる聲で云つて、戸へ行つた。

「でも、おゝい、左様なことを爲つちやア不可」、デニイソフは、跳びかゝつて、少尉を引き止めやうと爲したが、ロストオフは、腕を引き放して、眼を擧げ、デニイソフが自分の一番怒み重なる敵でもあつたかのやうな、凄まじい權幕で、デニイソフの顔を眞向に凝乎と睨み詰めた。

「君は自分で云つたことを考へて見給へ」と、震へる聲で云つた。「僕の外にやア誰もこの部屋にやア居無かつたんだ。だから、若し、左様で無いとすれば、左様すれば……」

彼は、後を口へ出し得無かつた。そして、部屋を駆け出た。

「うゝん、何うでも勝手にしろ、貴様たちア」、これが、ロストオフの耳に入つた最後の言語であつた。

ロストオフはテリヤアニンの宿舍へ行つた。

「旦那は居ません、司令部へ行きました」と、テリヤアニンの從卒が云つた。「何事です？」と、少尉の心配さうな顔を訝みながら、云ひ足した。

「いや、何でも無い」

「ホンの今しがたでした」と、從卒は云つた。



司令部は、サルツェネックから三露里であつた。先方が不在なので、ロストオフは馬に乗つて、司令部へ行つた。司令部の置いてあつた村には、將校が屢々行く料理屋があつた。ロストオフは料理屋の所まで行くと、入口でテリヤアニンの馬を見掛けた。

二番目の部屋に、中尉が腸詰一皿と酒一壺を扣へて、坐つて居た。

「やア、君も来ましたね」と、彼は、微笑んで、眉を擧げた。

「え、」と、ロストオフは、口をさくのが非常に勞だとも云ひさうに、唯それだけ云つた、そして、一番近くの卓子に腰を落着けた。

雙方黙まつて居た、部屋には二人の獨逸人と、一人の露西亞の將校が居た、誰も黙まつて居た、聞えるのは、皿にカチャ／＼當るナイフの音と、中尉の食物を噛む音ばかりであつた。テリヤアニンは、中食を終うと、衣囊から、二重錢入を取り出した、尖頭の彎がつた小さい白い指で輪を脱して、金貨を出し、眉を擧げて、給仕に渡した。

「急いで呉れよ」と、云つた。

金貨は新しかつた。ロストオフは起つて、テリヤアニンの傍へ行つた。

「錢入を見せ給へ」と、殆ど聞取れ無いやうな低い聲で云つた。

キョト／＼した眼付で、依然眉を擧げたまゝで、テリヤアニンは錢入を渡した。

「うん、良い錢入だらう……左様」と、云つたが、不意に白く爲つた。「見ても宜いよ、君」と、云ひ足した。

ロストオフは、手に錢入を取つた、そして、それと、なかの錢までも見た、それから、テリヤアニンを見た。中尉は、例の通り、四邊を見廻して居た、が、不意に甚くハシヤいであつた。

「維也納へ行けば、此様な物は一遍に無くなるんだ、けれども、此様なケチな狭い所ぢやア錢の使ひ場所なんか有りやアし無い」と、云つた。「おい、返して呉れ、君、歸るから」

ロストオフは、物を云は無かつた。

「君は何うするんだ？君も中食かね？なか／＼食はせる家なんだ」と、テリヤアニンは言辭を續けた。「呉れ給へ」彼は、手を出し、錢入を捉へた。ロストオフは放した。テリヤアニンは錢入を取つて、無造作に乗馬袴の衣囊へそれを落しだした、その間、「うん、うん、俺は自分の衣囊へ自分の錢入を入れて居るんだ、それは全く當り前のことだ、誰も何とも云ふことの能き無いことなんだ」とでも云ひさうに、眉は無頓着に擧り、口は少し開いて居た。

「で、若者」と、彼は溜息して、云つた、そして、擧げた眉の下から、ロストオフをチラと

見た。閃光のやうなものが、電光の迅速で、テリヤアニンの眼からロストオフの眼へと過ぎ、それから、逆に戻り、又行つて、又戻つた、それは、總べてホンの一刹那であつた。

「此方へ來給へ」と、テリヤアニンの腕を捉まへて、ロストオフが云つた。彼は、テリヤアニンを窓の所まで宛然引摺るやうに爲て行つた。「彼は、デニインフの金銭だ、君は盗つたんだ……」と、耳へ呟いた。

「何？……何？……何うして貴様其様なことを？……何？」と、テリヤアニンは云つたが、さういふ言辭は、泣くやうな絶望した叫び、又、宥恕を請ふ懇願のやうに響いた。ロストオフは、その聲を聞くや否や、何う爲るかと思つて居た氣掛りの石のやうな非常な重量が、心から轉がり落ちて了まつた。彼は、ホツと嬉しく感じたが、その途端に、自分の前に居る不幸な人間を惘然に思つた、けれども、爲り掛けた事はカタを付け無ければなら無かつたのだ。

「此所に居る奴等が何とどうか知れやし無い」と、テリヤアニンは、口の内で云つて、略帽を引擡んで、小さい空部屋の方へ行つた。「聞き捨てにやアならん……」

「僕は知つてる、證據もチャンとあるんだ」

「我輩……」

テリヤアニンの恐怖れた顔は、筋肉全體が痙攣だした、眼は不安さうに動きはしたが、床へ向いて居て、ロストオフの顔と平準の所へは決して擧がらず、そして、悲しさうな歎息が聞えた。

「伯爵、……この若い男の前途を打破さずに置てください、私の爲めにはこの錢は悪魔でした、さアお持なさい……彼は卓子へそれを擲り出した。私には年取つた両親があります」

ロストオフは、テリヤアニンの顔は見無いやうに爲て、錢を取つた、そして、一語も云はずに、部屋を出た。が、戸口で止まつて、振り返つた。

「眞個に」と、眼に涙を湛えて、云つた。「何だつて君は斯様な情け無いことを爲たんですか」

「伯爵」と、少尉に近寄りながら、テリヤアニンは云つた。

「僕に觸つちやア不可」と、ロストオフは體を退て、「君困るんなら、この錢を使ひ給へ」

彼は、テリヤアニンの手に錢入を握らせて、料理屋を駈け出た。

(五)

同なし日の晩に、デニインフの宿舎では、その隊の將校たちの間に、盛に議論が戦はされて

居た。

「だが、おい、ロストオフ、君は何うしても、聯隊長に詫び無ければいかんよ、背の高い、参謀の大尉は、激昂して眞赤になつて居たロストオフに向かつて、斯う云つて居た、参謀の大尉、キイルステンは、——半白の髪の毛、鬪抜けて大きい頬鬚の、厚ばつた道具立ての、皺の多い顔の男であつたが——名譽に關する事柄で、二度卒伍に貶とされた、そして、二度とも、元の職に登つたのであつた。」

「虚言を吐くと云はれては、相手が誰でも承知が能きるもんかい」と、ロストオフは叫んだ。「彼方が僕のことを虚言者と云つたから、僕も彼方を虚言者と云つたんだ。唯だそれだけなんだ、僕は毎日當番に爲れやうとも、僕は拘禁されやうとも、それは、長官の命の儘だから、爲方が無い、けれども、誰の言ひ付けでも僕を詫されることは能き無いよ、何故なら、彼方は大佐として、位地の低い僕と決闘することは、身分柄能き無いといふんなら、左様なら……」

「だが、まア、待て、君、我輩の云ふことを善く聞け」と、参謀の將校は、落着拂つて、長い頬鬚を撫でながら、濁聲で云つた。「君は、他の將校たちの前で、大佐に、或る將校が盗みを爲たと云つた……」

「談話が他の將校たちの前で出たのは、僕が悪いのぢやア無い。それは衆々の前で云は無かつた方が宜かつたかも知れ無いんだが、僕は外交官ぢやア無いんだ。だからこそ僕は驃騎兵に入つたんだ、此所では、其様なコセ〜した斟酌なんぞは要ら無いと思つて居たんだ、それなのに、聯隊長は僕が虚言者だと云つた……僕は彼の人から僕の胸の晴れるやうに爲て貰らひ度いんだ」

「それは至極道理だ、誰も君を臆病者だとは思やアせんよ、だが、問題は其所ぢやア無い。君解ら無きやア、デニイソフに聞いて見給へ、少尉が自分の隊の大佐から満足を求めるなどは飛でも無いことぢやア無いのか、何うか」

デニイソフは、不機嫌さうな顔容で、談話に加はるまいと思つて居るらしく、唯だ聞きながら、口鬚を嚙んで居た。大尉の問に對しては、勿論飛んでも無いことだといふ意味に、頭を振つただけで答へた。

「君は他の將校たちの前で、この怪しからん事件を大佐に話した」と、参謀の大尉は、前からの言辭を追つた。「ボグダアニイチが」ボグダアニイチと衆皆が大佐を呼んで居たのだ。「君を叱つたんだ」

「いや、左様ぢやア無かつたし、僕の云つたことが虚言だと云つたんだ」

「その通りだ、君は聯隊長に痴愚しいことを話したんだ、だから、君は詫び無きやア不可」

「何うしたつて詫び無い」

「君にしては意外な返答では無いか」と、参謀の大尉は、顔色を變へて、厳しく云つた。「君は何うあつても詫んといふのだね、けれども君、君に侮辱されるのは、唯だ大佐ばかりで無く聯隊全體、即ちわれ／＼全體なのだ、君は四方八方に對して濟んことを爲たのだ、考へて見給へ、君はその事を善く熟考した上で、その事に就ては何ういふ扱ひを爲たものか内密に他人に相談すべき筈であつたのだ、それを、君は匆卒、多數の將校の前で喚いて了まうのだからなア。聯隊長もそれでは爲やうが無からうでは無いか。その將校を呼び出して審問して、聯隊全體が耻辱を蒙むるのかね？。その唯つた一人の惡漢の爲めに聯隊全體に耻を掻かしても宜いかね、聯隊長は左様すべきであつたのかね、君は左様思ふのかね？。我輩等は左様は思はんのだ。ボグダアニイチの所置は道理だ。君に向つては、君の話が虚偽だと云つたのだ。厭なことだ、だが、聯隊長に取つては他に爲やうが有るものかい？畢竟君自身が惡りいのだ。所で、衆皆が事件を圓滿に濟まさうとするといふと、君はズツと高く豪く構へ込んで了まつて、詫びて堪ま

るものかと反り返つて、話を全然ぶちまけやうと爲るでは無いか。君は餘分に當番に爲れることを怒つて居るやうだが、然し、年長の尊敬すべき將校に詫びることが君に取つて何でさう苦しいんだ。ボグダアニイチは何であらうと、右に左、尊敬すべき年を取つた大佐では無いか。

君は、それでも、怒つて居て、聯隊を侮辱することなどは何とも思つて居らん」参謀の大尉の聲は震へ始めた。「貴下は、ねえ、聯隊へ來てから未だ何日も経たん、君は、今日は此所に居るだらうが、明日に爲つたら、將官附に爲つて、何處へか行くか知れんのだ、君は、他人が「バアヴログラアの將校の間には盜賊が居る」と云ふのなどは何とも思はんだらう。けれども我輩どもはそれは苦しいのだ。何うだ、デニソフ？。われ／＼は苦しくは無いか」

デニソフは依然物を云はず、動か無かつた、彼のピカ／＼する黒い眼が、時々、ロストオフをジロリ／＼見た。

「君の自尊心が君には貴くつて爲方が無いのだ、それで、君は、詫びる氣が、無いのだ」と、参謀の大尉は讀けて、「けれども、聯隊で年を取り、神の御意次第で、聯隊に居て死なうと思ふわれ／＼老人は、われ／＼に取つては聯隊ほど貴いものは有りはせん、ボグダアニイチはそれを知つて居つたのだ。おい、われ／＼には聯隊が一番貴くは無いかね、君それでは不可よ、それ

では不可よ。君は怒るかも知れんが、斯う云つたら、けれども、我輩は有りの儘の眞實を云つて居るのだ。君、それでは不可よ」

で、参謀の大尉は起ち上つて、ロストオフに背部を向けた。

「その通りだ、畜生」と、デニイソフは、跳びあがつて、云つた。「さア、ロストオフ、さア」ロストオフは、眞赤になり又直ぐ蒼く爲つて、將校の顔を順々に見た。

「いや、諸君、いや……君たちは考へ違ひだ……僕には善く解つてる、君たちは僕の心持を取り違へてる……僕が……僕に取つては……聯隊の名譽の爲めには、僕は……いや、それは云ふまい。僕は、それを實行で證明する、そして、僕に取つても聯隊旗の名譽が……うん、何うでも宜い、それは眞實だ、僕が悪いだ」。ロストオフの眼には涙が出て居た。「僕が悪かつた。誰にも失敬だつた。さア、これで宜かア無いかね」……

「やア、結構だ、伯爵」と、参謀の大尉はグルリと振り向いて、大きい手でロストオフの肩を叩いて、叫んだ。

「おい、衆皆」と、デニイソフは叫んで、「立派な男ぢやア無いか」

「結構です、伯爵」と、参謀の大尉は、ロストオフの告白を賞めるかのやうに、爵位を云ひ

始めて、繰り返した。「行つて、詫びて來給へ、閣下」

「諸君、僕は何でも爲る、僕はこれからは一言も云は無い」と、ロストオフは、懇願するやうな聲で云ひ張つて、「けれども、僕にやア何うしても詫びられ無い、何うあつても、不可、諸君が何と云つても宜い。小さい兒童が謝罪るやうに、何うしたつて詫びられるかい」

デニイソフは笑つた。

「詫び無ければ、ますく君の爲めに善く無からうよ。ボグダアニイチは物を忘れ無い男だ君の執拗に對して君に思ひ知らせることがあるだらうせ」と、キイルステンが云つた。

「いや、何うして、執拗ぢやア無いんだ。僕は、何と云つて宜いか解ら無い心持が爲るんだ。僕にやア詫られ無い」

「では、君の勝手にするさ」と、参謀の大尉は云つた。「その悪漢は自分では何うしたのかね」と、デニイソフに尋いた。

「病氣だといふ届を爲たんだ、明日は、彼奴の名前を隊の名簿から除つて了まう命令が来る筈なんだ」

「成るほど病には違ひ無いな、それより外に説明の爲やうが無いわい」と、参謀の大尉は云

つた。

「病でも、病でなくても、彼奴は我輩の眼に掛らんやうに爲るが宜いんだ——我輩はその時は生して置かん」と、デニソフは、凄じ権幕で叫んだ。

ジェルコフが、部室へ入つて来た。

「何うして此様な所へ来たんだい」と、將校たちが一遍に叫んだ。

「戦線へ、諸君。マックは彼の全軍を擧げて降服したんだ」

「痴愚を云つちやア不可」

「僕は自分で彼を見たんだ」

「何だつて？ 手も脚も揃つて生きて居るマックを見たのかい？」

「戦線へ。戦線へ。此様な善い報告を持つて来たんだから、一壇當てがへよ。何うして此所へ来たんだい」

「僕は彼のマックの悪魔のお陰で 又聯隊へ追ひこくられちやつたんだ。塊地利の將官が僕のことを訴へたんだ。僕はマックの歸つた祝詞を述べただけなんだ。……何う爲たい、ロストオフ、湯から出たばかりと云ひさうな顔ぢやア無いか」

「この二日ばかりは随分酷い目に逢つたんだ、君」

聯隊副官が入つて来て、ジェルコフの持つて来た報を確めた。聯隊は次の日出發すべき命令の下にあつたのだ。

「戦線へ、諸君」

「やア、有り難いな、われ〜は此所にへバリ付いて居るのは、最早飽々して居たんだ」

(六)

クツウゾフは、後方の、イン川（ブラウナウの）とツラウン川（リンツの）の橋を破壊して、維也納の方へと退却した。十月の二十三日に、露西亞軍はエンス川を渡つた。露西亞軍の輜重車輛と砲と、諸兵の隊列は、その日の眞晝頃橋の兩側のエンスの市を横ぎつて、長い絲のやうに延びて居た。暖かで、秋らしい日で、雨が降つて居た。橋を保護する爲めの露西亞軍の砲兵陣地の立つて居た高地からの廣い眺望は、吹き降の雨のモスリンのやうな帳帷の爲めに狭く限られて居たが、やがて、廣くなつて、輝いた日光の下で、遠くの物體が、假漆で塗つた被衣を掛けたやうに、艶々しく明瞭と見えた。下には、小さい市の白い家、赤い屋根、寺院、橋が見

え、その橋の兩側を、露西亞軍の一緒に集まった集團が流れて居た。ダニユプ河の曲がつた所には船と、その河へ流れ込んで居るエンス川の水で取り圍かれた島と、廣い園のある城が見え、ダニユプ河の左の險しい岸は、その彼方には緑の樹の頂上や青んだ谷が神秘的に遠くへ續いて居た松樹林で蓋はれて居た。自然に生ひ繁げつて、人間の手の更に觸れた痕の無いやうに見えたその松樹林の彼方に、尼寺の塔が幾つか立つて居り、それから、前面の遙か遠方の、エンス川の遠くの側の丘の上には、敵の斥候が見えた。

高地の砲の間に、後衛の司令官の將官と、その幕僚の一人の將校が立つて、望遠鏡で地形を偵察して居た。二人の少許後に、砲身に腰掛けて、總司令官から後衛へ差遣されたエンスヴィイツスキイが居た。エンスヴィイツスキイに隨いて來た哥薩克兵が、背囊と水筒を彼に渡した、そして、彼は、バイと純粹のダブル・クムメルを將校たちに薦差つて居た。將校たちはエンスヴィイツスキイを取り圍いて、嬉れしさうな團欒になつて、或る者は踞み、或る者は、濕つた草の上に、土耳其人のやうに、脚を十字に組み合せて坐はつて居た。

「左様、此所の城を建てた奥地の皇族は、可なり伶俐な人ですな。實に、景色の好い所だ。何故食べませんか、諸君？」と、エンスヴィイツスキイが云つた。

「何うも有り難うございます、公爵」と、さういふ位置の高い參謀官と話を爲る機會の有るのを喜んで居る將校の一人が答へた。「景色の好い所です。われ／＼は直ぐ園の傍を進んで來ました。鹿二匹と立派な家が見えましたせ」

「ご覽なさい、公爵」と、今一人が云つた、この男はバイが食ひ度くつて堪まら無かつたのだが、それでも、何分手を出すのが耻かしいので、四邊の田舎を眺めて居るやうな風を装はつたのだ。「ご覽なさい、我軍の歩兵は今丁度彼所へ達しました。彼方の、村の後の牧場の所で、そのうちの三人が何か引摺つて居ます。奴等は、奇麗に御殿を空にするでせう」と、明白に贊成な風で云つた。

「全く」と、エンスヴィイツスキイは云つた。「いや、だが、我輩の望みは、濕つた奇麗な口のかなでバイを噛みながら、斯う云ひ足して『彼方へ忍び込むことなんだ』と、山腹に見えた塔のある尼寺を指した。彼は、眼が細くなつてピカ／＼して、微笑んだ。「左様、それが一等善いぢやア無いか、諸君。將校たちは笑つた。」

「少しは尼を威嚇した方が宜んですがねえ、奴等の間にやア伊太利娘が居るといふ話ですせ。確に、僕はその爲めなら五年位命を縮めても惜しく無いですよ」

「奴等も随分退屈だらうよ」と、少し大膽な將校が、笑ひながら、云つた。

此方では左様なことを云つて居る間に、前面に立つて居た幕僚の將校は、將官に何物かを指し示めた、將官は望遠鏡で見た。

「左様、左様なんだ、左様なんだ」と、將官は、望遠鏡を眼から離して、肩を揺すつて、腹立たしさうに云つた、「敵は彼奴等が川を越す所で撃たうと爲て居るんだ。それだに、何故彼奴等は彼様に長くグズ付いて居るんだなア？」

その方向を見れば、肉眼で、敵と、牛乳のやうな白い煙が立ち登つて居る砲兵陣地とが見とめられた。煙の後から直ぐ、遠くの砲の音が聞えて來た、そして、確に、我軍は渡川の場所へと急いで居た。

ネスヴィイツスキイはフウ〜云ながら立ち上つて、微笑みながら將官の所へ行つた。

「中食を爲さいませんか、閣下」

「何うも不可な」將官は、彼には返答を爲無いで、斯う云つて、「我軍は餘まりグズ付いて居る」

「私が參つて宜しいでせうか、閣下」

「左様、行つて呉れ給へ、何うか」と、將官は云つて、最早出してあつた命令を、今一度細に練り返した、「驃騎兵に最後に渡つて、橋を焼けといふこと、橋の上へ燃燃材料を集めて置くことの命令を傳へて呉れ給へ」

「承知しました」と、ネスヴィイツスキイは答へた。馬を番して居た哥薩克兵を呼んで、背囊と水筒の始末を言ひ付け、そして、自分は、重い體軀を軽々と鞍の上へ揺り上げた。

「いよ〜、尼さんの所へ尋ねて行きますせ」と、微笑みながら、彼を見まもつて居た將校たち云つて、そして、山の下の曲つた路を乗り進んだ。

「さア、大尉、何處まで遠くか爲つて見給へ」と、砲兵將校に振り向いて、將官が云つた。

「時間潰に悪戯爲つて見るさ」

「砲に就け」と、將校が號令した、と、直ぐに、砲兵は勢好く焚火の所から駆け付けて、大きい幾つかの砲に裝彈した。「一」と、彼等は、號令の言語を聞いて、第一番は敏捷く跳び返つた、砲は耳を聳するやうな金屬の音で迂鳴つて、山の下の我軍の將士の頭の上を、シユウ〜云ひながら、榴彈が飛んで行つた、そして、敵から忽然手前で落ちて、立登る煙で、それが落ちて破裂した場所を示めた。



將校と兵の顔がその音で勢付いた。誰も彼も起ちあがつて、手の掌にあるやうに見える、下の我軍の運動と、進んで来る敵の状態を一生懸命に見まもつた。

恰もその時、太陽が雲の陰から全然出て来た、そして、唯一弾の響き渡つた音と、輝いた太陽のクワツとした光が、互に雜つて溶け合つて、軽快な陽氣さの、人の心を勢付ける一つになつた印象を形造つた。

## (七)

橋の上を最早敵弾が二つ飛んだ、そして、橋の上は大混雜に爲つた。橋の中央にネスヴィイツスキイが立つて居た。馬を下りて、欄干へ押し潰されさうに肥つた體を押し付けられて立つて居た。彼は、二匹の馬の轡を執つて五六歩後方に立つて居た自分の哥薩克兵を、笑ひながら顧みた。ネスヴィイツスキイが、先方へ行かうとする度毎に、進んで来る兵と輜重車が彼に突つ掛つて来て、又欄干へと彼を突き除けて了まうのであつた。彼は、微笑んで居るより外爲方が無かつた。

『おい、こらア、其所の奴』と、車輪と馬へグン／＼押し付けて来る歩兵の間を無理やりに通

らうと爲て居た輜重車を監して居る兵卒に、哥薩克兵は斯う云つた、『貴様何うしやうと云ふんだい、おい、寸時待てよ、將官がお通りなさらうてんぢやア無いか』

が、輜重兵は、將官と云つたのとは耳にも入れぬ體で、路を塞いで居る兵卒たちに喚いた、『やアい、衆皆、左へ寄れ。少し待つてろ』が、衆皆は、肩と肩を連らね、銃劔を列べて、一つの密集になつて、橋の上を進んだ。欄干から下を見ると、公爵ネスヴィイツスキイには、エンスのザワ／＼いふ速い、けれども、高きは無い川浪が橋臺の周圍で渦を巻いて、互に追つ掛け合ひながら流れ下るのが見えた。橋の上を見ると、何れも此れも同なじに、蓋被の掛かつた軍帽、背囊、銃劔、長い施條銃で、軍帽の下には、廣い顎、窪た頬、ダラリと草臥たやうな態の顔があり、脚は、へバリ付く泥で被はれた橋板の上を、動いて居る兵卒の生きた波浪が流れて居た。時々、兵卒の單調な流の間に、エンスの川浪のなかの白い泡の浪頭のやうに、兵卒とは全然違つた型の顔の、外套を着た將校が割つて通つた。時には、川面をグル／＼廻つて流れる木片のやうに、馬を下りた驃騎兵だの、從卒だの、市の住民だのが、兵卒の波の間に混つて橋を越えた。時には又、川を流れ下る丸木のやうに、橋の上を、四方を圍まれて、高く物を積んで柔皮の外被を被けた輜重馬車が動いた。

「やア、堤防の決れた河のやうだなア」と、爲方無ささうに立ち止まつて、哥薩克兵が云つた。「未だ彼方に多勢居るかいかい？」

「百萬人マイナス一人」と、裂けた外套の調戯けた兵卒が云つて、胸を爲て、直きに先きへ行つて、見え無く爲つた、その後から、今一人の兵卒、少し年取つたのが来た。

「奴が『奴とは敵を云つたのだ』今橋の上をドシ／＼撃ちだしたら」と、年取つた兵卒はその同行者に向いて、怖さうに云つて、「お前なぞア身體を掻き所ぢやア無えだらうせ」で、そのタンポフ兵と、同行者は通つて了まつた。その後から、輜重車に乗つた今一人の兵卒が来た。

「やい、畜生、俺の脚絆を何處へ置きやアがつたい？」と、輜重車を追つ掛け、その後の方を掻き探して、従卒が云つた。で、それも又通つて了まつた。

それから、確に酔つて居たらしい幾人かの賑かな兵卒が来た。

「で、奴は跳び込んで、臺尻で、齒を眞向から喰はしたんだ」と、兵卒の一人が、腕を廣く振つて、さも可笑しさうに云つた。

「宛然旨い鹽豚肉の味が爲たい」と、ハア／＼笑ひながら、今一人が答へた。それ限りで、その連中は行つて了まつたので、ネスヴィイツスキイには、誰が齒を打たれたのか、鹽豚がそれと何

う關係があるのか解ら無かつた。

「左様、衆皆最早大急ぎなんだ。奴が冷たい鉛の片を飛ばしだせば、衆皆殺されだすと思つて居るんだらう」と、下士官が、腹立しさうに、叱り付けるやうに云つた。

「俺の傍を迂鳴つて通つた時にやア、伯父さん、銃丸がね」と、大きい口の兵卒が、可笑しさを堪らへ切れぬ體で、云つて、「俺は全然痺れあがつちやつた。眞個に、慄へ上がつたんぢやアねえかね」と、自分の恐怖を誇るやうな態で、云つた。

それも、直き行つて了まつた。その後は前に通つた孰とも違つた荷馬車が来た。二頭立ちの獨逸の驛遞馬車で、宛然一世帯全體積んであつた。馬は、一人の獨逸人に導びかれ、その後には圖抜けた大きい乳の綺麗な斑の牝牛が縛つてあつた。積みあげた羽毛褥の上に、小さい赤兒を抱いた女と、年寄りの女と、顔立の好い頬部の桃色な獨逸娘が坐つて居た。彼等は、明白に、特別の許可を得て、軍隊の間へ入つて、避難する田舎人であつた。總ての兵卒の眼が、女たちの上に向けられた、そして、荷馬車が、一歩位づゝそろ／＼と動いて行く間、兵卒の言語は悉皆二人の女のことであつた。何の顔も、その女たちに對する怪しからん考想を反射する、何れも此れも同なじな微笑を表はして居た。

「やアい、腸詰、動いてきやアからア」

「お前のお娘を俺に賣らんかい」と、今一人の兵卒が、獨逸人に聲を掛け、獨逸人は、腹を立てた不安の體で、伏目になつて急ぎ足になつた。

「美装込んで居やがるぢやア無えか。やい、畜生奴等」

「おい、何うだい、奴等の所を宿舎に充て、貰らひ度えだらう、フェドオトフ」

「俺だつて一寸と腕はあるんだからな、朋輩」

「何處へ行くのかね」と、林檎を食つて居た將校が尋いた。これも半ば笑顔で、綺麗な娘を見詰めて居たのだ。獨逸人は眼を閉つて、言語の通じ無いことを見せた。

「宜ければ、あげませう」と、云つて、將校は娘に林檎を與た。娘は微笑んで、それを受け取つた。ネスヴィイツスキイも、橋の上の外の衆皆と同じに、女たちが通つて了まうまで、一度も眼を離さずに見て居た。女たちが行つて了まうと、後は又前と同じの兵卒が、同じやうな話を爲ながら來たが、やがて、衆皆ビタリと止まつて了まつた。屢く有る通、橋の袂で、輻重車の馬が荒れだしたので、衆皆は待た無ければなら無かつた。

「何んだつて奴等ア止まつてやがるんだなア。最早秩序も何も有りやアし無い」と、兵卒た

ちが云つた。「何處へ押してくんだい？」「こん畜生」一寸待て無えのかい」奴が橋を焼いたんだと此れ所ぢやア無かつたらうなア」

「見ろ、將校も彼様な所へ押し付けられてるぢやア無えか」と、兵卒たちは、止まつた群集の諸所で云つた、やがて、見廻しながら、橋の下へと推し進んで居た。橋の下のエンスの水を見返つて居るうちに、ネスヴィイツスキイは、倏忽、不思議な音を聞いた、非常に速く、近くなつて來る何物か……大きい何物かの音であつた、と思ふうちに、川で大きな水音が爲た。「彼様な所まで來やアからア」と、傍に立つて居た兵卒が、音の方を見返つて、荒々しく云つた。

「奴はわれ〜に今少許速く行けと催促してやがるんだせ」と、今一人が不安さうに云つた。群集は又動きたした。ネスヴィイツスキイは、砲弾だと解つた。

「おい、哥薩克兵、馬をよこせ」と、云つた。「さア退いた。退いた。路を開けろ」

非常な努力で、彼は馬に乗り得た。始終怒號りながら、前へと動いた。兵卒たちは、彼を通す爲めに一所に押し潰まつたが、直ぐ又、彼の脚を押し潰ぶしさに彼の周圍に推して來た、彼に一番近かつた連中が悪いのでは無かつた、彼等は、後から尙一層烈しく前へ壓されて居た

からだ。

「ネスヴィイツスキイ。ネスヴィイツスキイ。おい、舊友」と、その途端に、後から叫ぶ皺  
嗄た聲を聞いた。

ネスヴィイツスキイは、振り返つた、と、十五歩程離れた所に、動いて居る兵卒の生きた團塊  
に掛け隔てられて、略帽を頭の後へ載せ、裘外套を勢好く肩へ羽織つたヴァアスカ・デニ  
ソフの黒い髪のクシャ／＼になつた赤い顔を見た。

「路を開けるやうに云つて呉れ、畜生奴等」と、太く激昂して居るらしかつたデニソフは  
怒號つた。彼は、ビカ／＼する、石炭のやうに黒い眼を、血走つた白眼が見えるまで轉がして、  
顔と同じに赤い裸の手に持つて居た劔を鞘のまゝで振つた。

「やア、ヴァアスカ」と、ネスヴィイツスキイは、嬉しさうに答へた。「君何う爲るんだい？」  
「隊が進め無いんだい」と、意地悪るさうに白い歯を見せ、綺麗な青の純種の「ベツウイン」  
に拍車を當てながら、怒號つた、馬は、銃劔が打當る度毎に耳をビク／＼させ、鼻嵐を吹き、  
轡から泡を飛ばし、橋板を調子の好い音で踏んで、若し乗者が許るせば、直ぐに欄干を跳び越  
してしまひさうな勢であつた。

「この次ぎは何だ？羊だ。全然羊だ。後へ……退け……やい、待て、輻重車なんざア河へ  
叩つ込め。切るぞ」と、怒號つて、眞個に劔を抜いて、振り廻しだした。

兵卒たちは、怖れた顔を爲て、一緒に塊つた、で、デニソフはネスヴィイツスキイに合した。

「今日は何うして飲で居無いんだい？」と、彼が傍へ来た時に、ネスヴィイツスキイが云つた。

「飲む間を呉れやがら無いんだ」と、ヴァアスカ・デニソフは答へた。「終日聯隊は方々引摺  
り廻されたんだ。戦闘は結構だ、けれども、これちやア、何のことだか解らん」

「今日は甚く奇麗ぢや無いか」と、デニソフの新しい裘外套と、毛皮の鞍褥を見てネスヴィ  
イツスキイが云つた。

デニソフは微笑んで、佩囊から香氣のブン／＼する手巾を出した、そして、それを、ネス  
ヴィイツスキイの鼻へさし付けた。

「確に、實戦に加はるんだ。顔を刺つて、齒を掃除してよ、身體に香水を注いだんだい」

哥薩克兵の随いたネスヴィイツスキイの堂々たる姿と、劔を振つて、絶望的に怒號つて居た  
デニソフの決心の表はれた顔が、非常な効果を得て、歩兵を止めて、二人が橋の彼方側へ行  
くことができた。ネスヴィイツスキイは橋の袂で、命令を傳へるべき先方の大佐に逢つて、自